ぶ。常住ならむことを思ひて、變化の理を知らねばなり。

【通解】 人は、蟻のやうに集まつて、東西に急ぎ、南北に走つてゐる。其の中には、身分の高い人もあれば、低い人もあり、老人もあれば、若者もあり、目指して行く所もあれば、又歸る家もある。かくして夕には疲て、朝には起きる。さうして營々としてやる事は一體何か。要するに只むやみと長生をしたがり、利益を求めて、止む時がないのである。身を養つて、何事を待つのか。待つて得る所は只老と死とにある。その老死の來る事は非常に速かで、刹那々々の間にも猶豫なくやつて來る。そんなものを待つ間、何の樂みがあらう。心の迷つてゐるものは、その老死の來る事を恐れない。それは浮世の名譽利益に惑溺して、自己の落ちつくべき先——老死の近い事を顧みないからである。愚かな人は又斯うして老死の速かに來る事を悲む。それは世の常住不變であるやうにといふ事を願つて、物皆變化するといふ大理法を知らないからである。

【文旨】 世の人の營々として名利を貪り長生を望んで、無常の身に迫つてゐる事を知らぬ愚かさを說いた文である。これは徒然草特有の筆致——王朝文學の系統を引いた文調でなくて、方丈記流の漢文直譯口調である。どこ迄も對句仕立で、まづ結果を說いて、それから原因を說くといふ句法である。文末の一節の如きがそれで、

一惑へるものは之を恐れず＝名利に溺れて先途の近きことを顧みねばなり

一愚かなる人はまた之をかなしぶ＝常住ならむことを思ひて變化の理を知らねばなり

といふ風の純然たる對句仕立である。方丈記海道記など凡て此の調で、往々にして徒然草にも出て來る。これが當時の時文調で、それに多少の文飾を加へたといふ程度だらう。

【語義】 ○蟻の如くにあつまり 世間の人のうよ〳〵と澤山に集まつて居る形容。街頭に立つて見た趣の立文である。○いとなむ所何事ぞや さうして何事をするのか。「いとなむ」は經營する、行ふ、營々としてやるの意。○生を貪り 厭く迄も長生をしようとする意。○期するところ 期待する所。こゝでは待ち受けてゐて慥かに間違なく來る者はの意。○念々の間に 時々刻々の間に於て。「念々」は刹那々々で、佛教上に極めて短い瞬間をいふ語。○これを待つ間 老と死との來るのを待つ間。○惑へる者は 名利の爲めに心の迷つてゐる者は。○之を恐れず 斯うした事實を恐れない。老死は一刻の猶豫もなくやつて來て、其の來ることが實に速かだといふ其の事實を恐ろしいと思はぬ。○先途 ゆくさき、到著すべき所。老死を指していうたのである。○かなしぶ 悲む。○常住ならむことを思ひて 世が常住不變であるやうにといふ事を考へ願つて。○變化の理 宇宙の物は皆常に變化して止まぬ、常住のものは一つもないといふ大きな眞理。

第七十五段

つれ〴〵わぶる人は、いかなる心ならむ。まぎるゝ方なく、たゞ一人あるのみこそよけれ。世に隨へば、心外の塵にりばはれて、惑ひ易く、人に交れば、言葉よそのきゝに隨ひて、さながら心にあらず。人に戯れ、物にあらそひ、一度はうらみ、一度はよろこぶ。そのこと定れることなし。分別妄に起りて、得失やむ時なし。まどひの上に醉へり、醉の中に夢をなす。走りていそがはしく、ほれて忘れたること、人皆かくのごとし。いまだまことの道を知らずとも、緣を離れて身をしづかにし、事にあづからずして、心を安くせむこそ、暫く樂ぶともいひつべけれ。生活、人事、伎能、學問等の諸緣をやめよとこそ、摩訶止觀にもはべれ。

【通解】 無聊で所在ないのをつらがる人は、一體どういふ心なのだらう。心の紛れる事もなく、只一人つくねんとして居るのが一番よい。世間につれてやつて行けば、心は外界の物に奪はれて、色々と迷ひ易く、人と交つてゐると、何かいふのにも、自分の言葉が他人の氣持につれて出て來て、丸つきり心にもない事をいふやうになる。そして相手の人に對して戯れ、又何かにつけて人と爭ひ、恨みもすれば、喜びもする。そのする事にとんと定まりがない。色々とつまらぬ量見がむやみと起つて來て、利害得失の念の止む時が無い。迷ふが上に醉ひ、醉の中に夢を見てゐる。そして奔走に勞れて、惘然として本然の意識を失つてゐること、人皆斯くの如き狀態だ。まだほんとの道を知らないにしても、俗界の諸緣を離れて身を靜かにし、世の俗事に關與しないで、心を安らかにしようのこそ、かりそめながらもまア〳〵ほんとに樂むものだともいふ事が出來よう。生活、社交、伎能、學問等の諸々の世の緣を止めて了へと、摩訶止觀にも書いてあります。

【文旨】 これも世人の徒に醉生夢死するの愚を述べて、宜しく諸緣を放下して閑寂を旨とし、よしや眞の道は分らぬ迄も、せめてかりそめながらも心の眞樂を味ふべきだといふ事を說いたのである。文調はやはり其の頃の時文に近いといふ方だらう。

【語義】 ○つれ〴〵わぶる人　徒然を苦む人、所在なさをつらがる人。○まぎるゝ方なく　心が他に紛れる所なく。何か定まつた用向があるとか、他人と相對してゐるとかすれば、それに紛れて、ついうか〳〵と暮して了ふ。只一人ゐると心の紛れる事がないから、それからそれへと獨り靜かに頭の內に色々な考を思ひ浮べたりしてゐる。それが「つれ〴〵」である。さうあるが一番よいといふのである、○たゞ一人あるのみこそよけれ　たゞ一人で居るのが一番よい。「ある」は在る、「のみ」は强めの語。○世に隨へば　世につれて行けば、世の風習に從つて、そのまに行動してゐればといふ思想。○外の塵　外物、外界に在つて我が心を刺戟するもの。○言葉よそのきゝに隨ひて。　自分の言葉が他人の聞きに從ふ。自分のいふ事が他人の耳にどう聞えるかといふ氣持が主になつて、自然自分の言ふ言葉が純眞な自己の本心のまゝでなく、聞く人の氣分に從つて口から出るやうになるといふのである。殊更さう努力するといふよりも、勢ひさうなるものだといふ心持の表現と考へられる。○さながら心にあらず　心そのまゝではない。我が心に思ふ儘をいふでなく、心にもない事をいふの意。いふ詞がそつくりそのまゝ自分の心通りでないといふ思想。○人に戯れ　人に對して戯れ。人にじやうだん口の一つもきくといふのである。○物にあらそひ。　何かにつけて人と爭ひ。結局は、人と爭ふといふ思想。人に戯れ、物に爭ひと對句にしたまでで、つまり或は戯れ、或は爭ひといふ意に過ぎない。○一度は　或は。只一度といふ意ではない。或は恨み、或は喜ぶ——恨みもすれば喜びもするといふ意。○そのこと定れることなし　そのする事に定つた事がない。仲よくしてゐるかと思へば喧嘩する、恨み合ふかと思へば又喜びかはしてゐる、敵になつたり味方になつたり、何が何やら俗人共のやる事はとんと定まりはない、といふのである。○分別妄に起りて　利害上の量見がやたらと起つて。「分別」は今も「分別ざかり」「分別くさい」などいふのと同義で、「この方がよい、この方がわるい、これは損だ、これは得だ」と、物事に對していろ〳〵と考へを附ける心の働きをいふ。○得失やむ時なし　利害得失の念のやむ時がない。世に處してゐると、のべつに利害問題が生じて來て、それを判斷する念慮の休まる時もないといふ意である。○まどひの上に醉へり醉の中に夢をなす　迷つてゐる上に更に醉つてゐる、そして醉つてゐる中で又夢を見てゐる。醉生夢死といふ熟語をこんな具合に延ばして書いたまでである。○走りていそがはしく　奔走に忙しく、東奔西走して身のやすまる隙もない。○ほれて忘れたること　心が惘然として本然の心の意識を失つてゐる事は。「ほれて」は心がぼーッとする、卽ち惘然として正しい自意識を失ふのをいふ。○まことの道　ほんとの道。こゝは勿論佛教の正しい道をいふ。○緣を離れ　世の中の色々な俗累を離れ。「緣」はゆかり、凡ての世間的の關係をいふ。○事にあづからずして　世の中の俗事に關與しないで、何事にも手を出さずに。○暫く樂ぶ　まア〳〵それでも兎も角も心の眞樂を得る。○生活　生產を營んで世に暮しを立てて行くこと。○人事　交際、他人とつき合ひ、人中に出で交らふこと。

○伎能　技術藝能。○摩訶止觀　書名、天台宗三大部の一で十卷ある、支那隋初の高僧智者大師が法華觀心の行法を口述し、弟子の章安尊者が筆記したもの。

第七十六段

世のおぼえ花やかなるあたりに、嘆きも喜びもありて、人おほく往きとぶらふ中に、聖法師のまじりて、いひ入れたゝずみたるこそ、さらずともと見ゆれ。さるべき故ありとも、法師は人にうとくてありなむ。

【通解】世間からちやほやと大層もてはやされて居るやうな家に、不幸なり慶事なりがあつて、人が多く往訪する中に、坊さんが雜つて、案内を乞うて立つてゐるのを見ると、あんな事はせずともよからうにと思はれる。たとひ何か然るべき緣故があつても、やはり出家は世人と疎々しくて、人の事にかゝはらずにゐてほしいものだ。

【文官】「法師は人にうとくてありなむ」といふのが一文の眼目である。恐らく當時の僧侶は、權門勢家に出入して、世間的に出世する事を努めたらう。それを見るのが兼好に取つてはいやで〳〵たまらぬ事の一つであつたので、自然かういふ事が時々筆端にあらはれて來るのである。

【語義】○世のおぼえ花やかなるあたり　世間の評判の花々しい邊。其の當時に於て飛ぶ鳥も落すといふやうな權門勢家をいふのである。○嘆きも喜びもありて　嘆き事でも又は喜び事でもあつて。「嘆き」は葬式などの凶事をいひ、「喜び」は冠婚等の吉事をいふ。○往きとぶらふ　往訪する、見舞に行く。「とぶらふ」はとむらふに同じ、訪問する、見舞ふ。○聖法師　特に行を主とする僧の事をいうた熟語としての用例も見受けられるが、こゝはさうした特定の僧を指したものでなく、一般に僧の事をいうたものである事は、直後に「法師は」とあるので明かである。畢竟同義語の重用か、又は「聖とか法師とか言はれる坊さんが」といふ心持の用語例であらう。○いひ入れたゝずみたる　案内を乞うて佇んでゐる。「いひ入る」は申し込む、卽ち案内を乞ふ。「たゝずむ」は佇立する。○さらずともと　そんな事をせずともよからうにと。「さらず」は「さあらず」の約、「ともと」は「ともありなむと」の略と見てよからう。○見ゆれ　思はれる。見れば……と思はれるの意。○さるべき故ありとも　然るべき緣故があつても。特にその家を訪問し親しく交るべき緣故があつての意。○人にうとくてありなむ　人に疎くてあるがよい。世人の事にかゝはらぬがよい、といふのである。こゝの「ありなむ」は未來完了の形から轉じて、それがよい、さうあつてほしいといふ心持をあらはした例である。勿論「あらなむ」よりはずつと消極的で、誘へ望むといふよりも、さうした方を擇ぶといふ心持である。

第七十七段

世の中に、そのころ人のもてあつかひぐさに言ひあへること、いろふべきにはあらぬ人の、能く案内知りて、人にもかたり聞かせ、問ひ聞きたるこそうけられね。殊にかたほとりなる聖法師などぞ、世の人の上は、わが如く尋ね聞き、いかでかばかりは知りけむと覺ゆるまでぞ、言ひ散らすめる。

【通解】世間で、當時人が噂の種として語り合つてゐる事を、そんな事にかゝづらふべきでない人が、よくその內情を知つて、人にも語り聞かせ、又色々と人に尋ね聞いたりしてゐるのは、どうも納得が出來ない。特に片田舍

の坊主などに限つて、世間の人の事をば、丸で自分の事のやうに聞き出して來て、どうしてこんなによく知つてゐるだらうと思はれるほどに、精しくしやべり散らすやうである。

【文旨】　其の當時世上の話題になつてゐる事を、當然そんな事とは沒交渉なるべき人が、ばかに精しく心得てゐて、喋々としやべつて聞かせる、又その事を根ほり葉ほり人に尋ねたりする、さうした態度を「うけられね」と手もなくくさしておいて、さうした事が邊土の坊主などに特に多いというて、當時の俗坊主どものさうした樣子を、嫌惡の心持で輕く描寫したのである。

【語義】　○そのころ　その當時、その時分。○もてあつかひぐさに　持扱ふ種として、噂の種として、好話題としての意。「ぐさ」は種、材料。○いろふべきにはあらぬ人　取扱ふべきではない人、そんな事に關係すべきでない人、そんな事とは沒交渉であるべき人。○案內知りて　內部の樣子を知つて、事情をよく心得て居て。○問ひ聞きたる　人に尋ね聞いてゐる。更に精しく事の事情を究めようとして、根ほり葉ほり人に尋ねるといふ意。○うけられね　納得が出來ない。どうもそれをよいとして承引されないといふ思想。○かたほとり　片田舍、邊土。都から離れた邊鄙な所をいふ。○聖法師　前段の用語例と同じくこれも一般に坊主の事をいうたものと考へられる。○人の上は　人の事をば。○わが如く　我が身の上の事のやうに、丸で自分の事のやうに。○尋ね聞き　人に尋ね問ひ聞き出して來てといふ思想。○覺ゆるまでぞ　思はれる程に。○言ひ散らすめる　しやべり散らすやうに見える。言ひ散らすものだといふ思想を「める」といふ推量の語で婉曲に述べたといふ迄である。

第七十八段

今やうの事どもの珍しきを、いひひろめもてなすこそ、又うけられね。世に事ふりたるまで知らぬ人は心にくし。今更の人などのある時、こゝもとに言ひつけたることぐさ、物の名など、心得たるどち、かたはし言ひかはし、目見あはせ、笑ひなどして、心しらぬ人に心得ず思はすること、世なれず、よからぬ人の、必ずある事なり。

【通解】　當世風の色々な珍しい事を、言ひ廣め珍重がるのが、又どうもうけとれない。世間で言ひふるしてゐるやうになる迄知らずにゐる人は如何にも奧ゆかしい。今新たに來た人などのある時、自分の方で言ひつけてゐる言葉や物の異名など、それを承知してゐる同志で、お互に一寸片端だけ言ひかはし、目と目を見合はせ、笑つたりなどして、その意味の分らぬ人に、何だか變に思はせることは、世間なれぬ、教養のない人の、必ずやる事である。

【文旨】　前節の「うけられね」を承けて、もう一つ「うけられぬ」事を擧げたのである。この方が委曲を悉した筆致で前節よりも餘程面白い。前段を承けて、特に言葉を主題として述べた趣で、從つて「今やうの事」の「事」を特に「言」と解し、「當今の珍らしい流行語」の義とすべきだとの說もあるが、立文主觀としては、事柄言葉それ等を一般的に「事」というてゐるものと考へられる。

【語義】　○今やうの事どもの　當世風の色々な事の。○いひひろめもてなす　いひ廣め珍重がる。「もてなす」は取扱ふ、いひひろめてあれこれとそれを取りなすといふ意。○又うけられね　又納得が出來ない。○事ふりたるまで　いひふるしてふるくなつてゐるまで。○心にくし　奧ゆかしい。○今更の人　今新に來た人。會合の場所などへ始めてやつて來た人をいふ。○こゝもとに　こちらで、自分達の方で。○ことぐさ　言種、言葉。常に言葉の種になつてゐるもの——口癖のやうにいひつけてゐる言葉の意。○心得たるどち　承知してゐる同志、分つてゐる連中。○かたはし言ひかはし　片端だけお互にいひ交はし。完全にいはずに、一寸一部分をいひ交はすといふ意。○

心しらぬ人。その意味の分らぬ人。○心得ず思はす　變に思はせる。何をいふのやら分らぬので、變な事をいふものだと、不快な思をさせる、といふ意。○世なれず　世間なれず。世態人情になれない、世の酸いも甘いも解してゐないの意。○よからぬ人。下品な、ものの分らぬ、教養のない人。○あること　やる事。「人にある事」「人のやる事」――それを古文で「人のある事」と表現した例がよく出て來る。

第七十九段

何事も入りたゝぬさましたるぞよき。よき人は、知りたる事とて、さのみ知りがほにやはいふ。片田舍よりさしいでたる人こそ、よろづの道に心得たるよしのさしいらへはすれ。されば世にはづかしき方もあれど、自らもいみじと思へるけしき、かたくなり。よくわきまへたる道には、かならず口おもく、問はぬかぎりは言はぬこそ、いみじけれ。

【通解】何事でも深く立入らない樣にしてゐるのがよい。身分のある物の分つた人は、知つてゐる事だからとて、さう何も知つたか振をしはしない。片田舍からのこ〳〵やつて來た人に限つて、諸道に心得を持つてゐるといふ風の挨拶をするものだ。從つて仲々どうして都恥しいやうな點もあるが、それを自分でもえらいと思つてゐる樣子が、如何にも賤しく下品だ。よく辨へてゐる道については、必ず口が重く、人から聞かれない以上は何ともいはないもので、そこが實にいゝのだ。

【文旨】「何事も入りたゝぬさましたるぞよき」といふのが、兼好の趣味を最も端的に現はしてゐる。さし出口をする、喋々と辯じ立てる、今迄數段に渉つて書いてゐるのは、要するに、さうした立入つて知つたか振りをする態度の嫌さである。つゝましやかにして內に守つてゐる――兼好の處世觀は常にそこから出發してゐるのである。

【語義】○入りたゝぬさま　立入らない樣。深く其の事に立入つて知つたか振りをするのはよくないといふのである。○よき人　身分がよくて教養のある人。○さのみ　さう何も、さう一概に。○知りがほにやはいふ　知つたかぶりをするものだ。○片田舍　都から遠く離れた邊鄙な田舍。○さしいでたる人　出て來た人。「さし」は接頭語、差出口といふ場合の「さしいで」とは意味が違つて、只、出たといふ迄であるが、のこ〳〵やつて來たなどいふと、幾分かその接頭語の感じが出るやうに思ふ。○よろづの道に　よろづの道につけて、諸道諸藝何事につけても。これはすぐ下の「心得たる」に掛る副詞的の語と見てよからう。○よしの　といふ風の。○さしいらへ　返答、應答、挨拶。○世には　「世に」は非常にといふ强めの副詞。都の人が恥しく思ふやうに色々知つてゐて馬鹿に出來ない點もあるがの意。○自らもいみじと思へるけしき　當人自らでもえらいと思つてゐる樣子が。いやに高慢ちきに構へ込んで、どうだえらいものだらうといつた風の樣子をしてゐるのがの意。○かたくなり　下卑てゐる。徒然草では、特に「よし」の反對として、凡てものの分らぬ、無教養な、さらりとしない、下品な、賤しい、見苦しい狀態をいふ詞になつてゐる。○よくわきまへたる道には　よく知つてゐる道については。○必ず口重く　決してやたらとしやべり散らさず。○問はぬかぎりは言はぬこそいみじけれ　人が聞かない以上はいはないそれが非常によいものだ。平靜に原文を味つて見ると、

よくわきまへたる道には｜必ず口おもく
問はぬかぎりは言はぬ｜（モノナリ、サル）こそいみじけれ

といふ文脈のやうに考へられる。

第八十段

人ごとに、我が身にうとき事をのみぞ好める。法師はつはものの道をたて、夷は弓ひくすべ知らず、佛法知りたる氣色し、連歌し、管絃を嗜みあへり。されどおろかなるおのれが道よりは、なほ人に思ひあなどられぬべし。法師のみにあらず、上達部、殿上人、上ざままで、おしなべて武を好む人おほかり。百たび戰ひて、百たび勝つとも、いまだ武勇の名を定めがたし。その故は、運に乘じてあたをくだく時、勇者にあらずといふ人なし。兵盡き、矢きはまりて、遂に敵に降らず、死を安くして後、はじめて名を顯すべき道なり。生けらむほどは、武に誇るべからず。人倫に遠く、禽獸に近きふるまひ、その家にあらずば、好みて益なきことなり。

【通解】 誰でも皆、自分の身に緣の遠い事ばかり好んでゐる。僧侶は武道を表藝として習ひ、武士は弓の引き方は知らないで、却て佛法を知つてゐるやうな顏附をし、皆一樣に連歌をやり、音樂を嗜んでゐる。然しそんな事は疎略にしてゐる自分の專門の道よりも、尙一層人から輕視せられるに違ひない。僧侶ばかりでなく、上達部、殿上人、更にもつと上つ方の人々まで、概して武を好む人が多くある。たとひ百戰百勝したとても、まだ〳〵武勇の士だといふ斷定は下されない。その譯は、運に乘じて敵を挫くとなれば、どんな人でも皆勇者である。運拙く敗戰して、武器は盡き、矢は無くなつても、而も遂に敵に降らず、從容として死について後、始めて武勇の名を顯はすべき道である。生きてゐる間は、決して武勇に誇るべきものではない。一體武道といふものは、人間に遠く、禽獸に近い行爲であつて、その專門の家でなければ、好んで益のない事である。

【文旨】 誰も自分に關係のない、專門以外の事に身を入れるというて、特に當時の公卿達の武道などに專心する事をなげき、兵は不仁の道だといふ事を絮說してゐるのである。

【語義】 ○我が身にうとき 自分の身に緣遠い。「うとき」は疎遠な、卽ち關係の少ないといふ意。○つはものの道。武士の道、武道、武藝。○たて 專ら心懸け、表藝として習ひ。○夷。武士。殊に當時關東の田舍武士を指していひ習はした語。「えびす」の本義は都に遠い鄙遠の地の未開の民をいふ言葉。○すべ 仕方、方法。「すべ知らず」は中止法で、「すべ知らざる氣色し」と下に掛る句法。○氣色し 顏つきし。○連歌 もと一首の歌を上の句下の句と分けて二人で作つたものであるが、後にそれが異常に發達して、同座の人々が順次に循環して句を連ねて行つて五十句、百句、千句の多きにも達したもので、之を鎖連歌とも長連歌とも稱する。兼好の在世の當時は、この鎖連歌が非常に流行してゐたのである。○管絃 笛の類と琴の類で、「絲竹」といふと同じく、音樂を總稱的にいふ語。○嗜みあへり お互に皆好み修めてゐる。「たしなむ」はすき好み心掛けて修める意。「あへり」は各人皆互にさうするといふ意。○おろかなる おろそかな、念を入れてやらない。○おのれが道 自分の專門とする道。○なほ 一層。○思ひあなどられぬべし。 腹の中で馬鹿にされるに違ひない、きつとつまらぬものだと人から輕視される事だらう。○上達部 三位以上で官參議以上の人の總稱。部はむれの義で、その人々、その仲間といふ思想。○殿上人 六位の藏人、又四位五位以上の者で、昇殿を許された人。○上ざま 上流の人々。上を承けて、それよりも更に上つ方の人々、といふのである。○おしなべて 一般に、概して。○百たび戰ひて云々 孫子に『百戰百勝非二善之善者也一、不レ戰而屈二人之兵一善之善者也』とある、その邊から脫化して來た筆法だらう。○武勇の名を定めがたし 武勇の士だといふ名は定め難い、武勇の人だときめる譯には行かない。○あた 敵、仇敵。「あだ」と濁らぬが古正である。○くだく 破る、挫く。○勇者にあらずといふ人なし 勇者でない人はない。どんな人でも皆勇者だ、と

いふ思想。○兵盡き矢きはまりて。武器はつき矢は無くなつて。刀は折れて了ひ矢は無くなつての意。○死を安くして。死を安々として。從容として死に就いて、少しもわるびれずに、泰然自若として死んで、といふ意。○名を顯はすべき道なり。名を顯すべきものだ。さうして始めて勇者たるの名が世に顯はれるべきものだの意。○生けらむほどは。生きてゐる間は。「生けらむ」は「生く」といふカ行四段の古動詞の已然形に完了「り」の未然形「ら」と未來の「む」との接した形。○人倫に遠く。人間に遠く。「人倫」は人のたぐひ、人間の意。○その家。專門の家。武家武門をいふ。

第八十一段

屏風、障子などの、繪も文字も、かたくなる筆樣して書きたるが見にくきよりも、宿の主人のつたなく覺ゆるなり。おほかた持ても調度にても、心おとりせらるゝ事はありぬべし。さのみよき物を持つべしとにもあらず。損ぜざらむためとて、品なく見にくきさまにしなし、珍しからむとて、用なき事どもしそへ、わづらはしく好みなせるをいふなり。古めかしきやうにて、いたくことごとしからず、費もなくて、物がらのよきがよきなり。

【通解】屏風や襖などの、繪にしても字にしても、下卑た筆つきで書いてあるのは見苦しいものだが、それよりもまづ第一に、其の家の主人公が如何にも下劣に思はれる事だ。大體その人の持つてゐる道具からでも、自然ゆかしさがなくなつて幻滅を感じさせられるやうな事は隨分あるだらう。といつて、何もそんなによい物を持てといふのでもない。破損しないやうにといつて、わざ〳〵品わるく見にくい樣に手を加へ、又目新しいやうにといつて、用もない事を色々と仕添へたりして、如何にも煩はしくごて〳〵と嗜好を凝してゐるのがいけないといふのだ。古めかしく古風なやうで、而もひどく仰々しくなく、失費も掛らなくて、物柄のよいのがよいのである。

【文旨】さらりとして上品な、わざとらしくない事を喜ぶ作者の趣味觀がこゝにもよく出てゐる。屏風や襖などに野鄙な書や繪の書いてあるのを見ると、それが見苦しいといふよりも、先づ第一にその家の主人の下劣さが思はれる、と筆を起して、それから世間によくある骨董いぢりの好事家の事々しい態度を詳悉して、古風で、さらりとして、費用が掛らないで、「物がらのよきがよきなり」と斷じたのである。

【語義】○障子。「しようじ」とも「さうじ」ともいふ。室の隔てにするもの、即ち襖障子、衝立障子、明障子などの稱で、こゝの如く單に障子といふ場合は多くは襖障子即ち今日の所謂唐紙をいふのである。今日普通に所謂障子は昔は明障子といつたものである。○かたくなる筆樣して。下品な筆つきで。○書きたるが見にくきよりも書いてあるのが見にくいといふよりも寧ろ。それの拙劣さを不快に感ずるのは勿論だが、更により以上にの意。○宿の主人の。その家の主人公が。さうした拙劣な物をいゝ氣になつて立てておく主人公が、といふ意。○覺ゆるなり。つまらなく思はれるのだ。○おほかた。大體、一體。○持てる調度にても。持つてゐる手まはりの道具によつても。○心おとりせらるゝ事はありぬべし。折角のゆかしさが無くなるやうな事はあるに違ひない。「せらる」は自然にさうなるといふ意。○さのみ。さう何も、さう一概に。○とにもあらず。といふわけでもない。○損ぜざらむためとて。その物の破損しない爲めといつて。大事がつてこわさぬ樣にしようとしての意。○品なく。品わるく、下品に。○しなし。わざ〳〵する。桐の箱に入れるとか、蔽ひを掛けるとかいふやうに、特に保存法を講ずるのをいふ。○珍しからむとて。目新しくあるやうにといつて。特に珍品として目につくやうにしようとしての意。○用なき事どもしそへ。必要もないつまらぬものを色々くッ附けたりする。○わづらはしく好みなせる。うるさく好みなしてゐる。さらりとせず、如何にも仰山たらしく凝つてゐるの意。○いふなり

いけないといふのだ。前の「心おとりせらるゝ」を承けた語。○古めかしきやうにて　古風のやうで、○いたくことごとしからず　ひどく大相らしくなく、あまり仰々しくなく。古風の物は兎角格式ばつて仰々しい趣があるので、特に斯う斷つたのである。○費　費用。○物がら　その物の全體の柄、即ちその物の凡ての上の品とか趣とかいふ心持の語。

第八十二段

「うすものの表紙はとく損ずるがわびしき」と人のいひしに、頓阿が、「うすものは上下はつれ、螺鈿の軸は貝落ちて後こそいみじけれ」と申し侍りしこそ、心まさりて覺えしか。一部とある草紙などの、おなじ樣にもあらぬを、みにくしといへど、弘融僧都が、「物を必ず一具にとゝのへむとするは、拙き者のする事なり。不具なるこそよけれ」といひしも、いみじく覺えしなり。すべて何もみな、事とゝのほりたるはあしきことなり。しのこしたるを、さてうち置きたるは面白く、生きのぶるわざなり。「內裏造らるゝにも、必ず造りはてぬ所を殘す事なり」と、ある人申し侍りしなり。先賢の作れる內外の文にも、章段の闕けたる事のみぞ侍る。

【通解】「薄い絹の表紙は、どうも早くいたむのが困る」と或人が言うた所が、頓阿が、「薄い絹の表紙は上下の端の所がほつれ、螺鈿の軸は貝が落ちてからがごくよいのだ」と申されたのは、實に見上げたものだと感じた事だ。又世間では一部と纏つてゐる草紙などの、各卷同じやうな體裁になつてゐないのを見苦しいといふのであるが、弘融僧都が、「何でも物を必ず一揃にちやんと整へようとするのは、つまらぬ人のする事である。整はずに不揃であるのがよいのだ」というたのも、實に面白く思はれた。凡て何事でも皆、事の整つてゐるのはよくない事である。仕殘したのを、そのまゝ置いてあるのは、面白く、如何にも伸々として壽命がのびる樣な感じのするものだ。「內裏を造營せられるのにも、必ず造りきらぬ所を殘して置くものだ」と、或人が申された事である。昔の賢人の書つた佛教や儒教の書にも、章段の闕けてゐる事が隨分あるのであります。

【文旨】世間の人は何でも物の完備を望むものであるが、それが甚だよくない、何でも物は不備未成の所に言ひ難い味があるというて、頓阿とか弘融僧都とかいふ當時の知名な人の言を引證共鳴し、更に御所造營だの、先賢の書だのの事を引いてゐるのである。先賢の書に章段の闕けた所のあるのは、わざ〳〵さうしたといふよりも、寧ろ長い年月の間に自然脫落したと見る方が至當であらうが、それもさうして闕けてゐる所に又格別の味があるといふ心持で例證してゐるのであらう。要するに前段と同じやうな兼好の趣味觀の一つのあらはれ――事々しく窮屈に物の完備を期する事がいやだといふ兼好の趣味觀の一つの現れといふに過ぎない。

【語義】○うすものの表紙　薄い絹で表裝した卷物などの表紙。「うすもの」は羅又は紗の類、即ちごく薄く織つた絹をいふ。○とく損ずるがわびしき　早くいたむのが困る。「わびしき」は困る、閉口する、やりきれないといふ意。○人の　或人が。○頓阿　兼好と同時代の人で、慶運・淨辨・兼好と相並んで、當時和歌の四天王と稱せられてゐた。○上下はつれ　上下の端の所が磨り切れて絲がほつれ。○螺鈿の軸　卷物の軸に青貝をすり入れたもの。「螺鈿」は青貝というて、屋久貝、鸚鵡貝などの殼の眞珠光のある部分を採つて、樣々の形に切つて、漆器などの面に嵌め込んで飾としたものの稱。○貝落ちて後　嵌め込んだ貝のとれた後。○いみじ　立派だ、見事だ、よい。○心まさりして覺えしか　如何にも見上げた見識だと思はれた。「心まさりして覺えしか」の誤といふ說がある。さうすると「心おとりして」の反對で、我が心にまさりざまに感じたといふ事になつてよく通ずる。が、姑く原文のあるが

まゝを肯定するとすれば、頓阿の心が他にまさりたるもののやうに思はれたといふ事になるわけである。○一部と。ある草紙。幾册か揃つて一部に纏つてゐる草紙。「草紙」は物語や隨筆等のとぢた本。○おなじ樣にもあらぬ。同じ樣な體裁に出來てゐない。幾册かあつて、そのとぢ方や表紙の體裁などが卷によつてまち〳〵になつてゐるのをいふ。「も」は輕く感じを表はす助詞。○弘融僧都。兼好と同時代の人、權少僧都で、伊賀國佛性寺の遍照庵に住んでゐた。○一具。一揃へ。○拙き者。つまらぬ人、下等な奴。○不具。不揃ひ。○いみじく覺えしなり。えらいと感じた事である。その言に敬服したの意。○とゝのほりたるは。整ひたるは。○さてうち置きたるは。そのまゝさうして置いてあるのは。「さて」は、さうして、そのまゝ。即ち仕掛けて完成せずにそのまゝ放つて置くの意。○生きのぶるわざ。生きのびること。如何にものんびりとして命も延びるやうな感じがする事だの意。○内裏。御所、天皇の御殿。○造りはてぬ所。すつかり造りきらぬ所、仕殘して止めておく所。○先賢。昔の賢人。○内外の文。内典や外典。佛家では、佛經を内典といひ、儒教の書を外典といふ。○章段の闕けたる事のみぞ侍る。一章があつて二章がなかつたり、又同一章の中のどのか段が缺けてゐたりするといふ樣な事がかなり多い。こゝの「のみ」は隨分、非常にといふ强めの意。

第八十三段

竹林院入道左大臣殿、太政大臣にあがりたまはむに、何のとゞこほりかおはせむなれども、「珍しげなし。一の上にてやみなむ」とて、出家し給ひにけり。洞院左大臣殿、この事を甘心し給ひて、相國の望おはせざりけり。亢龍の悔ありとかやいふ事侍るなり。月滿ちては缺け、物盛にしては衰ふ。よろづの事、さきのつまりたるは、破れに近き道なり。

【通解】竹林院の入道左大臣殿は、太政大臣に御昇進なされようとすれば、それに何の支障もおありなされぬ人であつたが、「太政大臣になつた所で珍らしげもない。左大臣で止めて置かう」というて、出家なされて了つた。洞院左大臣殿も、この事を感心なされて、太政大臣たるの望がおありなされなかつた。亢龍の悔あり――天上へのぼりつめた龍は、もはや下るより外に途かない爲めに、その最上を極めた事を後悔するとかいふ事がありまする。月が滿ちれば缺け、物が盛になつては衰へる。物事凡て、行きづまつてさきの無いのは、破滅に瀕してゐる所以である。

【文旨】物事凡て八九分で止めておくに限る、十全は却て破滅の基だといふ事を、人の言葉や、古語などを引いて說述してゐる。これも兼好の大きな處世觀の一つである。

【語義】○竹林院入道左大臣殿　西園寺公衡。兼實の子で、嚴長元年に出家し、正和四年五十二歳で歿した人。○あがり。上り、昇進し。○何のとゞこほりかおはせむなれども　何の障碍がおありなされよう、何の障碍もおありなされぬのではあるが。○珍しげなし　別段珍しげもない。上れるべき者が上るのだから、別段珍らしいとしてめで喜ぶべき趣もない、といふ心持であらう。○一の上　左大臣。○やみなむ　止めておかう。こゝの「なむ」は未來完了の助動詞であるが、その方をよいとして取るといふ心持で使はれてゐるのである。○出家　剃髮して佛道に入るをいふ。○洞院左大臣殿　藤原實泰。文保二年に左大臣に任じ元亨二年に之を辭し、嘉曆二年に薨じた人。○甘心　感心。なるほどと心に感じ思ふ義と見てよからう。○相國　太政大臣を唐風にいふ語。○亢龍の悔　易經の乾卦の上九に『亢龍有レ悔』とあり、上象傳に『亢龍有レ悔、盈不レ可レ久也』とあるのを引いたのである。「亢龍」は上る龍で、尊貴を極めたものの喩。上りつめた龍には下らねばならぬといふ悔のあるやうに、尊貴を極めて愼まな

いと、敗亡の悔があるといふ意である。○月満ちては缺け　釋名に、『月缺也、満則缺』とある。○物盛にしては衰ふ　范魯公の詩に『物盛則必衰』とある。○さきのつまりたるは　極度まで達してさきの行きづまつてゐるのは。○破れに近き道なり　破滅に近い道だ。既に破滅に瀕してゐるのだの意。「道」はこゝでは所以の義で、道理といふ意味ではない。

第八十四段

法顯三藏の、天笠に渡りて、故郷の扇を見ては悲び、病に臥しては漢の食を願ひ給ひける事を聞きて、「さばかりの人の、むげにこそ心よわき氣色を、人の國にて見え給ひけれ」と、人のいひしに、弘融僧都、「優に、情ありける三藏かな」といひたりしこそ、法師のやうにもあらず、心にくゝ覺えしか。

【通解】法顯三藏が、印度へ渡つて、故郷の戀しさに、故國支那産の扇を見ては悲み、病の床に就いては支那の食物がほしいと願ひなされたといふ事を聞いて、「それ程の人物が、どうもひどく弱氣な樣子を、他國でお見せなされたものだ」と、或人がいうた所が、弘融僧都が、「いや、如何にもやさしく、情味の籠つた三藏よ」というた、それこそ實に坊さんのやうにもなく、誠に奥ゆかしく思はれた。

【文旨】坊主が世を捨てるというても、それが何の人間味もない、血も涙もない單なる枯木冷灰であつては何にもならぬ。人情の委曲を味ひ知つて、而も自然と佛道に悟入する所に、兼好は出家入道の妙諦を認めてゐた。從つて世の多くの坊主のやうに、殊更に枯木冷灰の風を裝ふが如きは、兼好に取つては蛇蝎よりもいやなものである。法顯三藏の人情美の自然の發露を「優に情ありける」と讃美した弘融僧都の言葉、それを兼好が、「法師のやうにもあらず」としてゆかしがつてゐるのは、固より當然の事でなくてはならない。吾々の深く味ふべき所である。

【語義】○法顯三藏　支那晉代の僧。晉の安帝の隆安三年に印度へ渡つて佛教を研究した有名な人。「三藏」といふのは經(佛典卽ち佛の說法)・律(戒卽ち僧俗の戒規威儀を記したもの)・論(佛弟子又は後人の佛典を論議したもの)の三つによく通した人をいふ。○天竺　印度の古稱。○故郷の扇を見ては悲び　故郷支那製の扇を見ては故郷の戀しさに歎き悲み。その事は高僧法顯傳に見えてゐる。○さばかりの人　それほどえらい人。あれほど有名な高僧が、といふ心持の語。○むげにこそ　どうもひどく、どうも一概に。下の「見え給ひけれ」に係る副詞。○氣色　樣子。○人の國　外國、他國。○見え給ひけれ　見せなされたものだ。古文の「見え」は受動的の「見られ」の義で、從つて能動的にいへば「見せ」と一致する。○弘融僧都　前の第八十二段にあるのと同じ人。○優に情ありける　やさしくて情味の籠つた。「優に」はやさしい、上品な、といふ意で、のんびりとしてすなほに上品なといふ心持の語。これは三藏のさうした振舞が如何にもやさしく人間味が籠つてゐてよいといふ心持を、そのまゝ三藏の形容詞にして、三藏の全人格のやうに言ひ做した修辭と見てよからう。○法師のやうにもあらず　坊主のやうにもなく。兎角坊主は枯木冷灰のやうで、妙に悟りすました顏をしたがるもので、自然斯うした人情の美などは解しないものだのに、これは又坊主にも似合はず、といふのである。

第八十五段

人の心すなほならねば、僞なきにしもあらず。されど、おのづから正直の人などかなからむ。

おのれすなほならねど、人の賢を見て羨むは、世の常なり。いたりて愚かなる人は、たま〳〵賢なる人を見て之を憎む。「大きなる利を得むが爲に、少しきの利を受けず、いつはり飾りて名を立てむとす」とそしる。おのれが心に違へるによりて、この嘲をなすにて知りぬ。この人は、下愚の性うつるべからず、偽りて小利をも辭すべからず、假にも賢をまなぶべからず。狂人のまねとて大路を走らば、すなはち狂人なり。惡人のまねとて人を殺さば、惡人なり。驥を學ぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。偽りても賢をまなばむを賢といふべし。

【通解】人の心はすなほなものではないから、全然偽がないとはいへない——賢人を裝つてゐる偽者も無い事はない。然し、自然正直正銘の賢人もどうして世に無からうや。自分はすなほで無くても、人の賢を見て羨むのは、世間一通りの人情である。然るに至つて愚かな人は、往々賢い人を見てそれを憎む。そして「あれは大きい利を得ようが爲めに、少しの利を棄て、上べを偽り飾つて名を上げようとするのだ」と言つて謗る。斯うして賢者のする事が自分の心と違つてゐるが爲めに、斯ういふ嘲罵の辭を弄するのでよく分る。斯ういふ人は、いはゆる下愚の性で、どうしても善に移る事は出來ず、偽つて小利を棄てる事すら出來ず、假にも賢を學ぶ事すらなし得ない人物である。狂人の眞似だというて往來を走つたなら、それはとりもなほさず狂人である。惡人の眞似だというて人を殺したなら、それは矢張り惡人だ。千里の馬を見習ふ者は即ち千里の馬の類であり、舜を眞似る者は舜のともがらである。たとひ偽つてなりとも賢を學ぶ人を賢と稱して然るべきである。

【文旨】文末の「偽りても賢をまなばむを賢といふべし」が全段の眼目で、それは儒教でもいふ事であるが、さうした結論に導く道程として書いてゐる世間一般の人情描寫が委曲の妙を極めてゐる。殊に至愚の人の心境描寫は實に神に入るともいふべき筆致で、そこに吾々の深く自ら反省すべき教訓が見出されるのである。

【語義】○人の心　世の一般の人心。○偽なきにしもあらず。偽がないではない。こゝには「賢」の字は無いが、結論の文句から推して考へると、世の中には偽がなくはないから、自然賢を裝ふ偽善者もそれはあるに違ひないといふ心持の立文と考へられる。○おのづから　自然。下の「などかなからむ」に係る副詞。○正直の人　ほんとに正しい人、即ち偽でなしにほんとにしんから賢い人といふ心持の措辭だらう。○などかなからむ　どうして無い事があらう、無い事はあるまい。○おのれすなほならねど　自分はすなほでなくても。「ならねど」は「なくても」といふ一般事實、若しくは「よしや無いにしても」といふ假定事實を、强めていふ爲めに既定法にした修辭と見てよい。「ないのに」と見る說もあるが、さうは響かぬと思ふ。○羨む　うらやましく思ふ。「そねむ」と解する說もあるが、それ程强くなく、「羨しいなア」と思ふといふ程度に見るべきであらう。○世の常なり　世間の普通だ。この邊がまづ世間のつい通りだといつて、下に「至りて愚なかる人」を出す素地を作つてゐるのである。○いたりて愚かなる人　この上なく愚かな人、至愚の人。○たま〳〵　往々。往々にして賢者を見ると、羨むどころかそれを目の敵にして憎むといふ意。この副詞を「憎む」に掛るものと認めて、「目の敵にするのさへ時にはある」と解する說もあるが、それよりも至愚の人は常にさうしたものだと見た方が立文主觀に合ふであらう。○大きなる云々　あゝして小利を棄てるのは、大利を得ようが爲めの事、あゝして偽善をやつて名を賣らうとするのだ、賢者がさういふ考でさうした行をするのだというて、愚者が謗るといふのである、○おのれが心に違へるによりて　愚者自身の心に違つてゐるのによつて。愚者の心では如何な小利も辭すまいとする、然るに賢者は潔よく利を棄てる、凡ての行爲が自分の心とは違つて、更にその心持が分らぬ、そこで自分の心から忖度して斯んな事をいうて賢者を嘲る、といふのである。○この嘲　斯ういふ嘲。前の「大きなる云々」の言葉を指す。○知りぬ　分つて了ふ。下文の「この人

は……まなぶべからず」といふ事が、さうした嘲罵を爲す事で分るといふ文の筋。「ぬ」は強めの詞。○下愚の性うつるべからず　最も愚かな性分で、いくら教養しても賢に移る事は出來ぬ。論語の陽貨篇に『上智與二下愚一不レ移』とあるのを引いたのである。○僞りて小利をも辭すべからず　うそに小利を辭する事も出來ない。こゝの邊の文脈は、

この人は下愚の性うつるべからず　僞りて小利をも辭すべからず
假にも賢をまなぶべからず

で、「べからず」は凡て「出來ない」といふ可能の打消である。古くから「賢をまなぶべからず」が「愚をまなぶべからず」となつて行はれてゐたが、最近の異本と學者の研究とによつて「賢」の字に是正されるに至つた。「假にも賢をまなぶべからず」とあつてこそ、文末の「僞りても賢をまなばむを賢といふべし」なる文句とぴッたり合ふのである。○大路　大道、大通り。○驥　千里の馬、駿馬。楊子法言に『㕛レ驥之馬、亦驥之乘也、㕛レ顏之人、亦顏之徒也』（顏は孔子の弟子顏淵をいふ）○舜　支那上代の聖天子。孟子盡心上篇に『鷄鳴而起、孳々爲レ善者舜之徒也』とある。つまりの思想は、聖人の眞似をする者は、聖人でない迄も矢張聖人のともがらだといふのである。

第八十六段

惟繼中納言は、風月の才に富める人なり。一生精進にて、讀經うちして、寺法師の圓伊僧正と同宿して侍りけるに、文保に三井寺燒かれし時、坊主にあひて、「御坊をば寺法師とこそ申しつれど、寺はなければ、今よりは法師とこそ申さめ」といはれけり。いみじき秀句なりけり。

【通解】　中納言惟繼は、詩賦の才に富んだ人である。一生精進で、いつもお經を讀んで、三井寺の僧圓伊僧正と同宿で暮して居られた所が、文保年間に三井寺が燒かれた、其の時に、僧正に向つて、「これまで御僧の事を寺法師と申しましたが、もう寺は燒けてないから、これからは單に法師と申しませうよ」と言はれたのであつた。實にうまい洒落をいつたものであつた。

【文旨】「これまで寺法師と申したが、寺が燒けたから、これからは單に法師と申さう」といふ、さらりとした面白い洒落を筆錄したといふまでで別義はない。此の段についても、古來色々とその洒落に理窟をつけて解く說があるが、只原文のあるがまゝをすなほに味つて見ればそれでいゝ。

【語義】　○惟繼中納言　平氏、葛原親王の裔、元德二年權中納言に任ぜられ、在任僅か一ヶ月足らずで辭した。○風月の才　自然を諷詠する才の義で、和歌と相對して特に詩作の事にいふ語。○一生精進　一つの熟語名詞で、一生肉食しないといふ發願を立てるのをいふ。○讀經うちして　讀經をして、いつも經を讀んで。「うち」は輕く添つた趣の語。○寺法師　三井寺の僧。寺は三井寺卽ち圓城寺をいふ。これに對して比叡山延曆寺の僧を山法師といふ。○圓伊　大納言藤原伊平の孫で、歌人として名のあつた人。○同宿　一所に住んでゐた事。圓伊に師事して寺內に同じく住んでゐたといふのであらう。○文保　花園天皇の御代の年號。文保三年四月廿五日に山門の衆徒が圓城寺に發向して燒打を掛けた事が、花園院宸記に見えてゐる。○坊主　僧坊の主たる僧の義。こゝは圓伊を指す。今日一般にいふ坊主の語も、もとは僧坊の主の義から轉化したのである。○あひて　向つて、面會して。○御坊　僧に對していふ敬稱。○いみじき　すぐれた、うまい、立派な。○秀句なりけり　洒落であるわい。「秀句」は詩歌の秀逸な句をいふ語で、それから轉して、一般に、面白い洒落れた詞、巧みな懸け詞などにいふ。

下部に酒飲ませる事は、心すべきことなり。宇治に住みける男、京に、具覺坊とて、なまめきたる遁世の僧を、小しなりければ、常に申しむつびけり。ある時迎に馬を遣したりければ、「遙かなる程なり、口つきの男にまづ一度せさせよ」とて、酒を出したれば、さし受けさし受け、よゝと飲みぬ。太刀うち佩きて、かひがひしげなれば、たのもしく覺えて、召し具して行くほどに、木幡のほどにて、奈良法師の、兵士あまた具して逢ひたるに、この男立ちむかひて、「日暮れにたる山中に、あやしきぞ。とまり候へ」といひて、太刀をひき抜きければ、人も皆、太刀ぬき、矢はげなどしけるを、具覺坊手をすりて、「現心なく醉ひたるものに候ふ。まげて許し給はらむ」といひければ、おの〳〵嘲りて過ぎぬ。この男、具覺坊にあひて、「御坊は口惜しき事したまひつるものかな。おのれ醉ひたること侍らず。高名つかまつらむとするを、抜ける太刀空しくなし給ひつること」と怒りて、ひたぎりに斬り落しつ。さて「山だちあり」とのゝしりければ、里人おこりて、出であへば、「われこそ山だちよ」といひて、走りかゝりつゝ斬り廻りけるを、あまたして手おほせ、うち伏せてしばりけり。馬は血つきて、宇治大路の家に走り入りたり。あさましくて、男ども數多はしらかしたれば、具覺坊は梔原にによび伏したるを、求め出でて、かきもて來つ。からき命生きたれど、腰きり損ぜられて、かたはになりにけり。

【通解】下賤な者に酒を飲ませることは、注意すべき事である。宇治に住んでゐた或男が、京にゐた、具覺坊と

いうて品のいゝ遁世の坊さんを、妻の兄弟といふ關係だつたので、常に親しく交際してゐた。或時、その男から具覺坊の所へ迎へに馬をやつた所が、具覺坊の所では「仲々遠い道中だ、口取の男に先づ一杯やらせよ」というて酒を出すと、其の男は、盃をさし受けさし受け、幾杯も〳〵がぶ〳〵と飲んだ。太刀を腰に帶びて居て、如何にもしやんとした風なので、具覺坊も頼もしく思つて、召し連れてやつて行く内に、木幡の邊で、奈良法師が、護衛の兵士を澤山引き連れてやつて來てばつたりと出遭つた、所がこの男が向つて行つて、「日がすつかり暮れた山中に、怪しいぞ。お止りめされ」というて、太刀を引抜いたので、先方の人達も皆、太刀を抜き、矢をつがへなどしたのを、具覺坊はもみ手をしてあやまり入つて、「此奴は正體もなく醉ッぱらッてゐる者で御座りまする。どうぞひらに御許し下さりませ」というたので、一行の者はてんでんに嘲つて行つて了つた。すると今度はこの男は具覺坊に向つて、「あなたはどうも殘念な事をなされたものだ。私は決して醉つてなどをりません。一つ大手柄をしようとするのを、抜いた太刀のやり場もない始末にしておしまひなされた」とおこつて、滅多斬に斬つて落した。そして「山賊だ山賊だ」とわめき立てたので、土地の人が大勢どや〳〵と出て其の場へ來ると、その男は、「おれが山賊なんだ」というて、あちらに走り掛りこちらに走り掛り斬つて廻つたのを、大勢で手傷を負はせて、とり押へて縛つたのであつた。馬は血をあびて宇治大路の主人の家に走り込んだ。家の主人は餘りの事に仰天して、下男たちを大勢走らかして遣つた所が、具覺坊は梔の原にうん〳〵とうなつて倒れてゐた。それを探し出して、擔いでつれて來た。具覺坊はあぶない一命がやつと助かりはしたが、腰を斬られて、不具になつて了つたのであつた。

【文旨】下賤の者にはうつかり酒を飲ませてはならぬというて、その一例話を書いたのであるが、其の敍述が如何にも活き〳〵としてゐて目の前に見るやうだ。凡て省殺の筆を使つて、事件の急所々々に特に力を入れた所がよい。「なまめきたる遁世の僧」――色のくつきりと白い、上品な、如何にもうひ〳〵しげな感じのする坊さん、赤つらの倔强さうな下郎、それが日の暮れてからの木幡山中での奈良法師との出あひ、具覺坊がもみ手をしてあやまる

所から、その男が減多斬の酒亂の狂態に至るまで、如何にも殺伐な當時の時代相を寫して、罪のない一幕になりさうな光景である。「心すべきことなり」といふ書き出しではあるが、さうした教訓といふよりも、寧ろその話に一種劇的な興味を持つて、話を話とし如實に筆錄したものと見る方が自然であらう。

【語義】　○下部　下賤の者。普通には召使の事をいふ言葉であるが、茲はもつと廣い意味に取つた方がよからう。○心すべき　用心すべき。○京に　場所をあらはす副詞で、それに應ずべき動詞は省略されてゐる。これは古文に最も普通な慣用形式だ。それから又この邊の所は凡て挿入句になつてゐる。その省略を補ひ、挿入句の關係を分りやすくして見ると、次のやうな文脈になる。

宇治に住みける男、〔京に、具覺坊とて、なまめきたる遁世の僧のありけるが、〕その僧を〔小舅なりければ、〕常に念佛を修行してゐる僧といふやうな心持と考へられる。○申しむつびにけり。　〔申しむつびにけり。〕

○なまめきたる　上品な。「相當の身分の」と解してもよいが、語の原義通り上品で初々しいといふ感じの方が主であらう。○遁世の僧　「遁世」は俗世間を離れて佛門に入る事だから、結局僧と同じだが、特に斯ういうたのは、專てゐた。「申し」には別段意味はない、仲よくしてゐたといふ迄の意。○迎に　宇治の男から具覺坊の所へ迎に馬をよこしたのである。○遙かなる程なり　遙かな道程だ。京から宇治までは仲々道のりがあるからといふ意。○口つきの男　口取りの男、馬の口の所について引いて行く男。○一度せさせよ　一杯やらせよ。酒を一杯飲ませよの意。○さし受けさし受け　盃を干しては受け干しては受け。○よゝと　どく〳〵と、がぶ〳〵と。酒を呑む音の形容。○太刀うち佩きて　太刀を腰に帶びてゐて。「太刀」は上古は刀劍の汎稱であるが、中古以來は儀仗又は軍陣に用ひる大きな刀の特稱で、それに飾太刀、武太刀などの種類がある。茲もそれだが、勿論裝束用の飾太刀ではなく、實戰用の武太刀である。そして「佩きて」といふのは腰に差すのではなく、帶取といふ緒を腰にまとつてつるしてゐるのである。○かひがひしげ　如何にも勇ましさう。しつかりしてゐて如何にも強く頼もしさうに見える意。○召し具して　召しつれて、伴につれて。○木幡のほど　木幡の邊。「木幡」は宇治郡宇治村字木幡。コバタと訓じた書もあるが、コハタをコワタと讀むのが普通のやうである。○奈良法師　奈良の東大寺、興福寺などの僧侶を一般に稱してゐた言葉である。その僧達は常に兵仗を帶し戰爭をやつた事が軍記物の中に屢々見えてゐる。○兵士　僧侶でない普通の軍卒。護衛のために引連れたのである。○具して逢ひたるに　引連れて出會つた所が。こゝの文脈を明かにすると、

主語　奈良法師の（ガ）　副詞　兵士あまた具して　述語　逢ひたる

奈良法師ガ逢ウタといふのである。こちらからやつて行くと出會頭にばつたりと出會つた、それが恰も奈良法師の方でわざ〳〵こちらにぶつかつて來たやうな具合になつたのである。さうした心持で見るとこゝの趣がよく分ると思ふ。○立ちむかひて　その奈良法師の一隊に立向つて。醉ッぱらッた勢で往來に立ちはだかつて喧嘩を賣り掛けたのである。○日暮れにたる　日の暮れて了つてゐる。日の暮れた山中に兵士をぞろ〳〵引連れて通る抔は頗る怪しいぞ、貴樣等は山賊か何かに違ひないといふ心持で咎めたのである。○とまり給へ　おとまりなさい。奈良法師の一行に向つて「止れッ」と命じたのである。○人も　法師方の人々も。○矢はげ　矢を弓に番ひ。それに應戰する態度を取つた譯である。○手をすりて　手をもんで、もみ手をして。平身低頭してあやまるさまである。○現心なく　正體もなく。「現心」はしつかりした本心をいふ。○まげて　枉げて、是非とも。御怒は御尤もだがその理を枉げて無理にもの意。○許し給はらむ　お許し下さい。御許しをいたゞきたいと願ふ詞。○おの〳〵　めい〳〵、一同の者がてんでに。○あひて　向つて、對して。○口惜しき事　くやしい事、殘念な事。○高名　手柄。手柄をして名を揚げるといふ意で、功名と同意の語。○空しくなし給ひつること　むだにして了ひなされた事よ。折角太刀を拔いたのに、それがあなたの御蔭で、何にもならずに了つたと云うて怒るのである。「こと」は「ことよ」の略

で、詠歎を含めた語法。○ひたぎりに　滅多斬りに。「ひた」は「ひたすら」と同義で、一途に、無茶苦茶にの意。○斬り落しつ　斬つて落した。スパット斬りつけた、といふ位の語意。○さて　さうして、そこで。○山だち　山賊。「山賊あり」は、その男自身がわめいた詞。○のゝしりければ　大聲にわめき立てたので。○おこりて　起りて。大勢どか〳〵と出ての意。○出であへば　その場に出て來ると。そこに出で會する意。○あまたして　大勢で、大勢掛りで。○手おほせ　手を負はせ、斬りつけて負傷させておいて。「おほせ」は「負はせ」の轉。○血つきて　血がついて。斬られたのでなく、具覺坊が斬られた時の血が飛んで馬に迄ついた、それのついたまゝ、といふのである。○宇治大路の家に　宇治の大通の所にある其の飼主の家に。馬はよく道を知つてゐるので、自分で走つて家に歸つて行つたのである。○あさましくて　驚きあきれて。餘りの事にすわ一大事と驚きあきれる程に感じてといふ語意。○走らかし　「走らし」に同じ。走らせて遣つたの意。○梔原　梔の多くはえてゐる原の意。新撰六帖の歌に『木幡山あるはさながら口なしの宿かるとても答へやはせん』とあつて、木幡の邊一體にくちなしの原であつたものと見える。○によび　うめき。痛手に苦んでうん〳〵とうなつて寢てゐたのである。○かきもて來つ　舁いてつれて來た。「かく」は輿か戸板かさういふ種類の物に乘せてかつぐをいふ。「もて」は働きの連行をあらはす詞で、「て」といふに近く、別段深い意味はない。持つてといふ意味の動詞ではない。○からき命生きたれど　危い一命は助かつたが。「からき命」は、あぶない、今にもなくなりさうな危い命の意。「命生く」といふのは、命が助かるといふ意の慣用語。○きり損ぜられ　きりいためられ、きり傷けられ。

第八十八段

あるもの、小野道風の書ける和漢朗詠集とて持ちたりけるを、ある人、「御相傳、うけることには侍らじなれども、四條大納言えらばれたるものを、道風書かむこと、時代や違ひ侍らむ、おぼつかなくこそ」といひければ、「さ候へばこそ、世にありがたきものには侍りけれ」とて、いよ〳〵祕藏しけり。

【通解】　或者が、小野道風の書いた和漢朗詠集というて持つてゐたのを、或人が「御家寶として代々御傳への品で、勿論根據のない事ではなく慥かな品で御座いませうけれど、四條大納言公任卿の御撰述になつたものを、道風が書くといふのは、ちと時代が違ひませうか、その點が如何かと存ぜられます」というた所が、「さうでありますればこそ、實にこの上もなく珍しいものでありますのだ」というて、いよ〳〵大事に所藏したのであつた。

【文旨】　丸で年代違ひのでたらめの品を祕藏したといふ滑稽な話。僞物も僞物、箸にも棒にも掛らぬ僞物を評して「時代や違ひ侍らむ、おぼつかなくこそ」などと尤もらしく遠廻はしにいふ所も面白いし、それを聞いて「さ候へばこそ、世にありがたきものには侍りけれ」といよ〳〵祕藏したといふ徹底した馬鹿さ加減が又如何にも面白い。

【語義】　○小野道風　佐理・行成と並んで三蹟と稱せられた有名な能書家。醍醐・朱雀・村上の三朝に歷任し、從四位上木工頭で、村上帝の康保三年（一六二六年）に歿した。年七十一。○和漢朗詠集　朗詠（詩歌などの名句に節をつけて謠ふこと）に歌ふ爲めの和漢の有名な詩句和歌を集めた書。其の撰者については、或は紀淑望といひ、或は公任といひ、又詩は公任で歌は其の後師親の加へたものだといふやうに、色々說があるが、一般には公任の撰といふ說が用ひられてゐる。こゝもその說に據つてゐるのである。○御相傳　代々家寶として御家に傳へたものの意。○うけることには侍らじ　根據のない事では御座いますまい。いゝ加減の僞物ではあるまい、慥かな品に違ひなか

らうといふ意。○四條大納言　藤原公任。詩歌の才にすぐれた有名な人。關白頼忠の子で、正二位權大納言兼按察使に至り、後出家して長元二年（一六八九）に歿した。○時代や違ひ侍らむ　時代が違ひませうか。公任が和漢朗詠集を撰したのは明かに道風死後の事だから、丸つきり時代が違ふ。それを「時代や違ひ侍らむ」といふ輕い疑問推量の詞で遠まはしに言うたのである。○おぼつかなくこそ　どうも心もとない、どうも不審だ。上の文句を受けて、その點がどうも疑はしいといふのである。「こそ」の下に「侍れ」が省かれてゐる。○さ候へばこそ　さうありますからこそ、さうして年代が違ひますればこそ。「さ」は「しか」の約。○世にありがたき　この上もなく珍しい。「ありがたき」は有る事の難い、めつたにない、珍しいの意。○侍りけれ　あります、ありますのだ。「けれ」は詠歎の趣で、こゝでは過去の意味は持たぬ。○祕藏しけり　大切なものとして所藏した。大事にしまひ込んで所持してゐたの意。

第八十九段

「奥山にねこまたと云ふものありて、人を食ふなる」と、人のいひけるに、「山ならねども、これらにも、猫の經あがりて、ねこまたになりて、人とることはあなるものを」といふものありけるを、何阿彌陀佛とか、連歌しける法師の、行願寺のほとりにありけるが聞きて、一人ありかむ身は心すべきことにこそと思ひける頃しも、ある所にて夜ふくるまで連歌して、たゞ一人かへりけるに、小川のはたにて、音に聞きしねこまた、あやまたず、足のもとへ、ふと寄り來て、やがてかきつくまゝに、頸のほどを食はむとす。肝心もうせて、防がむとするに力もなく、足も立たず、小川へころび入りて、「助けよや、ねこまた、よや、よや」と叫べば、家々より松どもともして、走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。「こはいかに」とて、川の中より抱き起したれば、連歌の賭物とりて、扇、小箱など懐に持ちたりけるも水に入りぬ。希有にして助かりたるさまにて、はふ〳〵家に入りにけり。飼ひける犬の、暗けれど主を知りて、飛びつきたりけるとぞ。

【通解】「奥山に猫股といふものがあつて、人を食ふのだ」と或人がいうた所が、「いや山でなくても、この邊にも猫がこうろへて、猫股になつて、人をとる事はあるのだもの」といふ者のあつたのを、何とか阿彌陀佛とやらいうて、連歌をやる坊主の、行願寺の邊に住んで居たのが聞いて、一人あるきする身は、よく注意すべき事だと思つた、恰度その頃、或所で夜の更けるまで連歌をやつて、只一人歸つて來た所が、小川の端で、兼ねて噂に聞いた其の猫股が、いきなり、足もとへ、ひよつと寄つて來て、すぐ飛びつくなり、頸の邊を咬まうとする。吃驚仰天正氣も失せて、防がうとするに其の力もなく、足も立たず、小川へころげ込んで、「助けて呉れえ、猫股！、よう、よう」と叫んだので、家々から人々が松明をともして、走り寄つて見ると、この邊で見知越しの僧である。「これはまアどうした事だ」というて、川の中から抱き起すと、連歌の賞品を取つて、扇や小箱などを懐に入れて持つてゐたのも、水の中に這入つて了つた。珍しくも九死に一生を得たといふさまで、這ひずるやうにして家に這入つたのであつた。飼つてあつた犬が、暗くてもよく飼主を知つて、飛びついたのであつたといふ事だ。

【文旨】自分の飼犬に飛びつかれたのを猫股と勘違へて、川の中へころげ込み、ひどい目を見たといふ滑稽な話。如何にも臆病者に――いや臆病者に限らず、誰しも一寸ありさうな話だ。始めから如何にもほんとの猫股が出たら

しく事細かに描寫して行つて、おしまひになつて藪から棒に、「飼ひける犬の」云々とした其の筆致が、實にユーモアの妙を極めてゐる。一寸落し噺といふ趣である。

【語義】○ねこまた　猫股。猫又とも書いてゐる。目は猫のやうで、尾が二股に分れ、能く人を害するもの。○山ならねども　山でなくとも。「山ならずとも」といふ假定を強めて、既定形式に書いたのである。○これら　この邊。○經あがりて　こうろへて。年を經て恐ろしいものになるをいふ。○あなるものを　あるのだもの。「あなる」は「あるなる」の略。「ものを」は、「何奥山に限つた事はない、此の邊にもあるから油斷はならぬ」といふ餘意を含めた趣の語。○何阿彌陀佛　何とか阿彌陀佛。默阿彌、世阿彌などいふ類で、その名を曖昧に「何」と書いたのである。○とかや　とかいうて。下に「いひて」の省かれた慣用形式。○行願寺　京都一條にあつて俗に革堂といふ寺。○ありけるが　あつた其の僧が。「が」は主語を爲す助詞で、上の「法師の」の「の」と呼應する。○ありかむ身　歩く者。「あるく」は「あるく」に同じ、「ありく身」を婉曲に「ありかむ身」としたのである。○心すべき　注意すべき、用心すべき。○小川のはた　小川のへり。「小川」は行願寺の近所にあつた川の名。○音に聞きし　評判に聞いた、噂に聞いてゐた。○あやまたず　ねらひ違はずといふ意の慣用語。こゝもその趣で、いきなり足許へ寄つて來たといふのである。○ふと　ひよつと、そろ〳〵來るでなく、ひよつとやつて來た、即ち氣の附いた時にはもう足もとに寄つてゐたといふ趣。○やがてかきつくまゝに　すぐ飛びつくなり。「やがて」はすぐそのまゝの意。「かきつく」は飛びつく、かぢりつく。「まゝに」は、さうするなりいきなりにの意。○頸のほど　頸の邊。「ほど」はそのあたりの意。○肝心もうせて　正氣もなくなつて。びつくりして恐しさに肝ッ玉もどうかなつて了つたといふのである。○防がむとするに力なく　防がうとしてもその力もなく。防ぎも何もならぬの意。○助けよやねこまたよやよや　「助けてくれ、猫股、よう〳〵」と猫股に向つて言ふ言葉。最初私は「猫股だ、助けて呉れ」と他に救助を求める趣の表現かと考へたが、橘氏が指摘してゐる通り、「肝心もうせて」居て言ふ言葉であり、表現自體から見ても慥かに猫股に助けを乞ふ趣に違ひない。○松どもともして　人々が松明をともして。「ども」は複數をあらはす語。○このわたり　このあたり、この邊。○賭物　賞品。○小箱　小さな箱。○持ちたりける　「持ちたりける其の屆小箱も」と考へて然るべき形。○希有にして　珍しくも、不思議にも。こゝでは九死に一生を得たといふ程の意。○はふはふ　這ひ〳〵。今日いふ這々の體とは少し違つて、これは文字通りに這ひずり這ひずりの意と見た方が面白い。歩けないので這ふやうにしてといふのである。○飼ひける犬　その連歌法師の飼つてゐた犬。○主　飼主。即ちその連歌法師をいふ。

第九十段

大納言法印のめしつかひし乙鶴丸、やすら殿といふものを知りて、常にゆき通ひしに、ある時いでて歸り來たるを、法印、「いづくへ行きつるぞ」と問ひしかば、「やすら殿のがりまかりて候ふ」といふ。「そのやすら殿は、男か法師か」と、また問はれて、袖かき合せて、「いかゞ候ふらむ、頭をば見候はず」と答へ申しき。などか頭ばかりの見えざりけむ。

【通解】大納言法師の召使つてゐた稚兒の乙鶴丸が、やすら殿といふ者と近づきになつて、常に通つてゐたが、或時出掛けて歸つて來たのを見て、法印が、「どこへ行つて來たか」と問うたら、「やすら殿の所へまゐりました」といふ。「そのやすら殿といふのは、俗人か坊さんか」と重ねて聞かれて、乙鶴丸は袖をかき合はせて、「さあいかゞで御座いませうか、頭は見ません」とお答へした。どうして又頭だけが見えなかつたのだらう。

【文旨】これは古い註書にある通り、男色の關係をいうたものだらうか。そして相手の男が俗人か坊主かと聞かれて、袖かき合はせて「さアどうでせうか、つい頭は見ませんでした」といふ、如何にも子供らしい滑稽さ、それを又「などか頭ばかりの見えざりけむ」と皮肉つた所に、實に輕妙洒脫な味がある。「袖かき合せて」は、かしこまつたさまと輕く見てよからう。

【語義】○大納言法印「法印」は僧位の最高で、詳しくは法印大和尚位といふ。これは大納言の人の出家して法印になつた者か、又は大納言の子の法印になつた者かであらう。○乙鶴丸　童子の名。○やすら殿　どんな人か分らぬ。○知りて　ちかづきになつて、知る中になつて。○やすら殿のがり　やすら殿のもとへ。○男か　俗人か。法師に對して俗の人を「男」といふ。○頭をば見候はず　頭は見ません。頭を見れば毛の有無で僧か俗か分るのだが、それを見ないから、どちらとも分り兼ねるといふのである。○などか　どうして。疑問の詞。○頭ばかりの頭だけが。外は見たらうに頭だけがどうして目につかなかつたらう、といふ意。

第九十一段

赤舌日といふ事、陰陽道には沙汰なきことなり。昔の人これを忌まず。このごろ何者のいひ出でて忌みはじめけるにか、この日あること、末通らずといひて、その日いひたりしこと、したりしことかなはず、得たりしものは失ひつ、企てたりしこと成らずといふ。愚かなり。吉日を選びてなしたるわざの末通らぬを數へて見むも、また等しかるべし。その故は、無常變易のさかひ、ありと見るものも存せず、始めあることも終なし。志は遂げず、望は絶えず。人の心不定なり、ものみな幻化なり。何事かしばらくも住する。この理を知らざるなり。吉日に惡をなすに、必ず凶なり、惡日に善を行ふに、かならず吉なりといへり。吉凶は人によりて日によらず。

【通解】赤舌日といふ事は、陰陽道には別に何ともいはない事である。昔の人はそれを忌まない。この頃何者が言ひ出して忌みはじめた事なのか、世間では、此の日にあつた事は末遂げないといひ、又其の日言うた事、した事は成就せず、手に入つたものは失ふし、企てた事は出來上らないといふ。愚な事である。吉日を選んでした事の末遂げないのを數へて見るも、その割合はやはりそれと等しいに違ひない。それは何故かといふに、此の世は定めなく、常に變つて止まぬ境界で、有ると見るものは實際は存せず、始のある事も終はない。志す事は遂げず、而も望は絶えない。人の心といふものが實際にあるものかどうか定めないものであり、物は皆まぼろしの現はれである。何事かしばらくたりとも變らず常住であらう。人が赤舌日などを忌むのはこの道理を知らぬのである。吉日に惡をするに、其の結果は必ず凶、惡日に善を爲すに、其の結果は必ず吉だというてある。吉凶は事を行ふ人の如何によるのであつて、日の如何にはよらない。

【文旨】その頃特に人の忌んだ赤舌日を取つて、それを忌むの愚をいうたのであるが、而も其の主眼とする所は、寧ろ赤舌日の問題ではなくて、「こんな無常變易の世に日の善惡を忌むなどいふ事がてんで間違つてゐる。どんな吉日だつて惡事をやれば必ず凶、どんな惡日だつて善事をやればきつと吉だ。吉凶は人による事で日による事ではない」といふ一種の堅實な人世觀を述べた所にある。佛教思想の無常觀から來て、而も儒教の道德思想とうまく調和してゐる。そこに吾々は兼好の明晰な理性の動きを認める事が出來よう。

【語義】○赤舌日　太歲卽ち木星の西門の番神を赤舌神といふ、この神下に六鬼があつて、之を役して番に當らせるが、中にも羅刹神といふ第三鬼は最も凶惡で、人間を惱亂するので、其の當番の日を特に赤舌日として忌むと

いふ事である。これについては頗る面倒な説明が與へられてゐるが、專門的な事だからこゝには省略する。○陰陽道。おんみやうだうとも訓ずる。古へ陰陽寮の學科の一で、天文・曆數・占筮・相地等の事を研究した道又はその術。○沙汰なきこと　話のないこと。全く無關係で、それに言及してゐないといふ意。但、赤舌日は陰陽道の泰斗安倍晴明の簠簋内傳にあるのだから、「沙汰なきこと」ではない、陰陽道として明かに忌んでゐた日である。多分陰陽家が其の書を祕して世に出さなかつた爲めに、兼好もそれを知る機會がなくて世俗の流傳と信じてゐたのであらう。○忌みはじめけるにか　こゝを文の終止としてはつきり切つて了はずに、下文の「……いひて……いふ」に掛る副詞的の詞と見た方がよからう。○この日あること　この赤舌日にある事。○末通らず　末遂げない、うまく成就しない、終りを全うしない。○いひて　いひ又。こゝの「て」は、そして又、或は又の意である。○かなはず　うまく行かぬ、成就せぬ。○愚かなり　それは愚である。「此の事愚かなり」となつた本もある。○吉日　よい日、事をするによいとなつてゐる日。○等しかるべし　その割合は等しいであらう。○無常變易のさかひ　常無くして絶えず變易する境界。この世は定めなく常に變つて行つて決して常住不變ではないといふこと。○不定　定めないこと。下の「幻化」に對して、實在か否か不確實なものといふ意をいうたものと考へられる。○幻化　實體のないものを現に存在する如く化造したもの。物はさうした幻の現象に過ぎないといふのである。○住する　いつも變らずにある、常住不變である。上の「何事か」の「か」と呼應して反語になつてゐる。○いへり　いうてある。或人がいうたといふ意でなく、もつとぼんやりと、……といふ事がある、……と物の本にある、といふ位の心持でいうた語と見るがよい。○吉凶は云々　事文類聚に『吉凶由レ人、焉繫二時日一』とある。

第九十二段

ある人、弓射ることを習ふに、もろ矢をたばさみて的にむかふ。師のいはく、「初心の人、ふたつの矢を持つことなかれ。後の矢を頼みて、初の矢になほざりの心あり。毎度たゞ得失なく、この一箭に定むべしと思へ」といふ。わづかに二つの矢、師の前にて、二つをおろかにせむと思はむや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ萬事にわたるべし。道を學する人、夕には朝あらむことを思ひ、朝には夕あらむことを思ひて、重ねて懇に修せむことを期す。いはんや一刹那のうちにおいて、懈怠の心あることを知らむや。何ぞたゞ今の一念において、直にすることの甚だ難き。

【通解】或人が、弓を射る事を習ふのに、諸矢を手に持つて的に向つた。するとその師匠のいふやう、「初歩の人は、二つの矢を持つてはならぬ。後の矢をたのみにして、最初の矢をおろそかにする氣がある。射る度毎にいつも只中つたら外れたらといふやうな考なく、すべてをこの一矢できめようと思へ」というた。僅に二つの矢である、而も嚴しい師匠の前で、その一つを疎略にしようなどと思ふ筈はない。油斷の心は、自分ではそれと氣づかないでも、師にはそれがちやんと分る。此の弓の戒めは萬事に渉るべき事である。道を修行する人は、夕には又あくる朝のある事を考へ、朝には又夕のある事を考へて、重ねて丁寧に修めようと心づもりをしてゐる。まして一瞬間の内に於て、自分に油斷おこたりの心のある事に氣づかう筈はない。何だつて又思ひ立つた今のその瞬間の純一な精神を以て、すぐにそれを決行する事がかうひどくむづかしいのであらう。

【文旨】初心の人は諸矢を手挾んで的に向つてはならぬといふ訓誡を例に取つて、道を學する人の、鬼角苟安を

貪り勝ちな實情を述べ、何事でもその刹那に自己の全精神を傾けてやらなくてはならぬというてゐるのである。一刹那に於ける懈怠の心――それが文の焦點である。諸矢を手挾むものは、自分では一生懸命であつて、さうと氣つかぬ内に、既にその懈怠はきざしてゐる。まして明日は明後日はと一日延べに考へてゐる世の一般の人々に於ては、刹那に潜む懈怠の心などは、固より心づくべくもない。所が、そも〳〵人が道を學得せずに了ふ最大原因は、その刹那に潜む懈怠にある。刹那々々に全我的に緊張して「毎度得失なくこの一矢にて定むべし」と考へてゐれば、「夕には朝あらむことを思ひ……重ねて懇に修せむことを期す」るやうな、そんな呑氣な氣分の起らう筈はない。而もそれが實に至難だ。何だつて人は斯うと思ふ其の瞬間に直にそれをする事が斯うもむづかしいのだらうと、文末に至つては、人を戒めるだけでなくて、深く自らを顧みて歎息するやうな調子にまで突込んでゐる。眞に吾々に取つての尊い活教訓である。

【語義】○諸矢。二つの矢。甲矢（最初に射る矢）と乙矢（次に射る矢）で一對を爲すのである。○たばさみて。手に挾んで、手に持つて。○初心。初學、習ひはじめ。○なほざりの心。疎略の心。おろそかにして注意しないのをいふ。○得失なく。當るは得、當らぬは失、即ち若しこれでしくじつたらあれで當てようといふ風に考へる事なくの意。○一箭に定むべし。一矢できめよう。この一本で凡てをきめようといふ、所謂一番勝負の心境である。○おろかに。おろそかに、疎略に。○思はむや。思はうや思ひはせぬ。反語。○懈怠。「げたい」と濁つて讀む。おこたること、心に油斷すること。○道を學す。道を修行する。こゝの「道」は佛教上の道をいうたものだらうが、學問藝術凡ての上にも響くやうである。○夕には云々。晩になると明朝があるからそれから勉强しようと考へ、朝になると又々晩からやらうと考へる。「夕」は「朝」に對しただけで、殊更に夜とか夕方とか限つた譯ではなく、その邊を廣くぼんやりいうたものと見てよい。○期す。期してゐる。きつとやらうと心づもりをしてゐるの意。○一刹那。一瞬間。「刹那」は梵語で、極めて短い時間をいふ語。○たゞ今の一念。現在の刹那。「一念」は刹那の意の佛語であるが、別に一心の義に用ひた例もある。こゝは刹那といふ語義を主として、その刹那に於ける純一無雜の念慮といふ意を含めていうた趣のやうに考へられる。

第九十三段

「牛を賣るものあり。買ふ人、明日その價をやりて、牛を取らむといふ。夜の間に牛死ぬ。買はむとする人に利あり、賣らむとする人に損あり」とかたる人あり。これを聞きて、かたへなるものの曰く、「牛の主まことに損ありといへども、また大なる利あり。その故は、生あるもの、死の近きことを知らざること、牛すでにしかなり。人またおなじ。はからざるに牛は死し、はからざるに主は存せり。一日の命萬金よりもおもし。牛の價鵝毛よりも輕し。萬金を得て一錢を失はむ人、損ありといふべからず」といふに、皆人嘲りて、「その理は牛の主に限るべからず」といふ。

【通解】「牛を賣る者がある。買ふ人が、明日その代價を支拂つて、牛を引取らうといふ。所がその夜の中に牛が死ぬ。とすると、買はうとする人は得をして、賣らうとする人は損する譯だ」と語る人があつた。それを聞いて、はたの仲間の者の曰ふやう、「牛の持主は誠に損したとはいふものの、又大きな利がある。といふ譯は、命あるものの、死の近い事を悟らずにゐる事、牛が既にその通りである。人とてもやはり同じ事だ。思ひ掛けぬに牛は死し、思ひ掛けぬに持主は生きてゐる。一日の生命は萬金よりも重い。牛の價は鵝毛よりも輕い。その重い萬金を得て輕い一錢を失うた人が、損をしたといふべきではない」といふと、一座の人は皆その人を嘲つて、「そんな理窟は何も

牛の持主に限つた事ではない」といふ。

【文旨】「生の樂み」といふ意見を引き出す爲めの一つの例――恐らく假想の例で、「かたへなる者」は作者自身であらう。それを他に假託して言はしめた例の筆法である。ぽつり〳〵と簡潔に句切つて、話の筋、議論の筋を進めて行く筆致が殊に面白い。

【語義】○牛を取らむ　牛を引取らう。自分の方へ牛を持つて行かうの意。○かたへなるもの　傍輩、傍にゐたその仲間の人。文旨の所で述べた如く、これは作者自身をぼんやりと斯ういうたものだらう。○しかなり　その通りだ。ぴん〳〵してゐた牛が夜の間に死ぬ。生ある者の死の近きを知らざるは、此の牛が好適例だの意。○はからざるに　思ひも掛けぬのに、思ひ掛けなくも。○鵝毛　がてうの毛。ごく輕いものの喩にいふ語。○皆人　皆の人。その座にゐた人々の意。次節の「人みな」は人は皆、世人は皆で、この二つの原義的區別によつて明かに使ひ分けられた例である。○その理は牛の主に限るべからず　さういへば誰だつてさうで、何も牛の主だけに限つた理窟ではない、と嘲笑したのである。

又曰く、「されば死をにくまば、生を愛すべし。存命のよろこび、日々に樂まざらむや。愚かなる人、この樂みを忘れて、いたつがはしく外の樂みをもとめ、この財を忘れて、危く他の財を貪るには、志滿つことなし。いける間生をたのしまずして、死に臨みて死を恐れば、この理あるべからず。人みな生をたのしまざるは、死をおそれざる故なり。死を恐れざるにはあらず、死の近き事を忘るゝなり。もしまた生死の相にあづからずといはゞ、實の理を得たりといふべし」といふに、人いよ〳〵嘲る。

【通解】其の者の又曰ふやう、「だから人は死を厭ひ惡むならば、生を愛するがよろしい。生きてゐるといふ喜びを、どうして日々に樂まないでよからう。愚かな人は、この生の樂を忘れて、營々として外の樂を求め、その生といふ貴重な財寶を忘れて、あぶなつかしく他の財を貪つてゐる、そんな事ではいくら求めても求めても志の滿ちる事はない。生きてゐる間生を樂まないで、いよ〳〵死ぬ時に臨んで死を恐れろとすれば、それは丸で理窟に合はない、そんな道理のあるべきものでない。人が皆生を樂まないのは、死を恐れないからである。いや死を恐れないではない、死のすぐ手近にある事を忘れてゐるのである。それとも若し又生とか死とかいふ形には拘泥せぬ――生死といふやうな現象から超越してゐるといふなら、それこそ眞の道理を悟り得たものというて然るべきだ」といふと、一座の人々はいよ〳〵それを嘲笑した。

【文旨】前節の牛の例から說き進めて、「生の樂」を高調し、更に一歩進んで「生死を超越する」といふ所まで說き及ぼしたのである。玆にいふ「生の樂」は生活の享樂ではない、生きてゐるといふ事それ自身を心から樂んで、一切外界の慾望を絕ち、「生」を感謝する敬虔な態度であれといふのである。牛の主が萬金を得て一錢を失ひ大に得をしたと說いた其の意味が人々に徹しないので、更に斯う說き進めたら、いよ〳〵分らなくなつて、結局「何だ馬鹿馬鹿しい」といふ事に終つたといふのである。前節とよく呼應して、而もそれが前節の說明といふ趣でなく、面白く展開して行くきび〳〵した筆致は、さすがにうまいものである。

【語義】○生　生きてゐるといふ事。「死」に對する「生」の自體。○樂まざらむや　樂まなくてよからうや。○いたつがはしく　骨を折つて、苦勞しての意。はたから見ると如何にも營々として求めてゐるやうに思はれるといふ趣の副詞で、「外の樂みをもとめ」の全體に掛る。○危く　あぶなく。これも外から見た感じで、「他の財をむさぼろ」のが如何にもあぶなつかしく、その身に危害の來る事がまざ〳〵と見えるやうにしてといふのである。○貪るには　貪つてゐるからには。「貪る、さあらむには」と考へるとよく分る。○志滿つ　思ふ志が滿ちる、心に滿足

する。○この理あるべからず。上の續き具合から見て一寸解しにくいが、「死を恐れば、（ソレハワケノワカラヌ話デ）この（ソンナ）理あるべからず」と見たら分らう。即ち前の「人死をにくまば生を愛すべし」と呼應して、死が恐ろしいなら生を樂むがよい、生を樂まぬ位なら死は何でもない筈、然るに、生は樂まないか死に臨んでは恐れる、そんな矛盾した話のあらう筈はない、と斯ういふ心持で見たらよからうと思ふ。○生死の相にあづからず。生とか死とかいふ形にはあづからない。生といひ死といひ、それは要するに形に過ぎぬ、無常流轉の世の泡沫のやうな現象に過ぎぬ、さういふ形には超越して、全然生死の問題を念としない、といふ意。○實の理。眞理。ほんとの理を悟り得たものだの意。

第九十四段

常磐井相國、出仕したまひけるに、勅書を持ちたる北面あひ奉りて、馬よりおりたりけるを、相國後に、「北面なにがしは、勅書を持ちながら、下馬し侍りしものなり。かほどのもの、いかでか君に仕うまつり候ふべき」と申されければ、北面をはなたれにけり。勅書を馬の上ながら捧げて見せ奉るべし。おるべからずとぞ。

【通解】常磐井の太政大臣が、出仕參内なされる途で、勅書を持つた北面の武士が行きあひ申し上げて、馬からおりて恭々しく禮をしたのを、太政大臣はあとで「北面の武士何某は、勅書を持ちながら下馬いたしたものである。こんな不覺な者が、どうして君に御奉公申上げる事が出來ませう」と申されたので、その者は北面の職を免ぜられたのであつた。さういふ際には、勅書を馬上のまゝで捧げてお見せ申すべきである。貴人だからとて馬からおりてはならぬといふ事である。

【文旨】故實の一つとして、實例によつて勅書を持つた場合の心得を述べたといふ迄である。

【語義】○常磐井相國　太政大臣藤原實氏。土御門帝以下六朝に歴仕し、文永六年に薨じた人。「相國」は太政大臣を唐風にいふ語。○出仕。勤めに出る。こゝは參内した意。○勅書。勅命の文書。但こゝは北面の武士が持つて來たのだから上皇の院宣だらう。院宣をも通じて勅書といつたものと見て差支あるまい。○北面あひ奉りて。北面がおあひ申して。北面が勅書を持つてどこかへ行かうとしてやつて來ると途で相國に出逢つたので、下馬して敬意を表したといふのである。○北面。北面の武士。白河院の時に始めて置かれたもので、院中を護衛する武士。院御所の北面にゐるからの稱。○持ちながら。持つてゐながら。こゝの「ながら」は反戻の意。○かほどのもの。これほどの者、こんな不覺な者。こんな分りきつた事も心得ぬ程の者の意。○仕うまつり。お仕へ申し、御奉公申上げ。○はなたれにけり。免職せられて了つた。「北面を」は北面の職をで、從つて「はなたれ」の「れ」は受身の趣と考へてよからう。○勅書を云々。勅書を持つてゐる時高貴の人に出逢つたら、馬上のまゝその勅書を捧げてお目に懸けて、自分は勅書を持つてゐるから、下馬は致さぬといふ意味を示せといふのだらう。

第九十五段

「箱のくりかたに、緒をつくること、いづかたにつけ侍るべきぞ」と、ある有職の人に尋ね申し侍りしかば、「軸につけ、表紙につくること、兩說なれば、いづれも難なし。文の箱は、多くは右につく。手箱には軸につくるも、常のことなり」と仰せられき。

【通解】「箱のくりかたに、紐をつけるのには、どちらの方につけてよろしう御座いませうか」と、或故實家に尋ねました所が、「軸卽ち左につけるのと、表紙卽ち右につけるのと、兩說あるから、どちらでも差支ない。書箱は多くは右につける。手箱には軸卽ち左につけるのも、普通の事だ」と仰せられた。

【文旨】箱のくりかたに紐をつける仕方を述べた故實上の考證で、兼好のさうした方面の趣味といふ以外に何事もない。

【語義】○箱のくりかた　箱の刳つた形とするのが古來定說のやうになつてゐるが、橘氏が刳るのは箱の蓋だからさうすると蓋に緒をつける事になつて變だといふ見地から、刀の栗形卽ち下げ緒を附ける穴に準じて、「箱の緒を通す環、又はそのために輪形の側面にさし出た所」と斷じられたのは卓見である。箱についての類例は見當らぬが、恐らくさういふものの稱呼に相違ないであらう。○緒　箱をしめる紐。こゝの文意によれば一方につけてくる〳〵と卷くのである。○有職の人　故實家、故實をよく心得てゐる人。○軸　左をいふ。○表紙　右をいふ。手紙は勿論書物も卷物になつてゐたので、文を入れる箱の左を軸がた、右を表紙がたというたものであらう。左右は箱の蒔繪の本の方を自分の手前にしていふのである。○いづれも難なし　どちらも差支ない、左右何れに紐をつけても差支ない。○文の箱　手紙か或は書物を入れて持歩く箱の事だらう。○手箱　座右に置いてこま〳〵したものを入れる小箱。○常のこと　通常の事、普通にやる事。

第九十六段

めなもみといふ草あり。くちばみにさゝれたる人、かの草をもみてつけぬれば、すなはち癒ゆとなむ。見知りておくべし。

【通解】めなもみといふ草がある。まむしにさゝれた人が、かの草をもんでつけると、すぐになほるといふ事だ。見覺えておくがよい。

【語義】○めなもみ　草の名。菊科にナモミといふ草があり、又同科にそれによく似た草があるので、漢名莫耳又は蒼耳なるをヲナモミ、豨薟、又は猪薟なるをメナモミと言つた。所がその兩者とも、本草に說く所はもんで附けるとまむしにさゝれたのがなほるといふ本文の記述と合つてゐないといふ見地から、こゝにいふのは天明精の事だらうといふ。それはヤブタバコといふ草だと橘氏が考證してゐられる。○くちばみ　まむし、蝮。○すなはち　すぐと、直ちに。

第九十七段

その物につきて、そのものを費しそこなふもの、數を知らずあり。身に虱あり。家に鼠あり。國に賊あり。小人に財あり。君子に仁義あり。僧に法あり。

【通解】其の物についてゐて、そのものをやぶりそこなふものが、數限りなくある。人のからだに虱がある。家に鼠がある。國に盜賊がある。小人に財がある。君子に仁義がある。僧に法がある。

【文旨】老莊の思想から來たもので、最後に「君子に仁義あり、僧に法あり」とした所が實に面白い、その二つが兼好の主眼で、前の四つは寧ろ客であらう。この二つは一方から見れば、老子の『大道廢有仁義』の思想ともいへるし、又一方からいへば、君子は仁義に囚はれて却て君子たるの眞意を失ひ、僧は法に囚はれて却て眞の佛道から遠ざかる、要するに形に執著するのが一番いけないといふ思想ともいへるし、又どうやら、仁義々々と仁義の

卸し屋のやうに仁義を振り廻はす所謂君子、法々とごしやう大事に法を守つて眞の大悟に至り得ぬ世の一般の坊主たちを嘲つてゐるやうにも取れる。

【語義】○つきて　屬して、又は寄生しての意。○費しそこなふ　やぶり害する。「費し」は使ひはたす意でなくやぶり損ずるの意。弊の字に近い方の意だが、普通に「費」の字をあてる。○數を知らず　いくらあるとも分らず、數限りなく。○國に賊　「家」の對として「國」というたまでで、別に國賊といふ特別の意味ではない、只盗人をいふ。○小人に財　無德の小人は財を貪る、その爲めに遂に身の破滅を招くのである。

第九十八段

たふとき聖のいひおきけることを書きつけて、一言芳談とかや名づけたる草紙を見侍りしに、心にあひて覺えし事ども、

一、しやせまし、せずやあらましと思ふことは、おほやうは爲ぬはよきなり。

一、後世を思はむものは、糒炊瓶ひとつも持つまじきことなり。持經、本尊にいたるまで、よきものを持つ、よしなきことなり。

一、遁世者は、なきに事かけぬやうをはからひて過ぐる、最上のやうにてあるなり。

一、上臈は下臈になり、智者は愚者になり。德人は貧人になり、能ある人は無能になるべきなり。

一、佛道を願ふといふは、別のことなし。暇ある身になりて、世のこと心にかけぬを第一の道とす。

この外もありし事ども覺えず。

【通解】貴い聖人のいひ置いた事を書きつけて、一言芳談とか名づけた本を見ましたが、その中で自分の心にぴつたり來るやうに思はれた條々、

一、しようか、しま、かと思ふ事は、大體はしないがよいのだ。

一、苟も死後の安樂を思ふ程の者は、糠味噌瓶一つも持つてはならぬのだ。常に身に受持する御經や守り本尊の佛像に至るまで、よいものを持つのは、つまらぬ事である。

一、世を遁れて佛門に入つた者は、無いに事を缺かず何が無くても差支へぬ暮し方を考へて世を過すのが、一番よいゆき方であるのだ。

一、身分の高い人は低い人になり、智ある者は愚かな者になり、金持は貧乏人になり、才能のあるものは無能の者になるべきである。

一、佛道を願ふといふのは別の事はない。ひまのあるからだになつて、世間の事を一切念頭に置かないのが第一の道である。

この外にも色々あつたが、忘れて思ひ出せない。

【文意】一言芳談の中から會心の條を摘錄したのである。何れも老佛的の思想で、如何にも兼好の共鳴しさうな面白い思想である。そして吾々の處世上に引き當てて見ても、大いに參考すべき一面の活教訓だといへよう。殊に

第一の「しやせまし」云々や、第四の「上薦は」云々などがそれである。見方によつては、凡てがひどく消極的のやうだが、凡て物の相になづまず、物に執著せず、眞に道の本體を究め樂まうといふものの態度は、どうしても斯うない譯にはいかぬ。

【語義】○たふとき聖　貴い行僧。○一言芳談　上下二卷ある書、作者不明。○心にあひて　自分の考に合つて、同感に。○事ども　「ども」は複數をあらはす。○しやせまし　しようか。「し、や、せ、まし」と切れる、「し」も「せ」もサ行變格の動詞、「や」は疑問推測、「まし」は未來の助動詞「む」を幾分重くした趣の語。○せずやあらまし　せずにおかうか、卽ち、しまいかの意。○おほやうは　大體は、大概は。○せぬは　しないが、しない方が。○後世　來世、死後。佛教でいふ死後の安樂をいふ。○糂粉瓶　ぬかみそのかめ。ごく實用的な粗末なものの一つを擧げて、凡て財を貯へてはならぬ事を極言したのである。○持經　常に身を放たず持つてゐる經文。○本尊　自分が常に身の守りとして禮拜してゐる佛像。○持つ　持つのは。「持つは」の省略。○よしなき　つまらぬ、下らぬ。○遁世者　俗世間を遁れて部門に入り專念に修行してゐる人。○なきに事かけぬ　物の無いといふ事に不足を感じない。つまりは、何が無くてそれを不自由としないの意で、この文の「に」は「事に」と見るが一番よく合ふやうに思ふ。卽ち「する事に事を缺いて」といふやうな場合の「事に」と一致した趣である。○やうを　樣を、仕方を、方法を。生活樣式の意である。○はからひて過ぐる　考へて暮して行く。日頃から無一物に馴れるやうにして暮して行くといふのである。○最上のやう　最上の仕方。この「やう」も上の「やう」と同意で、生活樣式の義。「の如く」の意ではない。○上薦　身分の高い人、上流高貴の人。「薦」はもと僧家の語で、僧の年功を積んだものを「上薦」といひ、まだ功を積まぬものを下薦といふのであるが、それから轉じて一般に身分の高下、卽ち上流、下流の義に使はれる。この一節の意は、身分智能財産凡てについてそれを挾んではならぬ、それを持つてゐるといふ自意識を去らなくてはならぬといふのである。○德人　富者。こゝは道德上の「德」ではない。○佛道を願ふ　佛道を修めその道を悟り得ん事を願ふ。○この外もありし事ども　この外にもあつた色々な事。この外にもまだ色々の事があつたがの意。○覺えず　記憶してゐない、忘れて思ひ出せない。

第九十九段

堀川相國は、美男のたのしき人にて、その事となく過差を好みたまひけり。御子基俊卿を大理になして、廳務を行はれけるに、廳屋の唐櫃見ぐるしとて、めでたく作り改めらるべきよし仰せられけるに、この唐櫃は上古よりつたはりて、そのはじめを知らず、數百年を經たり。累代の公物、古弊をもちて規模とす。たやすく改められ難きよし、故實の諸官等申しければ、その事やみにけり。

【通解】堀川の太政大臣は、美男子の上に富裕な方で、何かにつけて豪奢を好まれたのであつた。御子の基俊卿を檢非違使の別當に任じて、檢非違使廳の事務を行はれたが、その際に、役所の唐櫃が見苦しいといふので、立派に作りかへられるがよいといふ事を仰せ出されたところ、この唐櫃は古くから傳つて、いつ始めて作つたものとも分らず、數百年たつてゐる。歷代相傳の朝廷の御器物は、古くやぶれてゐるのを以て名譽とする。たやすく改められ難いといふ旨を、故實に通じた諸官人達が申したので、その事は沙汰止みになつて了つた。

【文旨】これも故實趣味の一つで、「累代の公物、古弊をもちて規模とす」といふのが文の主眼であらう。

【語義】○堀川相國　太政大臣源基具。岩倉内大臣具實の子で、伏見帝の正應二年八月に太政大臣になつた人。

○美男のたのしき人。　美男子で且つ富裕な人。「の」は「の上に」の趣。「たのし」はこゝは普通に所謂樂しいといふ意でなく、「貧し」の反義語で、富裕だ、裕福だの義。宇治拾遺物語に「むかし東大寺に上座法師の、いみじくたのしきありけり。つゆばかりも人に物をあたふる事をせず、慳貪につみふかく見えければ」とある類と同語例。○その事となく　何といふ事なく、何かにつけて、萬事に。○過差　過分、度過ぎた奢りの義。○大理　檢非違使の別當（長官）の唐名。○廳屋　檢非違使廳の役所。○唐櫃　脚のある箱。「からうと」ともいうて、兩脇に一本づつ、前後に二本づつ、合せて六本の脚がある。訴訟文書などを入れる爲めに備へてあつたのである。○見苦し　古びて見ッともない。○めでたく　立派に。○上古　昔。只漠然とずつと昔からというたのである。○そのはじめを知らず　いつからこの唐櫃を使廳においたものか、その置きはじめが分らぬ。○累代　代々。幾代もかさねたの意。○公物　朝廷の器物。○古弊　古くてやぶれ損じてゐる事。○規模　規矩模範の義だが、鎌倉頃からは專ら名譽・面目の義に用ひられた。○故實の諸官　故實をわきまへた諸官人。平素特に故實方面の事にあづかる諸官人といふのであらう。

第百段

久我相國は、殿上にて水をめしけるに、主殿司、土器をたてまつりければ、「まがりをまゐらせよ」とて、まがりしてぞめしける。

【通解】　久我の太政大臣は、殿上の間で水をめし上つた時、主殿司が、土器を差上げられた所が「いや、まがりを持つて參れ」というて、まがりで召し上られたのであつた。

【文旨】　これも朝廷の故實をよく心得た人の態度を述べた一つであらう。

【語義】　○久我相國　源通光の事といふ。寶治二年六十二歳で薨じた人。○めしけるに　おあがりになつた時に。「めす」は飲む（食ふにもいふ）の敬語。○主殿司　元來は後宮十二司の一であるが、こゝは「殿上」の話だから、主殿寮（殿庭の掃除、湯沐、薪油等の事を掌る役所）の役人の事であらう。蓋し主殿寮と主殿司とを混同して書いたものと考へられる。○土器　かはらけ。素燒の盃で、節會の時に使ふ盞。○まがり　食器の稱で、木製の椀の類だらうといふ。○まゐらせよ　差上げよの義で、相手に對して謙讓を強要する趣、卽ち自己を尊大に構へた趣の表現で、相當身分の懸隔した間では、斯ういふ表現が慣用されたやうである。○して　を以て。

第百一段

ある人、任大臣の節會の內辨を勤められけるに、內記のもちたる宣命を取らずして、堂上せられにけり。きはまりなき失禮なれども、たちかへり取るべきにもあらず、思ひわづらはれけるに、六位の外記康綱、衣被の女房をかたらひて、かの宣命をもたせて、しのびやかに奉らせけり。いみじかりけり。

【通解】　或人が大臣親任の節會の時の內辨といふ役を勤められたが、うつかりして、內記の持つてゐた宣命を受取らずに、御殿へ上つて了はれた。それは非常な失態であるが、立戻つて持つて來る譯にも行かず、どうしたものかと思ひ惱んでゐられた時、六位の外記康綱が、かつぎを著た女をうまく賴んで、かの宣命を持たせて、こつそりと差上げさせた。實にすばらしい事であつた。

【文旨】これも例の故實趣味の一つで、殊に康綱の咄嗟の處置を感じた趣である。

【語義】○任大臣の節會　大臣任命の際朝廷から群臣に賜はる御酒宴。○内辨　節會の際に承明門の内で諸事を辨備する上卿。承明門外で辨備するのを「外辨」といふ。○内記　中務省被官の職員で、今日の書記官の如きもの、詔勅宣命を作り、位記を書く職である。○宣命　みことのりの一種、古體の純國文に書かれるものの稱。こゝは任大臣の宣命である。○堂上せられ　紫宸殿の上に上られたのをいふ。○きはまりなき　至極の、此の上なき、非常な。○失禮　失態、過失の意。○思ひわづらはれ　思ひ惱まれ。如何にしようかと心痛されたの意。○六位の外記　少外記の通稱。外記は内記の作つた詔書を勘へ正し、太政官の奏文を作り、先例をかんがへ、儀式を奉行する官。恰も今日の内閣書記官のやうな役。○康綱　建武元年に特に權大外記に任ぜられた人で、こゝの話はその以前の事を書いたものだらうといふ。○衣被　被衣をかぶつてゐるもの。第七十段にも見えてゐる言葉で、一般に衣被は女の外出用であるから、こゝも見物に來てゐた女の事と考へられるが、斯ういふ場合どうしてさういふ女が來合はせたのか、その事情は明かでない。○かたらひて　談合して。譯を話してうまく頼込んでの意。○いみじかりけり　えらい振舞であつた。臨機の處置として實にすばらしい事であつたと、康綱の才覺を褒めていうた語。

第百二段

尹大納言光忠入道、追儺の上卿をつとめられけるに、洞院右大臣殿に次第を申し請けられければ、「又五郎男を師とするより外の才覺候はじ」とぞのたまひける。かの又五郎は、老いたる衛士の、よく公事に馴れたるものにてぞありける。近衛殿著陣したまひける時、膝突をわすれて外記をめされければ、火たきて候ひけるが、「まづ膝突をめさるべくや候ふらむ」と、忍びやかにつぶやきける、いとをかしかりけり。

【通解】尹の大納言光忠入道が、追儺の式を行ふ奉行を勤められた時、洞院の右大臣殿に式の次第を尋ねて教を請はれた所が、「それはあの又五郎のやつを師とするより外に上分別はありますまい」と仰せられたのであつた。かの又五郎は、年取つた衛士で、よく公事に馴れてゐるものであつた。嘗て近衛殿が陣の座に著かれた時、膝突を敷かせる事を忘れてそのまゝすぐに外記をお召しになつた所、又五郎は恰度火をたいてをりましたが、「外記を召される前にまづ膝突をお召しになるべきで御座いませう」と、こつそりつぶやいたが、誠にどうも面白かつた。

【文旨】これも例の故實趣味で、殊更又五郎といふ老練な衛士の態度に興味を持つて書いてゐるのである。文段抄に「膝突を外記して召よせんとしてなるべし」とあるが、橘氏の考證に據ればそれは誤である。節會の内辨・公事の上卿が著陣して、まづ官人を召して膝突を敷かしめ、それに坐して、次に外記を召して諸役員が皆そろうたか否かを尋ねるのが普通の順序で、本文は、近衛殿がうつかりその順序を忘れて、官人を召して膝突を敷かせぬさきに外記を召して諸司の具不を問はれやうとしたので、又五郎が小聲で「まづ膝突をおめしになつたらよろしうございませうか」とつぶやいた、それが實に面白かつたといふ事を述べたものだといふわけである。

【語義】○尹大納言光忠入道　彈正尹（彈正臺の長官）兼大納言正二位源光忠。この人が出家して賢忠といつたと文段抄に註してゐるが、賢忠は源有忠の法名で、光忠は出家した形跡はないから、本文に「入道」とあるのは後人傳寫の誤だらうと、橘氏が考證してゐる。○追儺の上卿　十二月の晦日の鬼やらひの式の奉行。○洞院右大臣殿　藤原實泰と註してゐる。それが正しいだらうといふ。○次第　式の順序。○申し請けられける　尋ねて教を請はれた。參考の爲めに式の順序を尋ねられたのである。○男　やつ。下賤の男をいふ詞。○才覺　工夫、分別。○衛士　衛門府の官人で、宮城諸門を守り、火をたいて夜を守つたもの。○公事

朝廷で行はれる諸儀式などの事。○近衛殿　藤原家平か、又は基嗣の事かといふが、誰の事とも分らぬ。○著陣　陣の座、即ち節會の時官人の著坐する席に著かれたこと。○膝突　公事節會の折、役員が地上に跪坐する時の半疊の敷物で、薦又は疊で作つたもの。○つぶやきける。小聲でひとりごとを言つた。連體省略の形で、下に「が」「は」などいふ助詞を補つて見ればよい。○をかしがりけり　面白かつた。その事に興味を感じたといふのである。

第百三段

大覺寺殿にて、近習の人ども、なぞ〳〵をつくりて解かれけるところへ、醫師忠守參りたりけるに、侍從大納言公明卿、「我が朝のものとも見えぬ忠守かな」となぞ〳〵にせられけるを、「唐瓶子」と解きて笑ひあはれければ、腹立ちてまかり出でにけり。

【通解】後宇多院の御所大覺寺殿で、御側の人たちが、謎々を作つて解いて遊んでをられた所へ、醫者の忠守が參つた所が、侍從大納言公明卿が、「我朝のものとも見えぬ忠守かな」と謎々にせられたのを、「唐瓶子」と解いて皆どッと笑ひ合はれたので、忠守は腹を立てて退出して了つた。

【文旨】座興の面白い話を錄したといふまでであるが、醫師忠守が盛に漢語などを使つて唐風にすましてゐて、人々からひやかされたらしいやうに取れて、その意味に於て一寸面白く讀める。

【語義】○大覺寺殿　京の西部嵯峨村の中央、大澤池の西にあつた後宇多院の御所。○近習の人　御側近くに仕へて居る者。○なぞ〳〵　謎。一方で隱し言葉を出して、「なぞ〳〵」と問ひかけ、一方でそれを解く遊。○醫師忠守　典藥頭丹家忠守。丹家康賴十一世の孫。丹家氏は歸化人である。○侍從大納言　大納言で侍從を兼ねてゐたのであらう。「侍從」は中務省の官人で、主上の御側に近侍して、御用を務め、叡慮の及ばせられぬ所を補つた役で、定員二十人程の內三人は少納言が兼ねるのが普通であつた。稀には大納言で兼ねた事もある。○公明卿　藤原公明。正親町三條の庶流であつた人。○我朝の云々　これが謎の言葉である。當世風にいひかへれば、「日本の物とも見えぬ忠守とかけて何と解く」といふ意。歸化の家柄であるのと、その容態が妙に唐風にすまし込んでゐるのとから、即座にこんな事をいうたものであらう。○唐瓶子　或一人の人の解いた詞である。「から」は支那の古稱で舶來の品にいうた言葉。「我朝のものとも見えぬ」を「唐」と解き、「忠守」を平忠盛（淸盛の父）に通はして「瓶子（平氏）」と解いたのである。○まかり出でにけり　退出した。

第百四段

【注意】この段は中等教科として不適切と認め、全文を削除する事とした。

第百五段

【注意】この段も中等教科として不適切と認め、全文を削除する事とした。

第百六段

高野の證空上人、京へのぼりけるに、細道にて、馬に乘りたる女の行きあひたりけるが、口引きける男、あしく引きて、聖の馬を堀へ落してけり。聖いと腹あしく咎めて、「こは希有の狼藉かな。四部の弟子はよな、比丘よりは比丘尼はおとり、比丘尼より優婆塞はおとり、優婆塞よ

り優婆夷はおとれり。かくのごとくの優婆夷などの身にて、比丘を堀に蹴入れさする、未曾有の惡行なり」といはれければ、口引の男、「いかに仰せらるゝやらむ、えこそ聞き知らね」といふに、上人なほいきまきて、「何といふぞ。非修非學の男」と、あらゝかに言ひて、きはまりなき放言しつゝと思ひける氣色にて、馬引きかへして逃げられにけり。たふとかりけるいさかひなるべし。

【通解】高野の證空上人が、京へ上つた時、細道で、馬に乘つた女が行き逢つた所、其の馬の口取の男が、手綱を引きそこなつて、上人の馬を堀へ落して了つた。上人はかん〳〵になつてそれを咎めて、「これは無類の無禮ぢや。四部の佛弟子はな、比丘よりは比丘尼は劣り、比丘尼より優婆塞は劣り、優婆塞より又優婆夷は劣つてゐる。そのやうに最下の優婆夷などの身で、比丘たる者を堀に蹴込ませるといふのは、實に前代未聞の大惡行だ」といはれた所が、其の口取の男が、「何と仰せある事やら、とんと分りませぬ」といふので、上人はなほ一層息まいて、「何といふこの非修非學のやつめ」とあら〳〵しく言つて、これはどうもひどい惡口をしたと思つた顏附で、馬を引返して逃げてしまはれた。誠に尊い口論といふものであらう。

【文旨】證空上人といふ僧の逸話を錄したもので、その怒つていふ言葉が、如何にも坊さんらしくて面白い。相手に分らぬやうな事をぽん〳〵と言うておいて、ひとりで後悔して逃げ出す、その直情で而も反省的な、世間ばなれのした所に共鳴して「たふとかりけるいさかひ」というたものだらう。

【語義】○高野の證空上人　高野山にゐた證空上人といふ僧。傳未詳。○女の行きあひたりけるが　女が向ふからやつて來て上人に出逢つた所が。○口引ける男　口取の男。女の乘つた馬の口を取つてゐる男である。○あしく引きて　引きそこなつて。どうかしたはづみで手綱を引張りそこなつたので、その馬が上人の馬にぶつかるやうになつて、上人の馬が堀へ落ちたのである。○聖　聖人、卽ち證空上人。○腹あしく　かん〳〵になつて、むかつぱらを立てて。○希有　めつたにない、無類の。○狼藉　無禮、亂暴。理不盡に他を犯す意にいふ語。○四部の弟子　佛弟子の四種。卽ち比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷で、それを「四衆」ともいふ。○よな　「なア」「ねい」といふやうに念を推していふ詞。○比丘　男の僧。○比丘尼　女の僧、尼。○優婆塞　在俗のまゝで佛門に歸依する男。○優婆夷　在俗のまゝで佛門に歸依する女。次の「優婆夷などの身」はその馬上の女を指していひ、「比丘」は自らを指していうたのだ。○さする　させるのは。○未曾有　未だ曾てない、前代未聞の、非常な。○やらむ　「やら」といふ口語に當る。○えこそ聞き知らね　一向分りません。「聞き知らず」は聞いても分らぬの意。「こそ」の結びとして「ず」が「ね」になつた譯。○なほ　なほ一層。○いきまきて　はやり立つて。怒つて息づかひのあらくなるのをいふ。○非修非學　道も修めず學問もせぬ。無學文盲で佛道も修めぬの意。○あらゝかに　あら〳〵しく。○きはまりなき　非常な、極端な。○放言　雜言、惡口。○氣色　顏附、おももち。○逃げられにけり　逃げて了はれた。これはとんだ事をしたと思つて逃げ出したといふのである。○たふとかりける　「尊き」といふ所を、過去描寫の趣にした表現。

第百七段

【注意】この段は中等教科として不適切と認め、全文を削除する事とした。

第百八段

寸陰惜む人なし。これよく知れるか、愚かなるか。愚かにして怠る人のためにいはば、一錢輕し

といへども、これを重ぬれば、貧しき人を富める人となす。されば商人の一錢を惜む心切なり。刹那おぼえずといへども、これを運びてやまざれば、命を終ふる期、忽ちにいたる。されば道人は、遠く日月を惜むべからず、只今の一念、空しく過ぐることを惜むべし。

【通解】世に僅かの光陰を惜む人はない。これはよく其の理が分つてゐる爲めだらうか、それとも愚かなるが爲めだらうか。分つてゐる人に對しては何もいふ事はない、愚かなるが故に怠つてゐる人の爲めにいうて見れば、例へば一錢はごく輕微なものだが、それを積み重ねると、貧乏人も金持になる。だから商人の僅か一錢を惜む心は非常なものだ。それと同じ事で、只の一瞬間の經過は殆ど氣のつかぬ程短かいものだが、而もそれを段々と重ねて止まずに送つて行けば、命を終へる時が、忽ちにやつて來る。だから眞の道に志す人は、長い先々の月日を惜むやうな事をしないで、常に今といふ其の瞬間の、空しく過ぎる事を惜まなければならない。

【文旨】只今の一念を惜めといふ事を高調してゐる。そして全文悉く「愚かなる人」——寸陰の惜むべき事に氣がつかないで、徒らに世事に離離して、人生の第一義——兼好の考へ方から見た——に徹しないでゐる滔々者流を對象として懇々と說いてゐるのである。

【語義】○寸陰　ごく僅かの時間。○知れるか　知つてゐて惜まないのか。時間といふものから超越するといふその理がよく分つてゐて惜まないのかの意。○切なり　はげしい、強い。○刹那おぼえずといへども　一瞬間の過ぎて行く事は意識しない程短いものだが。「刹那」は極めて短い時間。○運びて　段々と送つて行つて、○命を終ふる期　死に當面する時、いよ〳〵死ぬべきその時期。○道人　道に志す人。特に佛道に志す人をいふ言葉。○遠く云々　只々長い將來の事ばかり考へて、年月といふ大束の時間にしてそれを惜むやうな事ではだめだといふのである。○只今の一念　今といふ一刹那。

もし人來りて、わが命明日は必ず失はるべしと告げ知らせたらむに、今日の暮るゝ間、何事をか賴み、何事をか營まむ。我等が生ける今日の日、何ぞその時節に異ならむ。一日の中に、飲食、便利、睡眠、言語、行歩、止むことを得ずして、多くの時を失ふ。そのあまりの暇、いくばくならぬうちに、無益の事をなし、無益のことをいひ、無益のことを思惟して、時を移すのみならず、日を消し、月をわたりて、一生をおくる、尤も愚かなり。

【通解】若し誰かが來て、わが命が明日は必ずなくなるだらうと告げ知らせたとしたら、今日一日の暮れる間、何事に望みを掛け、何事をせつせとやつて居られよう。必ず何の希望もなく、何一つしようとしないに違ひない。吾々は今日あつて明日の知れぬ身だ。吾々が生きてゐる今日といふ日は、何等さうした時節と異なる所はないのである。さうした重大な一日の中に、飲食をする、便所へ行く、眠る、話す、歩く、止むを得ないでさうして多くの時間をなくなす、その餘りの暇のいくらもないなかに、役にも立たぬ事をし、役にも立たぬ事を言ひ、役にも立たぬ事を考へて、時間を移すばかりでなく、それを重ねて一日を空費し、更に幾月と重ねて、遂に空しく一生涯を送つて了ふ、それは實に愚の骨頂である。

【文旨】前節を受けて、知らずして寸陰を惜まぬ滔々者流の愚を詳悉したのである。

【語義】○わが命　自分の命。言はれるものを自分として、その方の立場からいうた詞で、言ふ人の直說敍法にすれば汝の命である。○その時節　明日は死ぬといはれて、それを待つてゐる場合。○便利　大小便をいふ。○思

惟。考へ思ふ。シユヰとも訓ずる。○消し。けし、空費し。○わたりて。経て、過して。

謝靈運は法華の筆受なりしかども、心常に風雲のおもひを觀ぜしかば、惠遠、白蓮の交をゆるさざりき。しばらくもこれなき時は死人におなじ。光陰何のために惜むとならば、内に思慮なく、外に世事なくして、止まむ人はやみ、修せむ人は修せよとなり。

【通解】謝靈運は法華經の飜譯を筆錄した程の人であつたが、而も心中常に世の風雲に乘じて榮達したいといふ考を抱いてゐたので、惠遠は白蓮社の交りを許さなかつた。――卽ち榮達を望むが如きも亦無益の事なのである。されば暫くでも光陰を惜むといふ念のない時は死人も同じ事だ。然らば光陰は何の爲めに惜むかといへば、それは心中に何の思慮なく、外に紛々たる世事がなくて、そこに眞に清淨な時を得て、もうそれでよいとして止める人は止め、進んで佛道を修めようとする人は修めるやうにせよといふわけである。

【文旨】便宜これを第三節として取扱つたが、詳細にいへば、謝靈運の話は、前節を受けてどんな立派な人にも尙ほ道以外の雜念がある、それでは眞の道を修せられぬといふ意を示し、「しばらくも」云々からは、全文の結論として、何の爲めに寸陰を惜むかといふその主意を明かにしたのであつて、この結論が遙かに文首の「寸陰惜む人なし」云々に呼應してゐるのである。

【語義】○謝靈運　支那六朝時代の第一流の詞人で、康樂公を襲封し、食邑二千戸を持してゐた、それで謝康樂ともいふ。もと晉の人で、宋の劉裕が晉の代をうばつた後、そのまゝ宋に官して宋の元嘉年中永嘉の太守となつたが、後に晉の社稷を恢復するを名として亂を爲し、元嘉十年に年四十九で刑死した。○法華の筆受　法華經飜譯の筆錄者。「筆受」は譯場に於て譯主の言を受けて漢文に筆する役。つまり飜譯官である。○風雲のおもひ　世の風雲に乘ぜんとする考。「風雲」は「風雲之會」などいうて、英雄が時機に投じて志を達するのをいふ語。○觀ぜしかば。心に思つてゐたから。○惠遠　晉の人、廬山の虎溪東林寺に住してゐた僧。○白蓮の交　惠遠がその院の池に多く白蓮を植ゑて、賢士を招いて佛教信者の會を催し、それを白蓮社というた。○しばらくも　ほんの少しの間でも。○これなき時は　光陰を惜む心の無い時は。○内に云々　内心には無益の思惟なく、外身には無益の世事がなくて。卽ち、つまらぬ事を考へず、つまらぬ事をしないでといふので、それが上の「無益の事を爲し、無益の事をいひ、無益の事を思惟して」といふ句に應じてゐるのである。○止まむ人　清淨な時間を得た事自體に滿足してそのまゝ止めるなら止めるでよしの意。更にいへば萬事空と達觀して何もせず靜かにしてゐるならゐるがよしといふ思想。○修せむ人　佛道を修めむとする人。

第百九段

高名の木のぼりといひし男、人をおきてて、高き木にのぼせて、梢をきらせしに、いと危く見えしほどは、いふこともなくて、おるゝ時に、軒たけばかりになりて、「あやまちすな。心しておりよ」と言葉をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛び下るゝともおりなむ。如何にかくいふぞ」と申し侍りしかば、「その事に候ふ。目くるめき、枝危きほどは、おのれがおそれ侍れば申さず。あやまちは安き所になりて、必ず仕ることに候ふ」といふ。あやしき下臈なれども、聖人のいましめにかなへり。鞠もかたき所を蹴出して後、やすくおもへば、必ずおつと侍るやらむ。

【通解】名代の木のぼりといはれた男が、人を指圖して、高い木にのぼらせて、枝を伐らせた所が、ひどくあぶなさうに見えてゐた内は、何ともいはないでゐて、おりて來る時、軒の高さ程になつてから、「そそうするな、氣をつけておりよ」と言葉を掛けたのを見て、自分は、「もうこの位になつたからには、飛び下りたつておりられよう。どうしてそんなにいふのだ」と申しましたら、「さあそこですて。高い所で目がまはり、枝がしなつてあぶない内は、自分自身におそれて用心して居りますから、こちらからは何とも申しません。兎角過ちはもう何でもないといふ所になつてから、必ずしでかすもので御座います」というた。賤しい下衆ではあるが、その言ふ所が聖人の戒に合つてゐる。蹴鞠もやはり同樣で、むづかしい所をうまく蹴出して後に、もう大丈夫だと思つて安心すると、きつと蹴はづすといふ事がたしかその道の教にあつたやうです。

【文旨】過ちは安き所になつて必ずやる事だ、といふのが文の眼目で、それを木のぼりの口を通して語らせたのである。そしてそれを證據立てるべき他の一例として蹴鞠の事を一寸點出してゐる。この木のぼりの話自體は恐らく假設のもので、大して面白味はないが、その教訓の中には大いに吾々の學ぶべきものがある。

【語義】○高名の木のぼり　木のぼりの名人として有名な者。○いひし男　いふ男。嚴密にいへば世間でさういうた男の意で、つまり「……といはれた男」である。○おきでて　指圖して。○のぼせて　あげて、のぼらせて。○いと危く見えしほどは　ひどくあぶなく見えた間は。高い木の枝の上にのぼつてゐて、今にも落ちさうに、如何にもあぶなッかしく見えてゐた内はの意。○軒たけばかり　軒の高さくらゐ。○心して　氣をつけて。○かばかりになりては　これ位になつたからには。こゝの「ては」は「たからは」「た以上は」の趣。これ以下の詞はこの文の筆者自身（兼好）がいうたものと考へられる。○飛び下るゝともおりなむ　飛びおりてもおりられよう。「下るゝとも」は文法上嚴正にいへば「下るとも」とあるべき所。「なむ」は文法的にいへば現在完了の助動詞であるが、こゝでは可能の趣である。○如何に　どうして、なぜ。○その事に候ふ　いやそこですよ、さアそこですよ、さればこそいますといふ趣の應答語。○目くるめき　目がくるくるとまはり。高い所に上つてゐる爲めに恐しくて目がまはるやうだとの意。○枝危きほどは　枝のあぶない間は。枝も細く、しなえて、何だか今にも折れさうであぶない内はの意。○おのれが　その當事者自身が。○安き所　たやすい所、何でもないと思ふやうな所。○仕る　やる、するの敬語。○あやしき下臈　賤しく身分の低い者。○聖人のいましめにかなへり　其の言ふ事が聖人の教訓に叶つてゐる。易經繫辭下傳に『君子安而不忘危。存而不忘亡。治而不忘亂。是以身安而國家可保也』○鞠　こゝは蹴鞠。革で作つた鞠を、靴で蹴上げ、それを承けて、地に落さないやうにする遊技。○難き所を蹴出して後　落ちさうで、蹴るに困難な所をうまく蹴てから後。○やすく思へば　もう大丈夫だと安心すると。○侍るやらむ　あるやうです。鞠の道にもさういふ傳へがあるやうだといふ意。

第百十段

雙六の上手といひし人に、そのてだてを問ひ侍りしかば、「勝たむとうつべからず、負けじとうつべきなり。いづれの手かとく負けぬべきと案じて、その手をつかはずして、一目なりとも遲くまくべき手につくべし」といふ。道を知れるをしへ、身を修め、國を保たむ道も、またしかなり。

【通解】雙六の上手といはれた人に、その勝つてだてを尋ねましたら、「勝たうとして打つてはならぬ、負けまいとして打つべきである。どの手が早く負けるだらうかと考へて、その手を使はないで、一目なりとも遲く負けるべき手を使ふがよい」といふ。如何にもそれは道を悟つてゐる者の教へといふべきであつて、身を修め、國家を保つ道とても、やはりその通りである。

【文旨】勝たうとして打たずに、負けまいと思つて打つ、それは甚だ消極的なやうだが、そこに吾々の學ぶべき眞理がある。勝たう〳〵と盲進するものは、屢々自分の手許の見えないが爲めに失敗する。世の中は萬事皆それである。勝たうとあせらずに、負けまいと用心する。常に自分の手許を固めて掛る。人を見る前に前づ自己を見つめる。少くも自己をよく見知つた目で他人を見る。さういふ意味を雙六の上手の口を通して語らせたのである。

【語義】○てだて　手段。こゝでは勝つ手段の意。○問ひ侍りしかば　自分（筆者兼好）が問ひました所が。○案じて　考へて、思案して。○手につくべし　手につくがよい。さういふ手を使ふがよいの意。○道を知れる教　道を知つてゐる人の教。よく道に叶つた教の意。○身を修め國を保たむ道　儒教にいはゆる修身齊家治國平天下の道である。○しかなり　さうである、その通りである。

第百十一段

「圍碁、雙六このみて、あかし暮す人は、四重五逆にもまされる惡事とぞ思ふ」と、ある聖の申しゝこと、耳にとゞまりて、いみじくおぼえ侍る。

【通解】「圍碁や雙六を好んで、日を送る人は、四重五逆の罪にも過ぎた惡い事だと思ふ」と、或聖人の申した事が、耳に殘つて、誠に立派な教訓だと感じて居ります。

【文旨】道を忘れてさうした遊技に夢中になつて日を送る、それがいけないといふ事を、思ひきり高調したといふわけである。

【語義】○あかし暮す　夜を明し日を暮す。さうして日を送る意。○四重五逆　共に佛教でいふ語で、「四重」は殺生、偸盜、邪淫、妄語の四つの重い禁戒。「五逆」は、殺レ父、殺レ母、殺二阿羅漢一、破二和合僧一、出二佛身血一といふ五つの逆罪。○いみじく　えらいものと。そのいふ所がいかにも立派で敬服すべき事と思ふの意。

第百十二段

明日は遠國へ赴くべしと聞かむ人に、心しづかになすべからむわざをば、人いひかけてむや。俄の大事をもいとなみ、切になげくこともある人は、他の事を聞き入れず、人の愁喜をも問はず。問はずとて、などやと恨むる人もなし。されば、年もやう〳〵たけ、病にもまつはれ、況や世を遁れたらむ人、亦これに同じかるべし。

【通解】明日は遠い國へ旅立たうといふ人に對して、ぢつと落ついてしなければならぬやうな事を、誰がいひ掛ける者があらう。させまつた重大な事に心をこめてゐるとか、或はひどく歎く事のあるとかいふ人は、他の事は耳にも入れず、人の愁や喜をも見舞はない。見舞はないからといつて、なぜ見舞つてくれないかと恨む人もない。こんな譯だから、年も段々とたけた人、いつも病身勝ちな人、まして出家を遂げたやうな人は、やはり亦これと同じ事であらう。

【文旨】一段二節、次の節に於て道に對する深刻な憧憬――世の一切の俗事を放拋して道に進まんとする所以を高調して居る。この節はその前提として、俄かの大事を營む人、切に歎く事のある人を例に引いて、老者、病者、まして遁世者には世間づきあひの必要は無いといつてゐるのである。

【語義】○聞かむ人。いふ人。その人のいふのをこちらで聞くといふ意。○心しづかになすべからむわざ　ゆつ

くりと氣を落著けてしなければならぬやうな事。○いひかけてむや　他人が其の人に對していひ掛けようや、決していひ掛けはしまい。「掛けてむや」は反語で、「掛けむや」といふよりはやゝ強い。○俄の大事　何かの急な大事。病死葬送といふやうな突發的な重大事をいふのだらう。前文の「遠國へ赴くべし」といふのを承けたやうに解く說もあるが、それとは別に端を改めて說き起した文調と思ふ。○切に　はげしく、ひどく。○他の事　外の一切の事。○愁喜　板本文段抄にはシウキと振假名があるが、ウレヘヨロコビと訓讀した本に從ふ事とする。愁へ事喜び事、所謂祝儀不祝儀である。○問はず　尋ねず、見舞はず。○などや　なぜか。なぜあの人は見舞つて吳れぬかの意。○年もやう／＼たけ　段々と年も取り。この文脈は

年もやう／＼たけ
病にもまつはれ　｝たらむ人
況や世をも遁れ

と三つ對立した筋。即ち老人の上に病氣勝ちでその上に更に遁世した人の意ではなくて、老人・病者・まして遁世者は……といふのである。○まつはれ　まとはれる、とりつかれる。○これに同じかるべし　遠國へ旅立つ人、俄の大事を營む人、切に歎く事ある人と同じ事であらう。世間の交際は全然棄てて了つてよい筈だといふ意。

人間の儀式、いづれの事か去りがたからぬ。世俗の默しがたきに從ひて、これをかならずとせば、願も多く、身も苦しく、心の暇もなく、一生は雜事の小節にさへられて、空しく暮れなむ。日暮れ途遠し。吾が生既に蹉跎たり、諸緣を放下すべき時なり。信をも守らじ、禮儀をも思はじ。この心をも得ざらむ人は、ものぐるひともいへ、うつゝなし、情なしともおもへ。そしるとも苦しまじ、譽むとも聞きいれじ。

【通解】　世間のつきあひは、どれ一つとして避けにくゝないものはない。若し世間並の、默つて捨てておくわけには行かぬといふ習はしに從つて、どこまでもそのつきあひをきちようめんにやつて行くとなれば、自然あゝしたい斯うしたいといふ願望も多く、からだも苦しく、心も氣ぜはしなくて、自分の一生涯は雜事のつまらぬ義理合の爲めに妨げられ、空しく終つて了はう。日は暮れて前途は遠い。吾が生涯は既に晩年に及んで時を逸してとぼ／＼としてゐる。今こそ世の萬事を放棄すべき時である。信をも守るまい、禮儀をも思ふまい。この意味の分らないやうな人は、氣狂だともいへ、正氣の沙汰でないとも、無情だとも何とでも思へ。人が謗つても苦にすまい、譽めても耳に入れまい。世間の毀譽褒貶などはどうでもよい。

【文旨】　世俗の事は捨て難いといへば皆捨て難い事ばかり、それを一々實行してゐては所詮道は修められぬ、吾が身は既に老境に入つて、而も道の修養はまだ／＼前途遼遠である。今こそ萬事を放棄せねばならぬ時だ。信もない、禮儀もない、只道あるのみ。この意味の分らぬ人は、氣狂とでも何とでも勝手にいへ。世の毀譽褒貶などはどうでも構はぬ、といふて、道に對する憧憬を極度に高調したのである。

【語義】　○人間の儀式　世間の交際。「人間」は人の世の中、世間。「儀式」は前段の關係から推して、冠婚葬祭等の交際をいうたものと見てよからう。○いづれの事かさりがたからぬ　との事が避けにくゝなからう。即ち何も彼も皆避け難いものだの意。○世俗の默しがたきに從ひて　世間並みの默つてはゐられぬといふに習つて。「人間の儀式」は皆避け難いものだから、「世俗」では、これも「默し難し」あれも「默し難し」とする。さういふ「世俗の」習はしに從つて、といふ文意。○これをかならずとせば　それを必ず遂行するとすれば、「これ」は「人間の儀式」を指す。○願も多く　あゝしたい、斯うしたいといふ願望も多く生じ。○心の暇もなく　心の中は常に何や彼やと

氣ぜはしなくてゆつたりと落つく暇がなく。○雜事の小節　つまらぬ事の小さい義理合ひ。「雜事」は樣々のつまらぬ事。「小節」は小さな節義。○さへられて　さゝへられて、妨げられて。○日暮れて途遠し　年既に老いて前途に期する所はなほ遼遠だといふ意の譬喩。史記伍子胥傳に『吾日暮途遠、故倒行而逆二施之一』とある。それ等を思ひよせての立文だらう。○吾が生既に蹉跎たり　「蹉跎」はつまづく意、又時機を失つた意。年既に老いて、而も道は修まらぬと歎いたのである。晉書、周處傳に『欲二自修一而年已蹉跎』とあるのに似た趣と考へられる。○諸緣　もろもろの緣、凡ての世間的關係、世の萬事。○放下すべき　なげすてるべき。○信をも守らじ　「信」は言葉をその通り實行すること、約束を實行すること、信を守らぬといふ事は、常識的には悪い事と思へるが、こゝは道に專念で、世間の小節――否萬事を放下するといふ態度から斯ういうたのである。○この心をも得ざらむ人　この意味の分らぬ人。○ものぐるひ　氣狂、狂人。○うつゝなし　本心がない、正氣の沙汰でない。○苦まじ　苦むまい、何とも思ふまい。

第百十三段

おほかた、聞きにくゝ、見ぐるしき事、老人の若き人にまじはりて、興あらむと物いひたる、數ならぬ身にて、世のおぼえある人を隔なきさまにいひたる、貧しき所に酒宴このみ、客人に饗應せむときらめきたる。

【通解】大體、聞きにくゝ、見ぐるしい事は、年寄が若い者の中にまじつて、興がらせようとして物を言うてゐること、つまらぬ賤しい身で、世の名望の高い人をごく親しい仲のやうに言うてゐること、貧乏な家で酒盛を好み、お客に御馳走しようとして華美なもてなし振りをしてゐる事である。

【文旨】枕草子風の筆致で「聞きにくゝ見ぐるしき事」を擧げてゐる。その何れもが勿論筆者の好尚であるが、かなり深刻に世人の痛い所を突いて、大いに考へさせられるものがある。

【語義】○おほかた　大體。○聞きにくゝ見ぐるしき事　聞きにくゝ見苦しい事は。これが下文の「老人の……、數ならぬ……、貧しき所……」の三つの總主語になつてゐるのである。○興あらむと　興あらしめむとの意。わざわざ興を添へようとして、即ち一座の人々を面白がらせようとしてである。○數ならぬ身　つまらぬ身、賤しい身。○世のおぼえある人　世間の評判の高い人、當時歴々の人。○隔なきさまに　ごく親しいやうに、親密な間柄であるやうに。○貧しき所　貧しい家。○きらめきたる　きら〳〵と輝くやうにしてゐるといふ思想で、こゝはでやかに華美なもてなし振りを見せてゐるのをいふ。

【注意】この段の前半の文は中等教科として不適切と認め削除する事とした。

第百十四段

今出川のおほい殿、嵯峨へおはしけるに、有栖川のわたりに、水の流れたる所にて、さい王丸御牛を追ひたりければ、あがきの水、前板までさゝとかゝりけるを、爲則、御車のしりに候ひけるが、「希有の童かな。かゝる所にて御牛をば追ふものか」といひたりければ、おほい殿、御氣色あしくなりて、「おのれ車やらむこと、さい王丸に勝りてえ知らじ。希有の男なり」とて、御車に頭をうちあてられにけり。この高名のさい王丸は、太秦殿の男、料の御牛飼ぞかし。この太秦殿

に侍りける女房の名ども、一人はひささち、一人はことづち、一人ははうばら、一人はおとうしとつけられけり。

【通解】今出川の大公が、嵯峨へおいでになつた時に、有栖川の邊の、水の流れてゐる所で、牛飼のさい王丸が御車の牛を走らせた所が、牛の足搔の水が、車の前板までさつと掛つた。それを見て、爲則は、御車の後の方に侍乘してゐたが、「けしからん牛飼めだ。こんな所で御牛を追ふといふ事があるものか」というた所が、大公殿は、御機嫌を損じて、「貴樣が何も車の御し方をさい王丸以上に心得て居るわけでもあるまい。貴樣こそけしからぬ男だ」というて、爲則の頭をこつんと御車に打當てられた。この評判のさい王丸は、太秦殿の召使で、御料の牛飼であるのだ。この太秦殿にをつた侍女達の名も、一人は膝幸、一人は脊槌、一人は胞腹、一人は乙牛とつけられたのであつた。

【文旨】今出川の大公殿が、牛飼の仕方を難じた家來爲則を叱つたといふ事、その牛飼は太秦殿のお抱への者であるといふ事、その太秦殿は牛好きで、侍女の名まで牛に因んで附けたといふ事、そんな事を一寸面白く感じて聞くがまゝは筆錄したといふだけだらう。

【語義】○今出川のおほい殿　一般に菊亭兼季の事と考へられてゐるが、橘氏に從へばたしかに西園寺公相で、その邸が父實氏以來今出川にあつたからの稱呼といふ。○有栖川　京都の西郊、船岡の東、齋院の前を流れてゐた細流。○わたりに　あたりに於ける、即ちあたりのの意。○さい王丸　賽王丸、後嵯峨から後深草の御代頃の有名な牛飼。○追ひたりければ　走らせた所が。「追ふ」は走らせる意。○あがきの水　「あがき」は前足で地を搔くこと。こゝは、水の流れてゐる所で追はれたので、其の拍子に足で水を搔いて、それがサット散つたといふのである。

○さゝと　さッと。水のかゝる音。○爲則　お供の者の名。どんな人か分らぬ。○車のしり　車の後方。副乘として車のうしろの席に乘つてゐたのである。○希有の童かな　けしからぬ牛飼だ。「希有」はけしからぬ、とんでもないの意でいうた詞。牛飼は年を取つても丸額で髮を長くして童のやうにしてゐたので、年齡に拘はらず一般に「童」と呼んだのである。○追ふものか　追ふといふ事があるか。「か」は咏嘆の「かな」と同意の語。こゝは叱責する口吻。○御氣色あしくなりて　御顏の色が變つて。怒つて顏色を變へた、即ち御機嫌を損じたといふ意。○おのれ汝。卑めていふ第二人稱。○車やらむこと　車を御する事、車を操縱する事。○さい王丸に勝りてえ知らじ　さい王丸より以上によう知るまい。即ちさい王丸の方が汝より遙かにえらい、貴樣がさい王丸以上に心得てゐる筈はない、それに小言をいふとは何事だとの意。○希有の男　爲則がさい王丸の事を「希有の童かな」というた其の言葉をそのまゝ繰返して、「貴樣こそ希有の男だ」と言はれたのである。○頭をうちあてられにけり　爲則の頭をおさへて、車のどこかへコツンとぶつつけられた。○高名の　有名な。今出川の大公がこれ程に言はれたその有名なという心持。○太秦殿　內大臣藤原信淸。坊門內大臣ともいうて、建保四年五十八で歿した人。公相や賽王丸は後嵯峨の時代、信淸の歿したのはそれより約三十年前で、やゝ時代が違ひ過ぎるやうだが、太秦殿は牛の道に堪能の大家で、賽王丸は幼にしてその召使となつて牛を御する事を學び、後出でて宮廷御料の牛飼となつたと考へれば、ほゞこゝの文意に合ふであらう。○男　召使の男。○料の御牛飼　宮廷御料の牛飼。○女房　侍女。もと宮中の女官にいふ語で、それから轉じて貴人の家の侍女にもいふ。○名ども　「名ども」「もも」と見てよからう。○ひささち云々　以下三語、古註に、凡て牛に關する語として通解に出したやうな字を當て、色々說明してゐるが、はつきりしない、要するに牛に關聯した珍妙な名を女房に付けたといふ位に見ておいてよからう。

第百十五段

宿河原といふ所にて、ぼろ〳〵おほく集りて、九品の念佛を申しけるに、外より入りくるぼろぼろの、「もしこの御中に、いろをし坊と申すぼろやおはしまし」と尋ねければ、その中より、「いろをしこゝに候ふ。かくのたまふは誰そ」と答ふれば、「しら梵字と申す者なり。おのれが師なにがしと申しゝ人、東國にていろをしと申すぼろに殺されけりと承りしかば、その人に逢ひ奉りて、うらみ申さばやと思ひて尋ね申すなり」といふ。いろをし、「ゆゝしくも尋ねおはしたり。さることと侍りき。こゝにて對面し奉らば、道場を穢し侍るべし。前の河原へまゐりあはむ。あなかしこ、わきざしたち、いづ方をもみつぎ給ふな。數多のわづらひにならば、佛事のさまたげに侍るべし」といひ定めて、二人河原へ出であひて、心ゆくばかりに貫きあひて、共に死ににけり。

【通解】 宿河原といふ所で、虚無僧が大勢集つて、九品の念佛を申して居つた所が、そこへ外から這入つて來た虚無僧が、「若し此の中に、いろをし坊と申す虚無僧がおいでになりませうか」と尋ねた所が、その中から「いろをしはこゝに居ります。さう仰せあるはどなたですか」と答へると、「しら梵字と申す者で御座る。自分の師匠なにがしと申した人が、東國でいろをしといふ虚無僧に殺されたと承つたので、その人にお逢ひ申して、お恨み申したいと思つて、お尋ね申すのでござる」といふ。いろをしは、「それはけなげにも尋ねておいで下された。そんな事がありました。然しこゝでお立合ひ申しては、神聖な道場を汚す事になりませう。前の河原へ御出あひ申さう。どうぞ決して、傍輩衆、どちらをも御助勢下さるな。大勢の迷惑となつては、佛事の邪魔と相成るで御座りませう」と堅く言葉をつがへて、二人は河原へ出あつて、思ふ存分さしちがへて、共に死んで了つた。

【文旨】 虚無僧に關する異聞を錄したのである。この話がよほど筆者の劇的興味を引いたものと見えて、如何にも委曲を悉して寫實的に面白く書いてゐる。この二人の掛合から、「心ゆくまで貫きあひて」共に死ぬといふ迄、宛然たる一篇の俠客傳である。

【語義】 ○宿河原　京都附近の地名だらう。多摩川べりの稲田村の大字に今もこの地名が殘つてゐるとの說がある、それとすると「東國にて」師匠が討たれたといふ文句に合ふやうだが、この種の人々は諸國を轉々するのが常だから、それは傍證とはなるまい。○ぼろ〳〵　單に「ぼろ」ともいうて、暮露とも梵論とも書く。虚無僧の舊稱。○九品の念佛　東方書院編の佛教辭典には、(一)念佛修行の勝劣を日課の多少について九種に分つたもの、(二)念佛の調子を換へて九通りに稱ふること、以上二種の解を示してゐる。或は第九品卽ち下品下生を願ふ念佛の義かともいふ。○おのれが　自分の、拙者の。○うらみ申さばや　おうらみ申したい。所謂「一太刀恨む」などいふのと同じ趣で、「うらみ」は動詞の連用形であらう。つまりの意味は恨を晴したいといふこと。○ゆゝしくも　けなげにも。師匠の仇を討つといふその態度のけなげさを譽めた詞。○道場　修道の場、佛事を營む場所。○まゐりあはむ　出あひませう。二人で河原へ行つて、そこで勝負を決しよう。○あなかしこ　決して。左右に對して制止する詞。○わきざしたち　傍輩衆の意、皆さん、諸君といふに當る語。○いづ方をも　どちらをも。○みつぎ給ふな　助け給ふな。○數多のわづらひにならば　大勢の人に迷惑が掛つては。助太刀をして其の爲めに多數の死傷者などを出してはといふ心持だらう。○いひ定めて　しつかりと話をつけて、堅く約束して。○心ゆくばかりに　心に滿足する程に、思ふ存分に。○死ににけり　ナ變の動詞に完了「ぬ」の連用形の附いた破格の例。

ぼろ〳〵といふもの、昔はなかりけるにや。近き世に、ぼろんじ、梵字、漢字などいひける者、そのはじめなりけるとかや。世を捨てたるに似て我執ふかく、佛道を願ふに似て鬪諍を事とす。

放逸無慚のありさまなれども、死を輕くして少しもなづまざる方のいさぎよく覺えて、人の語りしまゝに書きつけ侍るなり。

【通解】　この虛無僧といふ者は、昔はなかつたのだらうか。近世になつて、ぼろんじ、梵字、漢字などといふ者が、その始めであつたとかいふ事だ。世を捨てたやうで、而も我執の念が深く、佛道を願ふやうで、而も何かといふとすぐ喧嘩刄傷をやる。實に放逸で恥を恥ともしない有樣ではあるが、死を輕んじて少しもなづまず、未練がましい所のない點が潔よく思はれて、或人の話したまゝに書きつけた次第であります。

【文旨】　ぼろ〳〵の起源を一寸書いて、さてそのぼろ〳〵は、坊主らしい眞似はしてゐるが、其の實放逸無慚で困つた代物だ、只その死に對してなづむ所のない點が、潔よく思はれたので、人の話のまゝに筆錄する、と結んでゐる。筆者の劇的興味の中心は、慥かにその「死を輕くして少しもなづまざる方」にあつたのである。

【語義】　○我執ふかく　自我に執する念が深い。○鬪諍を事とす　喧嘩ばかりしてゐる。○放逸無慚　「放逸」は我儘勝手で、ほしいまゝな事。「無慚」は佛語で、惡事をなして自ら心に恥づるなきをいふ。○なづまざる方　なづまぬ方面。「なづむ」はかゝはる、拘泥するの意。死といふ事に拘泥せず、何の未練もなく、平氣で命を棄てるといふ其の點。○いさぎよく覺えて　きび〳〵として卑怯未練でないと思はれて。

第百十六段

寺院の號、さらぬよろづの物にも、名をつくること、昔の人はすこしも求めず、たゞありのまゝに安くつけけるなり。この頃は、深く案じ、才覺をあらはさむとしたるやうに聞ゆる、いとむつかし。人の名も、めなれぬ文字をつかむとする、益なき事なり。何事もめづらしき事をもとめ、異說を好むは、淺才の人の必ずあることなりとぞ。

【通解】　寺の名、又其の外の凡ての物に、名をつけるのに、昔の人は少しも凝らないで、たゞありのまゝにすらつとつけたものである。然るにこの頃では、深く考へて、いかにも自分の才氣を顯はさうとしたやうに聞えるのが多いが、それは實に煩しくいやみだ。人の名前も、見慣れない字をつけようとするのは、つまらない事である。何事も珍しい事を求めたり、普通と異つた說を好んだりするのは、才學の淺い人の必ずやる事だといふ。

【文旨】　寺の名、其の他何物に名をつけるにも、昔の人はありのまゝに平易につけた、然るに當世の人はいやに小むづかしい穿鑿をやる、それが煩しいというて、例の筆者のさらりとした自然のまゝの安らかさを好む趣味から批判を下したのである。「すなほ」といふ事は學問上からも頗る重要な心構へで、そこに吾々の反省すべき尊い教訓が見出されるのである。

【語義】　○さらぬ　さうでない、その外の。○よろづの物　凡ての物、何でも彼でも。○求めず　强ひて穿鑿せず、やかましく凝らないで。○やすく　安らかに、平易に。○案じ　考へ、工夫し。○才覺　才の働き。○むつかし。　わづらはしくいやみだ。○つかむとする　「つけむとする」と同意。上二段の他動詞。○異說　普通に行はれるのと異なつた珍しい說の意。○淺才の人　學才の淺い人。○あること　すること、やること。○とぞ　といふ。人の詞を寫したやうにした書方。

友とするにわろきもの七つあり。一に高くやんごとなき人、二には若き人、三には病なく身つよき人、四には酒をこのむ人、五には武く勇める人、六にはそらごとする人、七には欲ふかき人。善き友三つあり。一にはものくるゝ友、二にはくすし、三には智惠ある友。

【通解】友とするによくないものが七つある。一には身分の高く貴い人、二には若い人、三には病氣がなくてからだの頑強な人、四には酒のすきな人、五には武々しくて心の勇んでゐる人、六にはうそをいふ人、七には慾のふかい人。いゝ友が三つある。一には物をくれる人、二には醫者、三には智惠のある友。

【文旨】論語の季子篇に『益者三友、損者三友、友レ直、友レ諒、友レ多聞、益矣、友レ便辟、友レ善柔、友レ便佞、損矣』とある。それから思ひついたのだらう。さすがの兼好も餘程病氣の事は氣にしたものと見えて、損友に無病強健の人を擧げ、益友に醫者を擧げてゐるのが一寸變つてゐて面白い。「ものくるゝ友」といふのは、言葉からして一寸冗談らしく聞える。「欲ふかき人」を惡友といふなら、「物くるゝ友」を善友とする所のこちらが、その人に對しては却て惡友となる譯だなどといふ議論もあるが、そんな小むづかしい穿鑿は無用の沙汰である。要するに、何れも開き直つた一般的教訓といふよりも、作者自身の立場から思ひつくまゝに列擧して見たといふ程度のものに過ぎない。

【語義】○高くやんごとなき人　位高く身分貴き人。身分が違ふと何かに氣が引ける、しつくりした心のつき合がなり兼ねるからだらう。○若き人　これも年の相違からいふのだらう。○病なく身つよき人　思ひやりがなく、心のやさしみがないからだらう。○武く勇める人　これも心がすさんでゐて、しんみりとした所のないのがいけないといふのだらう。○そらごとする人　うそをつく人。うそつきが友として惡い事は更めていふ迄もない。○くすし　醫師。

第百十八段

鯉のあつもの食ひたる日は、鬢そゝけずとなむ。膠につくるものなれば、ねばりたるものにこそ。鯉ばかりこそ、御前にても切らるゝものなれば、やんごとなき魚なり。鳥には雉、さうなきものなり。雉、松茸などは、御湯殿の上にかゝりたるも苦しからず。その外は心憂きことなり。中宮の御方の御湯殿の上のくろみ棚に、雁の見えつるを、北山入道殿の御覽じて、歸らせたまひて、やがて御文にて、「かやうのもの、さながらその姿にて、御棚にゐて候ひしこと、見ならはず、さま惡しきことなり。はかばかしき人のさぶらはぬにこそ」など申されたりけり。

【通解】鯉の吸物を食つた日は、鬢の毛がぼさ〳〵にばさつかないといふ事だ。鯉は膠にもつくるものなので、ねばり氣のあるものと見える。鯉ばかりは、天子の御前でも切られるものだから、誠に尊い魚である。鳥では雉が雙びないものである。雉や松茸などは、御湯殿の上にかゝつてゐても差支ない。それ以外の物のあるのは厭ふべき事だ。中宮の御所の御湯殿の上の御膳棚に、雁の見えたのを、北山の入道殿が御覽になつて、御歸りになつて、すぐと御手紙を以て、「斯樣のものが、そつくりその姿で、御棚の上にあつたのは、見なれず、如何にも不體裁で見つともない事であります。しつかりした人がおそばに居らぬから、ついこんな事になるのでありませう」など、御意見申されたのであつた。

【文旨】例の作者の故實趣味で、その一つの出來事として、中宮の御父北山入道殿が率直に注意された趣が一寸

面白く讀まれる。

【語義】○あつもの　吸ひ物。「鯉のあつもの」は所謂鯉こくである。○そゝけず　亂れない、ぼさ〳〵にならない。鬢の毛が油づいて、ぼさ〳〵に亂れ立つ事がないといふ意。○膠にもつくる　鯉の骨を膠にする事があつたのだらう。膠は黏著料で、獸皮獸骨魚骨等で製したもの。○ねばりたるものにこそ　ねばつてゐるものと見える、ねばり氣のあるものと見える。「こそ」の下に「あらめ」と補つて考へてよからう。○御前　天子の御前。○やんごとなき　尊い。○さうなき　雙なき、ならびなき。○御湯殿の上　禁中又は貴族の家にある一室で、湯を沸したり、食膳の具などおいたりするところ。○苦しからず　さしつかへない、構はない。○その外は　その外の物は。○心憂きことなり　厭ふべき事だ、よろしくない事だ。○中宮　後醍醐天皇の中宮禧子。○御方　御住所、御邸。○くろみ棚　黒棚の敬稱、厨子の類で食膳に關する物などを置く棚。○北山入道殿　中宮の御父、西園寺實兼。○やがてすぐと、歸るなりすぐそのまゝ。○さながらその姿　そつくりその姿。分らぬやうに料理してあるとか、又は何かに包んであるとかでなく、雁そのまゝの姿。○ゐて　居つて。置いてあるのを、それが居たといふやうに言うたのである。○見ならはず　そんなもののあるのは見つけない。○さま惡しき　ざまの惡い、見つともない。○はかばかしき人　ちやんとした人、物事に心得のあるしつかりした人。○こそ　下に「あらめ」と補ふ。

第百十九段

鎌倉の海に、かつをといふ魚は、かの境には雙なきものにて、この頃もてなすものなり。それも鎌倉の年寄の申し侍りしは、「この魚、おのれら若かりし世までは、はかばかしき人の前へ出づることと侍らざりき。頭は下部も食はず、切りて捨て侍りしものなり」と申しき。かやうの物も、世の末になれば、上ざままでも入りたつわざにこそ侍れ。

【通解】鎌倉の海でとれる、鰹といふ魚は、あの邊では此の上もないものとされてゐるもので、近頃人のもてはやすものである。それも鎌倉の或年寄の申した事には、「この魚は、私達の若かつた世までは、ちやんとした人の前へ出る事はありませんでした。頭は下衆の者も食はず、切つて捨てましたものです」というた。こんな物も、世の末になると、上流社會までも這入り込む事で御座いますなア。

【文旨】上流の家で鰹を食ふのを甚だ心外に感じたのだらう。「かやうの物も世の末になれば」などは隨分ひどい書振である。蓋し彼の貴族趣味の現はれである。鰹は昔から有名な魚で、萬葉にも『水の江の浦島の子が堅魚釣り鯛釣りほこり七日まで』云々といふ有名な歌がある。尤も「かつを」は堅魚で、ほし固めて鰹節にするからの稱であらう。從つて京都などでは鰹節の事を「かつを」といふ位だから、なまで食ふのは珍しかつたに違ひない。それに鰹の刺身などいふやつは、どちらかといへば野趣に富んだもので、どうしても上方情調ではない。要するにこんな下魚まで平氣で上流家庭に出入するやうになつたのは情ないといふのか、此の文の眼目であらう。

【語義】○鎌倉　相州鎌倉。○海に　「海に於ける」の意。海に産する、海でとれるで、更に端的にいへば、「海の」と置き換へられる格である。○かの境　彼の地。即ち鎌倉地方。○雙なきものにて　ならびなきもので、此の上もないもので。○もてなす　もてはやす、賞翫する。○年寄　老人。○はかばかしき人　ちやんとした人。こゝでは特に相當身分のある人の意。○世の末になれば　世の末になると、斯ういふ末世では。○上ざま　上の方、上流の人、上流社會。○入りたつわざ　入りこむ事。

唐のものは、藥の外は、なくとも事かくまじ。書どもは、この國に多くひろまりぬれば、書きも寫してむ。もろこし船の、たやすからぬ道に、無用のものどものみ取り積みて、所せく渡しもて來る、いと愚かなり。「遠きものを寶とせず」とも、また「得がたき寶をたふとまず」とも、書にも侍るとかや。

【通解】支那の物は、藥以外には無くとも不自由はあるまい。數多い書物などは、我が國に澤山廣まつて了つたから、書き寫しても事は足りよう。唐船が、難澁な航路に、無用のものばかり色々と積込んで、うんとこさと運んで持つて來るのは、實に愚の骨頂だ。「遠方のものを寶としない」とも、「得難い寶を尊ばない」とも、書物にも書いてありますとかいふ。

【文旨】事々しく珍重な舶來品を尊重するのはつまらぬといふ、例の筆者の趣味觀が主として働いた文であらう。「藥の外は」というたのは、前にもいうた通り、筆者自身病氣の事を常に氣にしてゐた結果、自然斯ういふ所にもその心持が出たのだらう。

【語義】○唐のもの　支那のもの。○事かくまじ　事は缺くまい、不自由な事はなからう。○書きも寫してむ　書き寫しても事は足りよう。「てむ」は未來完了の助動詞であるが、こゝは出來るとか間に合ふとか心持の用例。○もろこし船　唐船、支那の船。○たやすからぬ道に　容易ならぬ航路に。難澁でいつ難船するともしれぬ危險な航路にの意。○取り積みて　積込んで。「取り」は、語調上他の動詞と熟する接頭語の如き詞。○所せく　ぎつしりと、一杯に。あたり狹くといふ原義から、其の數のおびたゞしい意に使つたのである。○渡しもて來る　渡して來るのは、運んで持つて來るのは。海路だから「渡し」というたのである。「もて」は「讀みもて行く」などの「もて」で、輕く添はる語だが、こゝには「持つて」といふ氣分も働いてゐるやうだ。○遠きものを寶とせず　遠地に產する物を寶として尊重しない。尙書に『不レ寶二遠物一則遠人格』とあるのを引用した語。○得がたき寶をたふとまず　容易に手に入らぬやうな寶物を尊重しない。老子に『不レ貴二難レ得之貨一使二民不レ爲レ盜』とある。

第百二十一段

養ひ飼ふものには、馬、牛。繫ぎ苦むるこそいたましけれど、なくてかなはぬ物なれば、如何はせむ。犬はまもり防ぐつとめ、人にも優りたれば、必ずあるべし。されど家ごとにあるものなれば、ことさらに求め飼はずともありなむ。その外の鳥獸、すべて用なきものなり。はしる獸は、檻にこめ、鎖をさゝれ、飛ぶ鳥は、翼を切り、籠に入れられて、雲を戀ひ、野山をおもふ愁やむ時なし。そのおもひ我が身にあたりて忍びがたくば、心あらむ人これをたのしまむや。生を苦めて目をよろこばしむるは、桀紂が心なり。王子猷が鳥を愛せし、林にたのしぶを見て、逍遙の友としき。捕へ苦めたるにあらず。凡そめづらしき鳥、あやしき獸、國に養はずとこそ、文にも侍るなれ。

【通解】家に養ひ飼ふものでは馬と牛。それを繫いで苦めるのは如何にもかはいさうな事ではあるが、なくてはならぬ物だから、どうも仕方がない。犬は家を守り賊を防ぐ働きが、人にも優つてゐるから、必ず飼つて然るべき

ものだ。然しどこの家にでもあるものだから、殊更に求めて飼ふにも及ぶまい。その外の鳥獸は、凡て無用のものである。そんなものを飼ふとなると、走る獸は、檻におし込められたり、鎖をつけられたり、飛ぶ鳥は、翼を切られたり、籠に入れられたりして、雲を戀ひ慕ひ、野山を思ふ愁の止む時はない。その思が我が身につまされて堪へ忍び難いとしたら、心あるところの人はどうしてそれを樂まうや。生ある物を苦めて自分の目を樂ませるのは、夫の殘忍の暴王桀紂の心である。王子猷が鳥を愛したのは、鳥が林に樂しく遊んでゐるのを見て、そゞろ歩きの友としたのであつた。捕へて苦めたのではない。凡て珍奇な鳥獸は國中に養はぬものだと、書物にも書いてあるのであります。

【文旨】　實生活上どうしても缺かされぬもの――馬、牛、それから犬の外は、一切鳥獸を飼はぬがよい、それは生物を苦める以外に何の利益もないといふのである。「はしる獸は……たのしまむや」の所が、殊に感情的にしみりと書かれてゐる。それから犬は必ずあるべしといひながら、然し門並あるから強ひて求め飼ふにも及ばぬといふ一寸した矛盾が又面白い。「ことさらに求め飼はずともありなむ」といふやうな詞の中に、何事もあるがまゝにしてわざと求めぬといふ筆者の趣味が鮮かに見えてゐる。

【語義】　○養ひ飼ふものには馬牛　「養ひ飼ふものには」が題目で、「馬牛」がそれに對しての解決。例の枕草子の筆法に倣つた書きぶりである。○いたまし　いたはしい、不びんだ、かはゆさうだ。○如何はせむ　どうしよう、どうも仕方がない、飼つて置くのは止むを得ぬ。○まもり防ぐつとめ　家を守り賊を防ぐ任務。○飼はずともありなむ　飼はなくともよからう、飼ふにも及ぶまい。「ありなむ」は未來完了の形であるが、こゝは、あるがよいといふ批判選擇の心持。○はしる獸　野山を自由に走りまはる獸。○檻にこめ　をりの中にとぢこめ。こゝの文脈は、

はしる獸は　―(或ハ)檻にこめ(ラレ)
　　―(或ハ)鎖をさゝれ

飛ぶ鳥は　―(或ハ)翼を切(ラレ)
　　―(或ハ)籠に入れられ

といふ對立と見てよい。○鎖をさゝれ　鎖をつけられ。「さす」はおやうをかふにいふ語だから、「くさり」は或は「ぢやう」の義かとも考へられるが、姑く言葉通りに解し、從つて「さす」を附けるの義に解して置く。○雲を戀ひ野山をおもふ愁　鳥や獸が、自由に空中を飛翔し山野を走せ廻る事が出來ないで、それを思ひ慕つてゐる心の愁。○我が身にあたりて　自分の身につまされて。○心あらむ人　事の情理を解する人。○生　生物。○目をよろこばしむ　目を樂ませる、見て樂しく思ふ。○桀紂が心　夏の桀王、殷の紂王の如き殘忍な心。共に暴逆無道の王として有名な人。○王子猷　晉の王徽之、字は子猷。書道の泰斗王羲之の子で、風流を以て知られた人。○愛せし　「愛せしは」の連體省略。晉書の王子猷傳には鳥を愛した事は見えない。和漢朗詠集、竹枝詞、章孝標『阮籍嘯場人歩月、子猷看處鳥栖煙』　○逍遙　そゞろあるき。あちらこちらとぶら〳〵遊ぶ歩いて樂む意。○凡そ　すべて。「まづ一般の心得には」と解してクォーテーション外の言葉と見る說もあるが、原文そのものの調子では、この詞からがクォーテーション意識の文句のやうに考へられる。○めづらしき鳥云々　尙書に「珍禽奇獸不育于國」とあるのをいふ。

第百二十二段

人の才能は、文あきらかにして、聖の教を知れるを第一とす。次には手かくこと、むねとする事はなくとも、これを習ふべし。學問に便あらむためなり。次に醫術を習ふべし。身を養ひ、人を助け、忠孝のつとめも、醫にあらずばあるべからず。次に弓射、馬に乘ること、六藝にいだせ

り、必ずこれを窺ふべし。文武醫の道、まことに缺けてはあるべからず。これを學ばむをば、いたづらなる人といふべからず。次に食は人の天なり。よく味をとゝのへ知れる人、大なる德とすべし。次に細工、よろづの用おほし。この外の事ども、多能は君子のはづるところなり。詩歌にたくみに、絲竹に妙なるは、幽玄の道、君臣これを重くすといへども、今の世には、これをもちて世を治むること、漸くおろかなるに似たり。金はすぐれたれども、鐵の益多きに如かざるがごとし。

【通解】　人の才能は、書物に明かで、聖人の教を心得てゐるのが第一である。次には字を書くこと、專門としてはやらない迄も、やはり之を習ふがよい。それは學問上に便宜あらしめようが爲めである。次に醫術を習ふがよい。我が身を丈夫にし、人を助け、忠孝の道をつとめるのも、醫術でなくては達し得ない。次に弓を射、馬に乘ることは、六藝の內に出してある、必ずそれを一通り習ふがよい。文武醫の道は、ほんとに缺けてはならない。それを學ぶ人をば、無益の事をする人とはいはれない。次に食物は人の天で、生命を保つに大切なものである。よく調理の仕方を心得てゐる人は、大きな德として尊重すべきだ。次に手工、これは又萬事に役に立つ事が多い。この外色々な事があるが、多能は君子の恥ぢる所である。詩歌に巧であり、音樂にすぐれてゐるのは、非常に優美高尙な道で、君臣共に之を重じてゐるけれども、今日の世では、これを以て治世の具とするのは、段々おろそかな、實際に遠い事のやうになつて來た。それは、金はすぐれてはゐるが、鐵の實益多きに及ばざるが如きものである。

【文旨】　これは儒道的な見地から、世人一般の修養すべき目を說いたのである。これだけ習ふのでも仲々容易でないのに、「多能は君子の恥づる所」などというてゐる所を見ると、當時の上中流ではまだ〳〵色々手を出したものといふ事が分る。第八十段に「人ごとにわが身にうとき事をのみぞ好める」とも說いてゐる。それ等と對應して考へて見るに、人として世に處する以上、道德上又實生活上どうしても習はねばならぬ事が多い、然るに世人はそれを外にして却てつまらぬ多能を競つてゐる、そんな事ではならぬ、といふのが此の一文の主張に違ひない。文末の詩歌音樂もそれで、君臣共に治世の具といふ口實でそれを專らとしてゐる、而もそれは昔の事で、今日の政治はそれでは行けぬ。やはり實質的な文武醫の道を學んで、それに立脚して實際的な政治をやる方が時勢に適切だというたものと思ふ。さう見れば最後の譬喩も面白い。徒らに幽玄を事としても、實益が伴はなくては駄目だといふ心持がよく味はれる。

【語義】　○文あきらかにして　書物（特に四書五經の如き書を指す）に明かで、よく書を讀んで之に精通して。○聖の教　聖人の教。こゝのは佛教でなく儒教を指したもの。○むねとする事はなくとも　それを專一としてやる事はなくとも。○學問にたよりあらむため　學問に便宜あらしめむがため。卽ち學問をやる上に都合のよいやうにといふためで手習をせよとの意。「あらむ」は「あらしめむ」と考へてよからう。○忠孝のつとめ　君や親につかへる務。○醫にあらずばあるべからず　醫術でなくては出來ない。○六藝　儒教で必須とした六つの科目。禮（禮儀）樂（音樂）射（弓を射ること）御（馬を馭すること）書（字を書くこと）數（數學）。○いたづらなる人　無駄な事をする人。○食は人の天なり　天は一切の物を生育する、食物は人の命をつなぎ之を生育するものであるから、それで食は人の天だといふ。書經帝範に『夫食爲二人天一、農爲二政本一』とある。○味を調へ知れる人　料理の出來る人、食物の調味法を心得た人の意。○大いなる德　大きな利德。自他を利する所が多いといふ思想。○多能は君子のはづるところ　能の多いのは修德の君子の心に恥づる所。論語子罕篇に『太宰問二于貢一曰、夫子聖者歟、何其多能也、子貢曰、固天縱レ之、將聖又多能也、子聞レ之曰、太宰知レ我乎、吾少也賤、故多二能鄙事一、君子多乎哉、不レ多也』と

あるのを引いた詞。○絲竹　琴の類と笛の類、音樂。○幽玄の道　幽遠玄妙の道、高尚な、奥深い道。○君臣。これを重くす　君も臣も之を重んずる。昔は詩歌音樂を以て治道の要具とした、それで今でもその意味で之を重んずるといふのであらう。○漸くおろかなるに似たり　漸く迂遠なものとなつたやうである。「おろか」はこゝでは、おろそかだ、實際にうとい、迂遠だ、の意と見てよからう。

第百二十三段

無益の事をなして時をうつすを、愚かなる人とも、僻事する人ともいふべし。國のため君のために、止むことを得ずしてなすべき事おほし。そのあまりの暇、いくばくならず思ふべし。人の身に止むことを得ずして營む所、第一に食物、第二に著る物、第三に居る所なり。人間の大事、この三つに過ぎず。飢ゑず、寒からず、風雨におかされずして、しづかに過すを樂とす。たゞし人みな病あり。病におかされぬれば、その愁忍びがたし。醫療を忘るべからず。藥を加へて、四つの事もとめ得ざるを貧しとす。この四つ缺けざるを富めりとす。この四つの外を求め營むを驕とす。四つの事儉約ならば、誰の人か足らずとせむ。

【通解】　役にも立たぬ事をして時を移すのは、愚かな人とも、不善をする人ともいふべきである。吾々は國の爲め君の爲めに止むを得ずしなければならぬ事が多い。その餘暇はいくらもないものと思はなければならぬ。人間の身の上に、止むを得ずして營々としてやる事は、第一に食物、第二に著物、第三に居所である。世間の重大事は、この三つに過ぎない。飢ゑず、こゞゑず、風雨に犯されないで、靜かに世を過すのが人世の樂である。但し人は皆病がある。病氣に犯されるとなると、その愁はたへ難い。だから醫療の用意を忘れてはならぬ。卽ち衣食住に藥を加へて、この四つの事を求め得なければそれは貧しいのである。この四つに事を缺かなければそれは富んでゐるのである。この四つ以外の事を求めてあくせくするのは驕である。この四つの事を求めるにつゞまやかであつたら、どんな人でも不足を感ずるといふ事のあらう筈はない。

【文旨】　生活の實用として衣食住と藥とを擧げ、これ以外に色々無益の事をやるのは「愚かなる人」「僻事する人」だというてゐる。「四つの事もとめ得ざるを貧しとす。この四つ缺けざるを富めりとす。この四つの外を求め營むを驕とす」とは痛快な定義である。兼好に從へば世人の多くは皆驕である。なるほどこの定義に從つて、而も「四つの事儉約ならば」世に「足らず」とする人は恐らく一人もあるまい。極端な論には違ひないが、簡易生活を極端に高調した文として、一味の趣もあり一面の眞理もある。

【語義】　○僻事　善くない事、道理に外れた事。○いくばくならず思ふべし　「いくばくならずと思ふべし」の略だらう。「いくばくならず。思ふべし」と切つて、「思ふべし」をよく考へでごらんといふ意に解しても通じなくはないが、文調上面白くないやうだ。○しづかに過す　心靜かに世を送る。○求め營む　色々の物をほしがり求め、營營としてかせぎ働く。○四つの事儉約ならば　四つの事を求めるのにつゞまやかであるならば。四事に對する要求が儉約で、最小限度に切りつめて行けば。○誰の人か足らずとせむ　反語。誰人でも足らずとしない、どんな人でも不足を感ずる筈はない。

第百二十四段

是法法師は淨土宗に恥ぢずといへども、學匠をたてず、たゞ明暮念佛して、やすらかに世を過ぐ

すありさま、いとあらまほし。

【通解】是法法師は、淨土宗門中何人にも遜らぬ學者であるが、學者といふ事を表立てず、朝夕只念佛をして、心靜かに世を過してゐるありさま、誠にこのもしい。

【文旨】作者と交際のある人だから、こんな風に現在描寫の形式で率直に其の態度を褒めたのである。

【語義】○是法法師　念阿の弟子、兼好と同時代の歌人で、兼好とも交際があつた。○淨土宗に恥ぢず　淨土宗に掛けては誰にも遜らない學者であつた。○學匠をたてず　學者といふ事を表面に立てない。「學匠」は佛道を學習するものを稱する語。「たてず」は殊更にそれを標榜しないといふ意。○やすらかに　心靜かに、ゆつたりとして。○いとあらまほし　誠に好もしい、如何にも望ましく羨しい。

第百二十五段

人におくれて、四十九日の佛事に、ある聖を請じ侍りしに、説法いみじくして、みな人涙をながしけり。導師かへりて後、聽問の人ども、「いつより殊に今日は尊くおぼえ侍りつる」と感じあへりし返事に、ある者いはく、「何とも候へ、あれほど唐の狗に似候ひなむ上は」といひたりしに、あはれさもさめて、をかしかりけり。さる導師のほめやうやはあるべき。

【通解】人に先立たれて、四十九日の法事を營んだ時に、或聖人を招いた所が、説法を頗る上手にやつて、一座の人々皆感涙を催したのであつた。さてその導師が歸つて後、その説法を聽聞した人たちが、「いつよりも今日は特別有難く思はれました事です」と感じあつてゐると、其の挨拶に、或者が、「何に致せ、あれほどこま狗に似て居りますからには」というたので、今迄の感銘もさめてしまつて、をかしかつた。導師をほめるのに、そんな譽め方つてあるものですか。

【文旨】一文二段、何れも突飛な譬喩に輕い滑稽味を覺えての筆錄である。「さる導師のほめやうやはあるべき」といふ一句が、如何にもくすくす笑ひながら、「冗談ぢやない、なんぼなんだつて、導師を褒めるのにそんな褒め方ッてあつたものぢやアない」といふその語調をそのまゝ活寫してゐる。そしてその中には、寧ろそれに共鳴して、如何にも尤もらしく説教して俗衆に感涙を流させた導師の僧を愚かしがつてゐるやうな皮肉な氣分が感じられる。蓋し聽衆に感涙を流させるやうにと得々と説教したその僧の勿體ぶつた樣子が、社頭のこま犬を聯想させるにふさはしいものであつたので、こんな突飛な譽め方をしたのでもあらう。

【語義】○人におくれて　人に先立たれて、人に死別れて。○四十九日の佛事　四十九日は中陰で、人の死後四十九日間であるが、こゝは七七四十九日目、即ち中陰の最終の日の法事をいふ。○請じ　招き。○いみじくして　非常にうまくやつて。○導師　佛事の時法儀の主となる僧。招かれて説教をしたその聖を指す。○何とも候へ　何といつても、何にしても。○あれほど唐の狗に似候ひなむ上は　あれほどこま狗に似てゐるからには、それはもう大したものですわ、といふ意。「唐の狗」はこま犬。この文句の下に「とかく申すべきに候はず」など補つて見よ。○あはれさもさめて　感じもさめて、今迄しみ〴〵有難く思つて感じてゐた其の感銘もさめて了つて。○をかしかりけり　可笑かつた。ついふき出しさうになつたといふのである。

また、「人に酒を勸むるとて、おのれまづたべて、人に强ひ奉らむとするは、劔にて人を斬らむ

とするに似たることなり。一方に刃つきたるものなれば、もたぐる時、まづ我が頭を斬るゆゑに、人をばえ切らぬなり。おのれまづ醉ひて臥しなば、人はよもめさじ」と申しき。劒にて斬り試みたりけるにや。いとをかしかりき。

【通解】又「人に酒を勸めろというて、自分がまづ飲んでおいて、それから人にお強ひ申さうとするのは、劒で人を斬らうとするのに似た事だ。劒は兩方に刃のついてゐるものだから、ふり上げる時に、まづ自分の頭を斬るから、人をばよう切らぬのである。それと同じわけで、自分がまづ醉ひ倒れてしまつたら、人は決して召し上るまい」と申した。そんな事をいうて、一體その御本人が劒で斬つてためしてみた事があつたのだらうか。ほんとにをかしかつた。

【文旨】これはまた別の者のいうた言葉のやうにもあるが、この文の書き方では同一の男と見る外なからう。これも前節同樣突飛な譬喩のをかしみである。「劒にて斬り試みたりけるにや」が、前の「さろ導師のほめやうやはあるべき」と呼應して、共に點睛の妙がある。何れも筆者がふき出すやうな心持で評してゐるのである。

【語義】○おのれ　自分が、勸める者自身が。○たべて　飲んで。飲食ともに「たぶ」といふ。今日でも「たべ醉ふ」などいふと同じ。○強ひ　すゝめ。○二方に　劒はもろ刃で、兩方に刃がついてゐる。○もたぐる時　もち上げる時。振上げる時である。○よも　よもや、決して。○めさじ　召上るまい。「めす」は「たぶ」の敬語。

第百二十六段

「ばくちの、まけ極りて、後なくうち入れむとせむにあひては、打つべからず。立ちかへり、つゞけて勝つべき時のいたれを知るべし。その時を知るを、よきばくちといふなり」と、あるもの申しき。

【通解】「ばくち打ちが、もうすつかり負け切つて了つて、いよ〳〵殘らず打込んで所謂乾坤一擲の勝負をしようといふ場合に對しては、決して打つてはならない。形勢が逆轉して、先方に連戰連勝すべき時の至つたものと心得るべきである。かういふ時機を知るのを、すぐれたばくちうちといふのだ」と、或人がいうた。

【文旨】作者自身の考へを人に託して言はせたやうにもある。作者は博奕に相當の趣味を持つてゐたやうだ。そして機運轉換の機微を知るといふ事がこの一文の主旨であらう。

【語義】○ばくち　「ばくちうち」の略で、賭博そのものでなく、賭博師卽ち今日の所謂ばくちうちをいふ語。○まけ極りて　負けが其の極に達しての意。○殘りなく打ち入れむとせむに　殘つてゐる物をすつかりかけて了はうとするやうな場合に。○あひては　對しては。○立ち歸り　逆にもどり。今迄とはあべこべになつての意。○つゞけて勝つべき　負け極つた先方の人がである。

第百二十七段

あらためて益なきことは、改めぬをよしとするなり。

【通解】改めて益のない事は、そのまゝ改めずにおくがよいのである。

【文旨】簡單明瞭、而も作者の自然でやす〳〵とした事を好む心持がよく出てゐる。

【語義】○改めぬをよしとす。改めないがよい。「何々を何々とす」は平たくいへば「何々が何々である」といふに當る。

第百二十八段

雅房大納言は、才かしこく、善き人にて、大將にもなさばやとおぼしける頃、院の近習なる人、「只今あさましきことを見侍りつ」と申されければ、「何事ぞ」と問はせ給ひけるに、「雅房卿、鷹に飼はむとて、生きたる犬の足を切り侍りつるを、中垣の穴より見侍りつ」と申されけるに、うとましく、にくゝおぼしめして、日ごろの御氣色もたがひ、昇進もしたまはざりけり。さばかりの人、鷹を持たれたりけるは思はずなれど、犬の足はあとなき事なり。虚言は不便なれども、かゝることを聞かせ給ひて、にくませ給ひける君の御心は、いとたふときことなり。

【通解】雅房大納言は、學才のすぐれた、いゝ人物で、院に於ては大將にも任じようと思召しておいでになる時分のこと、院の近習の人が、「只今あまりと申せばあまりの事を見まして御座ります」と申上げになつたので、院は「何事か」と御尋ねになつた所、「雅房卿は、鷹の餌にしようとて、生きてゐる犬の足を切つて居りましたのを、中垣の穴から見まして御座ります」と申上げになつたので、それを聞いて院は雅房の事を、厭はしく、にくゝ御思ひになり、日頃の御機嫌――御寵愛の思召も一變して、昇進もなされなかつた。一體あれ程の人が、鷹を持つて居られたのは意外な事であるが、然し犬の足を切つたなどとは、跡形もないうそである。さうした讒言を受けたのは誠に氣の毒な事だが、かういふ事をお聞きになつて、それをおにくしみになつた君の御心は、誠にありがたい事である。

【文旨】前の百二十一段と全く同精神で、生物を苦めて樂むのは人間ではないといふ議論の前提として、雅房大納言の例を取出したのである。虚言によつて雅房は院の折角の御寵愛を失ふに至つた、さうしたつくり言は誠に氣の毒な次第だが、然しさういふ事を聞いておにくしみになつた院の御心は尊いといふ評が、情理の委曲を悉して此の話を活かしてゐる。

【語義】○雅房大納言　大納言源雅房。太政大臣定實の子、正二位大納言、後土御門と號す。○才かしこく　學才がすぐれ。「ざえ」は多くの場合、心の働きよりも、學問藝能の方を主としていふ詞。○善き人　上品でよく物の情理を解した人物。○大將　近衞の大將。○なさばや　しようといふ意志を表はす語。○おぼしける頃　院が御思ひになつてゐる時分に。○院　古來後宇多院だらうと考へられてゐるが、橘氏は詳細に考證して後伏見院だと斷じてゐる。○近習　近侍の臣、お側近く仕へてゐる者。○あさましきこと　あまりの事、あまりにひどい事、あきれはてる程の事。○鷹に飼はむとて　鷹に餌として與へようとして。「飼ふ」は食はせること。○中垣　隔ての垣。並んだ家と家との中間に隔てとして作る垣、又は庭の中に作つた隔ての垣。○穴　出來てゐるすきまの意味か、それとも破れた穴か、何れにしても中垣を通してのぞいて見たといふのである。○うとましく　いとはしく、きらはしく。○御氣色　御機嫌。其の内容をいへば雅房に對する寵愛の思召である。○昇進もしたまはざりけり　役が上りなさらなかつた。卽ち大將になれなかつたのである。この句の主語は「雅房」。○さばかりの人　それ程の人。院が「大將にもなさばやとおぼしめす」程「才かしこく善き人」がといふ意。○思はずなれど　意外だが、案外だが。それほどの人物が、鷹を使用して殺生するなどはちと意外だと咎めたのである。○犬の足はあとなき事なり　犬の足を切つて鷹の餌にしたなどといふのは跡形もないうそだ。省殺の筆致が面白い。○不便　氣の毒な事。○君の御心　院の御心。○いとたふときことなり　誠に尊い事だ。君の慈悲深い御心がありがたいといふのである。

おほかた生けるものを殺し、痛めたゝかはしめて、遊び樂まむ人は、畜生殘害の類なり。よろづの鳥獸小き蟲までも、心をとめてありさまを見るに、子をおもひ、親をなつかしくし、夫婦を伴ひ、妬み怒り、欲おほく、身を愛し、命を惜める事、ひとへに愚痴なるゆゑに、人よりも勝りて甚し。かれに苦みを與へ、命を奪はむこと、いかでか痛ましからざらむ。すべて一切の有情をみて、慈悲の心なからむは、人倫にあらず。

【通解】大體生きてゐる物を殺し、痛め鬪はせて、遊び樂まうとする人は、殘忍極まる畜生の類である。凡て鳥獸、小さい蟲けらまで、よく氣をとめて其の狀態を觀るに、子を愛し、親をなつかしがり、夫婦相伴ひ、妬み怒り、慾心が多く、身を愛し、命を惜んでゐる事は、何等の理智もなく只もう愚かなものだけに、人よりも更に一層甚しい。その畜類どもに苦痛を與へ、命を取るといふやうな事は、實にかはいさうな事ではないか。凡て世の一切の生物を見て、あはれみの心の起らないやうなものは、人間ではない。

【文旨】生物を殺し苦めて樂むのは畜生殘害の類といひ、一切の有情を見て慈悲心の起らぬのは人倫ではないといいて、生物を苦め殺す事の非を極言したのである。

【語義】○痛めたゝかはしめて　鬪犬鬪鷄などの事をいうたのだらう。「痛め」は傷つけの意。○畜生殘害　鳥獸蟲魚の互に害しあふのをいふ佛教上の語。○なつかしくし　なつかしく思ひ。○夫婦を伴ひ　雌雄相伴ひ仲よくしてゐるのをいふ。○ひとへに　只一途に、只々もう。○愚痴　おろか。○いかでか痛ましからざらむ　どうして可哀さうでなからうや、實に可哀さうな事だ。「痛ましは可哀さうの意。○一切の有情　ありとあらゆる生物。「有情」は佛語で、生きてゐて情（こゝろ）あるもの、即ち生物。○慈悲　あはれみ。○人倫　人間。「倫」はたぐひの意。こゝは人道の義ではない。

第百二十九段

顏回は、志、人に勞を施さじとなり。すべて、人を苦め、物を虐ぐること、賤しき民の志をも奪ふべからず。又いときなき子をすかし、おどし、言ひはづかしめて、興ずることあり。おとなしき人は、まことならねば、事にもあらず思へど、幼き心には、身にしみて、恐しく、恥しく、あさましきおもひ、誠に切なるべし。これを惱して興ずること、慈悲の心にあらず。おとなしき人の、喜び、怒り、悲び、樂むも、皆虛妄なれども、誰か實有の相に著せざる。身を破るよりも、心を痛ましむるは、人を害ふ事なほ甚だし。病を受くる事も、多くは心より受く。外より來る病は少し。藥を飲みて汗を求むるには、しるしなきことあれども、一旦恥ぢ恐るゝことあれば、かならず汗を流すは、心のしわざなりといふことを知るべし。凌雲の額を書きて、白頭の人となりし例なきにあらず。

【通解】顏回は、其の常に心掛けてゐた事が、人に苦勞を掛けまいといふに在つた。すべて、人を苦め、物をむごく扱ふのはよくない事で、どんな賤しい民でも、そのしたいと志す所を曲げるべきものではない。又幼ない子供をだましたり、おどかしたり、からかつたりして、興がる事がある。年のいつた人は、もとゝくうその事だから、

何とも思はないが、幼い子供の心では、それが深く身にしみて、恐しくも思ひ、恥しくも思ひ、なさけなくも思ふ、その思は實に痛切であるに違ひない。それを困らして興がるのは、無慈悲な事だ。年のいつた人の喜怒哀樂も、皆空のものであるが、而も誰しも皆實在性のあのものと思ひ込むではないか。からだを痛め苦めるよりも、心を痛めるのは、人を害する事が一層ひどい。病氣を受けるのも、多くは心から受ける。外から來る病は少ない。藥を飲んで汗を出さうとしても、その效驗のない事はあるが、一寸恥ぢ恐れることがあれば、必ず汗を流す、それによつてこの事が心のしわざだといふ事が分らう。凌雲の額を書いて、忽ち白頭の人になつたといふ例もなくはないのである。

【文旨】前段を受けて、人に對する慈悲――殊に其の心をなやましてはならぬといふ事を說いたのである。最後に凌雲の額の例を引いたのも、心の苦みの身體に及ぼす重大な影響を例示したのである。幼ない子供を欺きおどし辱めて興がるといふ世間一般の習はしに對して、その無慈悲を鳴らしたのは、慥かに卓見で、そしてしんみりとした愛情が味はれる。

【語義】○顏回　孔子の弟子顏淵、一番の高弟で亞聖と謂はれた程の人格者。○志云々　論語、公冶長篇に『子曰、盍ㇾ各言ニ爾志一……顏淵曰、願無ㇾ伐ㇾ善、無ㇾ施ㇾ勞』とあるのをいうたもの。○物を虐ぐること　物をむごくすること。「虐ぐ」は虐待する、ひどい目にあはせる、むごく扱ふの意。この句の下に「いとあるまじきわざにて」(甚だよくない事で)といふやうな詞を補つて考へるとよく分る。○賤しき民の志をも奪ふべからず　どんな賤しい民の志でも奪ふべきものではない。「志を奪ふ」は、あゝしたい、斯うしたいと思ふ、其の志を矯めて、それをさせないやうにするのをいふ。これは、論語の子罕篇に『三軍可ㇾ奪ㇾ帥、匹夫不ㇾ可ㇾ奪ㇾ志也』とあるのを、意味をかへて引用したのである。○いときなき　いとけなきに同じ。○すかし　だまし、欺き。○言ひはづかしめて　からかつて。子供に恥しい思ひをさせるやうな事をいふのをいふ。○興ずる　興とする、面白がる。○わとなしき人　年の長じた人。○まことならねば　ほんとの事でないから。○事にもあらず思へど　何でもなく思ふが、別段何とも思はぬが。○あさましきおもひ　あさましいと思ふ心。「あさまし」は原義通り、あまりひどい、あまりになさけないの意。○虛妄　妄念から起つた空な事、眞ならざる一時の心の幻影。○實有の相　實在の姿、現象を實在性の有るものと觀ずるごと。○誰か……著せざる　反語、誰でも皆執著する、誰でもそれに深く心を染めて思ひ込む。○身を破る　からだを痛める。○藥を飲みて云々　發汗劑を飲んで汗を出さうとしても、そのきゝめのない事がある。○汗を流すは　汗を流すその事實はそれによつて、といふ心持と見るべき文調。○心のしわざ　汗を流すのは心のするわざ。○凌雲の額　魏の韋誕といふ能書家が、非常に高い凌雲臺の上につり上げられて額を書かされて、その恐ろしいと思ふ心の爲めに、忽ち白髮になつたといふ故事。

第百三十段

物に爭はず、おのれを枉げて人に從ひ、我が身を後にして、人を先にするには如かず。よろづのあそびにも、勝負を好む人は、勝ちて興あらむためなり。おのれが藝の勝りたる事をよろこぶ。されば負けて興なく覺ゆべきこと、また知られたり。われ負けて人を歡ばしめむと思はば、更にあそびの興なかるべし。人に本意なく思はせて、わが心を慰まむ事、德に背り。

【通解】何事についても人と爭はず、自分を枉げて人に從ひ、自分の身を後にして、人を先にするにこした事はない。凡ての遊びにしても、勝負を好む人は、勝つて愉快を感じようがためである。從つて自身の藝の他に勝つて

ゐる事を喜ぶ。だから負けて不快に感ずべき事も、又知れてゐる。若し自分が負けて人を歡ばせようと思つたら、一向遊びの面白味はないであらう。人につまらぬ思をさせて、自分の心を樂ませようとするのは、德に背いてゐる。

【文旨】　人と爭はず、身を屈して人に從ふがよい。その意味において、勝負事は甚だいけない。勝負事をやるのは勝つて興味を感じようがためだ。從つて自分が負けて人を愉快がらせようとするのでは一向面白くなし、されば自分が勝つて、人に不本意な思をさせる事によつて自分の心の樂みを味はうとするのは德にそむく。何れにしても勝負事などはいけないといふのである。

【語義】　○物に爭はず　物事について人と爭はずといふ意。○おのれを枉げて。　自分を枉げて。自分の意見をひかへ屈しての意。○我が身を云々　自分の身は後廻にして人を先にし、人に花を持たせるがよい。「には如かず」は、それがよい、それに越した事はないの意。○興あらむためなり　興味あらむがためだ、面白味を味はうがためだ。○おのれが藝の勝りたる事をよろこぶ。　此の文の主語は上文の「勝負を好む人は」の省略である。○知られたり。知れてある、分つてゐる。○われ負けて。　自分が負けて。こちらが負ければ人はさぞ喜ぶだらうといふやうな氣で遣つてゐたのでは、一向遊戯としての興はない、といふ文意。○人に本意なく思はせて　人につまらなく思はせて、人につまらない思をさせて。負ければ人はつまらなく思ふ、それを指していうたのである。○慰まむ事　慰めようとするのは。○德に背けり　德に叶つてゐない。道にそむくといふ意。

むつまじき中に戯るゝも、人をはかり欺きて、おのれが智の勝りたることを興とす。これまた禮にあらず。さればはじめ興宴より起りて、長き恨を結ぶ類おほし。これ皆あらそひを好む失なり。人に勝らむことを思はば、たゞ學問して、その智を人に勝らむと思ふべし。道を學ぶとならば、善に伐らず、ともがらに爭ふべからずといふ事を知るべきゆゑなり。大なる職をも辭し、利をも捨つるは、たゞ學問の力なり。

【通解】　親しい中でじようだんをいふのにも、よく人をかついだりだましたりして、自分の智惠の勝つてゐる事を樂みにするものだが、これも亦禮に叶はぬ事だ。だから最初は遊興酒宴の戯言から事が起つて、長い間の恨を結ぶやうな例が多い。これは皆爭ひを好む弊である。若し人に勝たうと思うたら、そんなつまらぬ事は止めて、たゞ學問をして、學問上の智識を人に勝らせようと考へるがよい。何故に道を學ぶかといへば、それは自己の善行を鼻に掛けず、同輩と爭うてはならぬといふ事を知るべきがためである。時宜によつて、大きな職をも辭し、利益をも捨て得るのは、只學問の力である。

【文旨】　前節を承けて、親友間で冗談にだまし合ひをする、それもいけないというて、扨結論として、人に勝ちたいと思ふなら學問をして其の智に於て勝つ事を心掛けるがよい、時宜によつては高位大利も敝履の如く捨てて、身を高潔に持し得るのは只學問の力だと結んだのである。

【語義】　○むつまじき中　親しい中、仲のよい友達同志の中。○はかり　かつぎ、だまし。○興宴　遊興酒宴。○起りて　事が起つて、始まつて。○長き恨　いつまでも解けない恨。○失　弊、缺點。爭ひを好むといふ弊として斯ういふ事が生じて來るのだといふ意。○その智を人に勝らむと　その智を人に勝らしめむとといふ文意。○道を學ぶとならば　なぜ道を學ぶかといふに。第百八段には「光陰何のためにかをしむとならば、……修せん人は修せよとなり」とあり、こゝは「道を學ぶとならば……知るべきゆゑなり」とある。蓋し共に理由説明の呼應で、こは下に「ゆゑなり」と置くために、上の「何のためにか」を省略したといふわけであらう。○善に伐らず　よい事をしてもそれを鼻にかけない。前段に引いた論語の顔淵の語。○ともがら　仲間、同輩。

第百三十一段

貧しきものは財をもて禮とし、老いたるものは力をもて禮とす。おのが分を知りて、及ばざる時は、速かに止むを智といふべし。許さざらむは、人のあやまりなり。分を知らずして、強ひて勵むは、おのれがあやまりなり。貧しくて分を知らざれば盗み、力衰へて分を知らざれば病をうく。

【通解】 貧乏なものは兎角財貨を以て義理立てする事を禮儀とし、年取つた者は人のために筋力を使ふのを禮儀とするものだが、それは甚だ間違つてゐる。自分の身の程を心得て、力の及ばぬ時は、速かに止めるのが賢明といふべきである。それを許さぬとすれば、それは人の心得違である。身の程を知らないで、無理に勵むのは、自分の心得違である。貧乏でゐて身の程を知らないと、盗をするやうな事になり、體力が衰へてゐて分を知らないと、その爲めに病氣になるやうな事になる。

【文旨】 世間の人は、兎角自分の力不相應な義理立てをしたがる。貧乏人が金で義理をし、年寄が筋力で人に盡さうとする類、さういふ無理をすると、遂には身の破滅を來すといふ、さうした社會訓を、簡潔な筆致で書いたのである。大いに味ふべき活教訓である。

【語義】 ○貧しきものは云々　貧乏人は財によつて禮をつくさうとし、年寄りは力によつて禮を致さうとする。それが世間の習はしだが、よくない事だといふのである。よくないといふ意味の言葉は原文には無いが、文の筆致から自然に浮んで來べき思想である。「禮とす」は、禮と心得る、禮を盡す所以の道と思ふ、といふ意。禮記曲禮上に『貧者不レ以二財貨一爲レ禮、老者不レ以二筋力一爲レ禮』とある、それを兎角世間はさうしたものだといふ心持から、肯定の形に轉用した立文と考へられる。○おのが分　自分の分限、自分の身の程。○及ばざる時は　自分の力に及ばぬ時は。○止む　止める、手を引く。○許さざらむは云々　出來ないからしない、それを許さぬとすれば、それは許さない人の心得違である。○貧しくて云々　貧乏の癖に財をもて禮として、無理に金品で義理立てをしようとすれば、遂には苦しまぎれに盗みをするやうになる。○力衰へて云々　年を取つて體力が衰へてゐるのに、而も筋力を以て人に禮を盡さうとすれば、自然からだに無理が出來て病氣に罹る。

第百三十二段

鳥羽の作道は、鳥羽殿たてられて後の名にはあらず、昔よりの名なり。元良親王、元日の奏賀の聲、はなはだ殊勝にして、大極殿より鳥羽の作道まで聞えけるよし、李部王の記に侍るとかや。

【通解】 鳥羽の作道は、鳥羽殿をお建てになつてから後についた名ではない、その以前からの名である。元良親王の元日の奏賀の役を勤められた聲が、非常にお見事で、大極殿から鳥羽の作道まで聞えたといふ事が、李部王の記に書いてあるとかいふ事だ。

【文旨】 世間では鳥羽の作道を鳥羽殿が出來てから後の名のやうに思つてゐるが、さうではなくて、もつと昔からの名だといふ事を、李部王記といふ書を引いて說明したまでである。

【語義】 ○鳥羽の作道　京の九條から鳥羽に通ずる一直線の大路。「作道」は拵へた道、卽ち新道の義。○鳥羽殿

白河帝が應德三年（一七四六）にお建てになり、鳥羽帝御增修の離宮、上鳥羽にあづた。○たてられ　「られ」は受身と見るよりも敬語と見た方が自然だらう。○元良親王　陽成天皇の第一皇子、三品、兵部卿、天慶六年（一六〇三）に御年五十四で薨ぜられたから、鳥羽殿創營の約百四十年前に當る。○元日の奏賀　元旦に天皇が大極殿で皇太子以下百官の賀を受け給ふ朝賀の式に、賀詞を奏する役。○殊勝にして　ことにすぐれてゐて。聲が高くてよく通つたのをいふ。○大極殿　大內裏朝堂院の正殿で、大儀を行はれる所。○李部王の記　式部卿重明親王（醍醐天皇第四の皇子）の日記。李部は普通「史部」と書く、式部の唐名で、特にリホウと讀む習はしである。

第百三十三段

夜のおとゞは、東御枕なり。大かた、東を枕として、陽氣を受くべきゆゑに、孔子も東首し給へり。寢殿のしつらひ、或は南枕、常のことなり。白河院は北首に御寢なりけり。「北は忌むことなり。また伊勢は南なり。太神宮の御方を御あとにせさせ給ふことといかゞ」と、人申しけり。ただし太神宮の遙拜はたつみに向はせたまふ、南にはあらず。

【通解】天皇の御寢所は、東御枕であろ。一般に、東を枕として陽氣を受くべきが爲めに、孔子も東枕に寢られた。寢殿の臥床の設け方としては、或は南枕にするのも、通例の事である。白河院は北枕に御寢なされたのであつた。「北は忌むことである。それに又伊勢は京都からは南である。太神宮の御方角をおみ足の方にしておやすみ遊ばされるのは如何なものだらう」と、或人が申した。但し天皇毎朝の太神宮御遙拜は東南に向はせられるのであつて、南ではない。

【文旨】枕の向きの考證で、白河院の御北首に對する一部の不審を辨ずるのが中心になつてゐる。

【語義】○夜の御殿　天子の御寢所。○陽氣　天地間の氣の中で、積極的な活動的な方の氣をいふ。支那の陰陽說からいふ語。○孔子も東首　論語鄕黨篇に『疾、君視レ之、東首加二朝服一拖レ紳』とある。○寢殿のしつらひ　主人常住の間たる正殿の臥床の設け方。○或は南枕常のことなり　東枕でなければ南枕にする、それは普通の事だ。○北首　北枕。○御あとに　御足に當る方に。○いかゞ　どういふものだらう、どうも疑問だ。それは宜しくなからうといふのである。○遙拜　毎朝天子が宮中で行はされる御遙拜。○たつみ　東南。

第百三十四段

高倉院の法華堂の三昧僧、なにがしの律師とかやいふもの、ある時、鏡を取りて、顏をつくづくと見て、我がかたちのみにくゝ、あさましきことを、あまりに心うく覺えて、鏡さへうとましき心地しければ、その後、長く鏡をおそれて、手にだに取らず、更に人に交る事なし。御堂のつとめばかりにあひて、籠り居たりと聞き侍りしこそ、ありがたく覺えしか。

【通解】高倉院の法華堂の三昧僧の、何某律師とかいふものが、或時、鏡を取つて、自分の顏をつくづくと見て、自分の容貌の如何にも醜く、何ともいひやうのないのを、餘りになさけなく思つて、鏡までが厭はしいやうに思はれたので、その後、長く鏡を恐れて、手にすらも取らず、一向人に交る事をしなかつた。そして御堂のお勤めばかりに立會つて、其の外の時は一室の內に閉ぢ籠つて居たと聞きましたが、誠に世にも珍しい殊勝な心掛けであると感じた事だ。

【文旨】何でも分を知り身を顧みて靜かにしてゐるがよいといふ議論に入る前提として、例のやうに奇拔な例を持出したのである。

【語義】○高倉院の法華堂　高倉天皇の御骨の納めてある法華堂。それは山城國愛宕郡清閑寺中にあつたのである。「法華堂」は法華三昧を修する堂である。○三昧僧　法華三昧を修する僧。一意專念法華經を讀誦して餘事に心を移さぬ僧をいふのである。○律師　僧官の名。僧都の次で僧尼を統ぶる事を掌る。○あさましきを　あまりひどいのを、何ともいへぬ程にひどいのを。○心うく　つらく、なさけなく。○うとましく　厭はしく、きらはしく。○手にだに取らず　手にさへも取らず。見ないのは勿論の事手にも取らないといふ心持。○御堂　法華堂。○つとめばかりにあひて　お勤めにだけ立會つて。「あひて」は參加しての意。○ありがたく覺えしか　珍しいと思はれた。その僧の心掛は世にも珍らしく殊勝な事だと思はれたの意。

かしこげなる人も、人の上をのみはかりて、おのれをば知らざるなり。我を知らずして、外を知るといふことわりあるべからず。されば己を知るを、物知れる人といふべし。貌醜けれども知らず、心の愚かなるをも知らず、藝の拙きをも知らず、身の數ならぬをも知らず、年の老いぬるをも知らず、病のおかすをも知らず、死の近きことをも知らず、行ふ道の至らざるをも知らず、身の上の非を知らねば、まして外の譏を知らず。たゞし貌は鏡に見ゆ、年は數へて知る。我が身の事知らぬにはあらねど、すべき方のなければ、知らぬに似たりとぞいはまし。貌を改め、齡を若くせよとにはあらず。拙きを知らば、何ぞやがて退かざる。老いぬと知らば、何ぞしづかに身を安くせざる。行愚かなりと知らば、何ぞこれを思ふことこれにあらざる。

【通解】利口さうな人も、他人の事ばかり色々とおしはかつて、自分の事をば知らないものだ。自己を知らないでゐて、他人を知るといふ、そんな道理のあらう筈はない。だから自分を知つてゐる人を、ほんとに物事を知つてゐる人といふべきだ。自分の容貌が醜くてもさうと悟らず、心の愚かなのをも悟らず、藝能の拙いのをも悟らず、身のつまらなく賤しい事をも悟らず、年の既に老いた事をも悟らず、病の犯すのをも悟らず、死の近づいてゐる事をも悟らず、我が修行する道の未熟であるのをも悟らず、凡て我が身の上の缺點を悟らないのだから、まして外の人の謗つてゐる事を悟らない。とはいへ、容貌は鏡で知れる、年は數へて見れば分る。全然自分の身の上の事を知らないといふのではないが、知つてもどうも仕樣がないのだから、つまり知らぬやうなものだといへよう。尤も、さういつたからとて何も醜い容貌を改めよとか、ふけた年を若くせよとかいふのではない。まづいと知つたら、なぜすぐそのまゝ身を引かないのか。年取つたと氣がついたら、なぜ身を安かに保たないのか。我が身の道の修行がおろそかであると知つたら、なぜ思を其の點に致して此の道に專念しないのか。

【文旨】世人は外ばかり見て、自己を見つめない。一體他を計る尺度は自己なのだから、自己が分らずに他人の事が分るといふやうな理窟はない、と論じて、世人はあれも知らぬ、これも知らぬと列擧して、扨例の筆法で、「たゞし」云々といふ挿入文を入れて、さて「すべき方」は外でもない、拙いと知つたら引込めばよい、年を取つたと知つたら安靜にしてゐればよい、佛道修行がおろそかだと知つたら眞劍にそれを考へればよい、と斯う斷じて、暗に前節の話に呼應させてゐるのである。

【語義】○かしこげなる人　利口さうな人、如何にも賢さうに見える人。○はかつて　おしはかつて、考へて。○ことわり　理、道理。○物知れる人　よく物事を知つた人、物事に對する眞の理解を有する人。○身の數ならぬ　自分の身の賤しい。身分を主としていうた語。○行ふ道の至らざる　自分の行ふ道の至り達してゐない。佛道修行についていうてゐるものと考へられる。○非　缺點。○外の譏　他人の譏、他人が自分を非難してゐること。○た

だし云々　知らぬというても全然知らぬといふ事はない、例へば容貌は鏡を見れば分る、年は數へて見れば知れる、然し知れるといふだけでさてそれをどうするといふ方案もない――それが世人の一般だ――とすれば、つまり知らぬと同じ事だ、といふのが此の一文の意味。これを「或人はそのやうにいふかも知れない」のやうに解して他人の批判の詞とする說もあるが、原文そのものから見てさうは取れない。○拙き　藝の下手なのをいふ。○何ぞこれを思ふことこれにあらざる　なぜ專念にそれを思つてゐないのか。書經の大禹謨の『念レ茲在レ茲、釋レ茲在レ茲』の文句を取つてその意味を轉用したもの。

すべて人に愛樂せられずして、衆に交るは恥なり。貌みにくゝ、心おくれにして、出で仕へ、無智にして大才にまじはり、不堪の藝をもちて堪能の座につらなり、雪の頭をいたゞきてさかりなる人にならび、況や及ばざることを望み、かなはぬことを憂へ、來らざることを待ち、人に恐れ、人に媚ぶるは、人の與ふる恥にあらず、貪る心にひかれて、自ら身をはづかしむるなり。貪ることのやまざるは、命を終ふる大事、今こゝに來れりと、たしかに知らざればなり。

【通解】　すべて人にすかれもしないで、衆人に交つてゐるのは恥辱である。容貌がみにくゝ、心が劣つてゐながら、出でて官途に仕へ、無智のくせに大才の仲に交り、拙い藝を以て堪能上手の座に列し、眞白な頭をしながら若い人と一所になり、ましてや及びもつかぬ事を望み、叶はぬ事を歎願し、來る筈もない事を待望し、人に氣兼苦勞をし、人に媚びへつらふのは、これは他人の與へる恥でなくて、貪慾の心に引かれて、自ら自分の身を辱めるのである。斯く貪る事の止まないのは、死といふ一大事が、今眼前に來てゐると、慥かに悟らないからの事だ。

【文意】　これは餘論ともいへる。凡て自身に引け目を持つたものは靜かに身を引いてゐるがよい、然るに出しやばつて恥をかく、それは自己の貪慾心に引かされて我と我が身を辱めるものだ、と斷じておいて、扨最後に、筆者の大きな主張の一つたる「命を終ふる大事」で結んでゐる。いろ〳〵考へさせられる所の多い一段である。

【語義】　○愛樂　佛語で、愛好親愛の意。○心おくれにして　心が劣つてゐて。○出で仕へ　出て官途に仕へる。○不堪の藝　堪能でない藝、上手でない藝、下手な藝。○堪能の座　上手の人々の集つてゐる席。○つらなる　列する、其の座に出る。○雪の頭　白髮頭、髮の毛が雪のやうに眞白くなつた頭。○ならび　一所になり。○及ばざること　到底出來ないこと。○かなはぬことを憂へ　到底出來ぬ事を出かしたいと願ひ望む。「憂へ」は愁訴の義から來た語と考へられる。○來らざることを待ち　いくら待つたとて所詮來る筈のない幸運僥倖を待ち。○人に恐れ　他人について色々と心を勞し恐れこはがるをいふ。○命を終ふる大事　死といふ人生の一大事。○今こゝに來れり　今現在こゝに來てゐる。死は常に身後に迫つてゐるといふ事を强くいうたのである。

第百三十五段

資季大納言入道とかや聞えける人、具氏宰相中將にあひて、「わぬしの問はれむほどのこと、何事なりとも答へ申さざらむや」といはれければ、具氏、「いかゞ侍らむ」と申されけるを、「さらばあらがひ給へ」といはれて、「はかばかしき事は、片端もまねび知り侍らねば、尋ね申すまでもなし。何となきそぞろごとの中に、おぼつかなき事をこそ問ひ奉らめ」と申されけり。「ましてこゝもとの淺きことは、何事なりともあきらめ申さむ」といはれければ、近習の人々、女房なども、

興あるあらがひなり。同じくは御前にて爭はるべし。負けたらむ人は供御をまうけらるべし」と定めて、御前にてめし合せられたりけるに、具氏、「幼くより聞きならひ侍れど、その心しらぬこと侍り。『馬のきつりやうきつにのをか、なかくぼれいりくれんどう』と申すことは、いかなる心にか侍らむ。うけたまはらむ」と申されけるに、大納言入道、はたとつまりて、「これはそゞろごとなれば、いふにも足らず」といはれけるを、「もとより深き道は知り侍らず、そゞろごとを尋ね奉らむと、定め申しつ」と申されければ、大納言入道負になりて、所課いかめしくせられけるとぞ。

【通解】　資季大納言入道とかいうた人が、具氏宰相中將に向つて、「貴公が聞かれる位の事、何だつて返答の出來ない事はない」といはれたので、具氏は「どんなものでせうかね」と申された所が、「然らば問答を仕掛けて來給へ」といはれて、具氏は、「ちやんとした本格的な事は、片端も習ひ覺えて居りませんから、御尋ね申す事も出來ません。只何となく口にするつまらぬ事の中で、どうもはつきりと分り兼ねる事を一つ御尋ね申しませう」と申された。すると資季は、「まして手近の淺薄な事などは、何なと明答仕らう」といはれたので、近侍の人々や、女官なども、「これは面白い爭ひだ。どうせやるなら陛下の御前で爭はれるのがよろしい。そして負けた方の人は御膳部をお出しなされるやうに」ととりきめて、いよ〳〵陛下の御前で勝負をする事になつた。所で具氏が、「幼少の頃から常に聞いて居りますが、その意味の分らぬ事があります。『うまのきつりやうきつにのをか、なかくぼれいりくれんどう』と申すことは、どんな意味で御座いませうか。一つ御説明を願ひたい」と申された所が、大納言入道は、ぐつとつまつて、「これは市井の間でいふでたらめだから、かれこれ辨ずるがものはない」といはれたのを、具氏は、「もとより深遠な道は存じません、下らぬことを御尋ね申さうと、御約束した事で御座つた」と申されたので、大納言入道が敗北ときまつて、科料の膳部を頗る立派になさつたといふ事だ。

【文旨】　えらい氣になつてひどい失敗をやつたといふ罪のない話。さうした事に對する諷刺や教訓といふよりも、その事自身に對する劇的興味からこんなに詳密に筆錄したものだといへよう。資季は氣輕な人で自ら博識を以て任ずると共に一面では具氏を馬鹿にしてゐたらしい。それで結局つまらぬ事でひどい目に遭つたのである。「馬のきつ」云々の謎は、具氏の當意即妙のでたらめだらうといふ説もあるが、それでは斯うした喧嘩の題材としては無理であらう。やはり其の當時人口に膾炙してゐて、而もその意味が分らなくなり、只口癖のやうに人々に言はれてゐたものであらう。この謎は、次の語義の所でいふやうに『かり』といふ事かもしれぬ。なるほどさう解く事は謎としては面白い。然しそれはこの原文とは引離して、只謎としての獨立研究として面白いといふだけである。原文のどこにもその詞がどういふ意味だといふやうな暗示も何もない。從つて兼好にそれが『かり』であると分つてゐたかどうかも明かでない。即ちこの一文は、そんな愚にもつかぬ事によつて、大威張の大納言が、自ら馬鹿にして掛つた具氏にあべこべに醜弄せられたといふ、狂言的興味を如實に描出したに過ぎぬものと見るべきである。

【語義】　○資季大納言入道　藤原資季。後嵯峨、後深草、龜山の朝に歷仕、正二位權大納言に至り、文永五年出家、正應二年八十三で薨、兼好より七十六も年長である。○具氏宰相中將　源具氏。從三位參議中將。「宰相」は參議を唐風にいふ稱。兼好の生れる八年前、建治元年四十四で薨、資季より二十五の年少。○あひて　向つて、對して。○わぬし　あなた、お前さん。「わ」は同等又は以下の人に對して親しみの意かさげすみの意かを現した詞。○答へ申さざらむや　お答へしなからうや、きつとお答へする。反語、何でも返答が出來るといふ意。○いかゞ侍らむ　どうで御座りませうか。さうばかりも參りますまいといふ意。○あらがひ給へ　爭ひ給へ。問を掛けて見給

への意。○いはれて　受身の語法と見るべきであらう、卽ち具氏が資季にいはれてである。○はかばかしき事　ちやんとした事。しつかりしたむづかいしい本格的な學問上などの事をいふ。○片端も　一端も、少しも。○まねび知らねば　習つて覺えてゐないから、習つた事はないから。○何となき　何といふ事もない、何でもない、つい一寸した。○そぞろごと　漫言。深い意味もなく只漫然と言ふ詞、たわいもない下らぬ言。○おぼつかなき事　はつきりとしない事、確かに分らぬ事。○まして　況んや。どんなむづかしい事でも分る、ましてつまらぬ事ならといふ意。○こゝもとの　手近の、卑近の。○あきらめ申さむ　明かに致しませう。明解を與へようの意。○近習　近侍、近臣。こゝは陛下のお側近く仕ふる人々をいふ。○女房　宮中の女官。○興あるあらがひ　興味のある爭ひ、面白い喧嘩。○同じくは　同じ事なら、どうせやる位なら。○御前　陛下の御前。○供御をまうけらるべし　御膳部を設けられよ。おごりなされの意。「供御」はもと陛下の御膳部をいふ詞、陛下の御前での御馳走だから斯ういうたのだらうか。○めし合はせられ　二人を召して合はせられの意。對決をやらせたといふ譯である。○その心　その意味。○馬のきつりやうきつにのをか云々　謎で、表面の言葉は、馬の吉良狐の丘、中凹入回筵道といふこと。吉良は唐の太宗の厩の名で、自然名馬を馬の吉良というたもの。狐の丘は「狐死して丘を枕にす」といふ有名な故事。中凹入は中央のくぼみ入る意。回筵道は回轉の意をあらはすといふ。そして謎として之を解けば、うまのきつを馬除つと解してまづその五字は除き去る。次にりやうきつにのをかの九字を中凹にして、卽ち中央の七字を陷落さして了ふと上下のりかが殘る。次にそれをくれんどうと一回轉する。すると「かり」(雁)となる。といふやうな說が昔の本に見えてゐる。さういふ說明がこゝに沒交渉である事は、文旨の所でいうた通りである。○いかなる心にか侍らむ　どういふ意味でありませうか。○うけたまはらむ　お聞き申しませう。御伺ひ申したいの意。○はたとつまりて　ぐつと行き詰つて、ぱつとつまつて。○いふにも足らず　いふ値價はない、かれこれ辨明するに足りない。○深き道　深遠な道、深い學問上の事。○所課　課せられた所のもの。卽ち罰としての御饗膳をいふ。○いかめしく。嚴重に、立派に。○せられける　なされたといふ敬相の語と見てよからう。

第百三十六段

醫師あつしげ、故法皇の御前にさぶらひて、供御の參りけるに、「今參りはべる供御のいろ〳〵を、文字も功能も尋ね下されて、そらに申しはべらば、本草に御覽じあはせられ侍れかし。一つも申し誤り侍らじ」と申しける時しも、六條の故內府まゐり給ひて、「有房、ついでに物習ひ侍らむ」とて、「まづしほといふ文字は、いづれの偏にか侍らむ」と問はれたりければ、「才のほど既にあらはれにたり。今はさばかりにて候へ。ゆかしきところなし」と申されけるに、とよみになりて、まかり出でにけり。

【通解】醫師のあつしげが、おかくれになつた法皇の御前に伺候してゐて、そこへ御食膳がまゐつた時、「只今御前へ上りました召上り物の品々を、文字でも功能でも御尋ね下されて、拙者がそらで申し上げましたらば、それを本草に御照し合はせ下さいませ。一つも申し違ひは仕りますまい」と申した、恰度その時、六條の故內府が出仕なされて、「拙者も、この機會に一つ學問を致しませう」とおつしやつて、「まづしほといふ字は、何偏で御座らうか」と問はれた所が、あつしげは「土偏で御座りまする」と申したので、內府は「學識の程度ももうそれだけですつかりわかつた。もうそれでたくさんだ。これ以上聞くがものはない」と申されたので、一座の大笑になつて、あつしげはすご〳〵退出したのであつた。

【文旨】 前段と同様にえらがつてしくじつた話である。あつしげの得々といふ言葉がよく出てゐる。「しほは何偏か」と聞かれれば、誰しもうつかり「土偏」といひさうな事、それだけで「才のほど既にあらはれにけり」などいふのは少し惨酷だが、これは、必ずしもしほを土偏といふやうでは駄目だといふのが話の眼目ではなくて、前段と同様、あまり威張つた口をきくのが小づら憎さに、誰しもうつかり間違ひさうな事をわざと持出して、それで鼻柱を曲げてやつたといふ罪のないいたづらと見るべきだらう。そしてその、人のわるい所が、一寸兼好の茶目氣分に共鳴したのだらう。

【語義】 ○あつしげ。 醫者の名前。和氣氏に篤成といふのがあつて、典藥頭正四位下大膳大夫、伏見天皇の永仁年中宇佐使を勤めた、その人だらうといふ。 ○故法皇。 おなくなりになつた法皇の意。後宇多院の御事といふ。 ○さぶらひて。 伺候して居て。 ○供御のまゐりけるに。 御膳部が上つた時に。 ○文字も功能も。 その食品の名前はどう書くかといふ事も、又それにはどういふ滋養上の效用があるかといふ事も。 ○尋ね下されて。 御尋ねをいたゞいて、御尋ね下さいまして。 ○そらに申しはべらば。 そらで申しましたならば。何も見ずにそらで申すから、さうしたならばの意。 ○本草。 支那の古い藥用植物學の書。 ○時しも。 ちようどその時。「しも」は强めの詞。 ○六條の故内府。 内大臣源有房。通有の子。元應元年六月内大臣となり同七月薨ず。「内府」は内大臣の唐稱。 ○有房。 自ら名をいうたのである。 ○物學び侍らむ。 學問をしよう。あなたから色々教へて貰はうといふのである。 ○しほ。 鹽。 ○土偏にて候ふ。 通用文字としての「塩」といふ字を頭に思ひ浮べて斯う答へたのである。 ○才のほど。 學才の程度、學力の程。 ○あらはれにたり。 あらはれて了つた、もうそれですつかり分かつて了つた。 ○今はさばかりにて候へ。 もはやそれだけにてあれ。「候へ」は命令の形だらう。もうそれでよろしい、何もいふに及ばぬといふ意。 ○ゆかしきところなし。 これ以上聞きたいといふ追求的興味はなくなつて了つたといふ意。 ○とよみになりて。 どつと大笑になつて。一座の人々がどつと笑ひ崩れたのをいふ。「とよみ」は鳴り轟く、轟き渡るの意。 ○まかり出でにけり。 退出した。あつしげがすごゝ〳〵退出したのをいふ。

第百三十七段

花はさかりに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれに情ふかし。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ」とも、「さはる事ありてまからで」なども書けるは、「花を見て」といへるに劣れる事かは。花の散り、月の傾くを慕ふならひは、さる事なれど、ことにかたくなる人ぞ、「この枝かの枝散りにけり。今は見所なし」などはいふめる。

【通解】 櫻花は眞盛りなのを、又月は隈なく澄み渡つたのをばかり見るべきものとは限らない。雨に對して見えない月を戀ひ慕ひ、み簾をたれてとぢ籠つてゐて春がどうなつたのやら知らずにゐるのも、やはりしみ〴〵として情趣が深い。程なく咲かうとするほどの梢、花の散りしをれた庭などの趣は、殊に見所が多いものだ。歌のはしがきにも、「花見に行つた所が、もう散つて了つてゐたので」とも書き、又、「故障があつて花見に行かないで」などとも書いてあるのは、「花を見て」というてあるのに何で劣らう。花の散り、月の傾くのを惜む世の習はしは、もとより人情さうあるべき事ではあるが、殊に教養のない物の分らぬ連中に限つて、「この枝もあの枝も散つて了つた。もはや見る價値はない」などといふやうである。

【文旨】 この一段は徒然草中でも殊に有名な長文で、兼好の趣味論の最も委曲を悉したものである。全段の結構

をいふと、

第一、まづ花と月とを出して、花を主、月を客の立場において、始め終りの趣を述べ、

第二、戀に於て始め終りの趣を敍し、

第三、更に夜明け方の月の、滿月に得られぬ情調を高調し、

第四、月花の情調は目に見る所にばかりはない、心にじつと思ひ忍ぶ所にいひ難い趣があると結論してゐる。こまでが始め終りの趣味觀の本論で、以下は餘談に渉つたものと見られる。

第五、よい人は好みがさらりとしてゐる、田舍者はあくどくていけない、というて、さうした連中の、何でも客觀的に物を見られぬ狀態を如實に描出し、

第六、更にその連中の祭見物の不作法な醜態を詳述し、そのコントラストとして都人の態度を示しておいて、

第七、賀茂祭の朝から夕への趣を述べて例の無常觀に導く。

第八、祭に關係づけて、やがて我が身の死すべき事をいひ、

第九、いよ〳〵無常本論に入つて、色々の方面から之を詳悉してゐる。

大體斯うなつてゐる。これが兼好の大きな主張で、彼の趣味を伺ふべき最も恰好の資料である。凡てに執著なく、さらりとしてゐて、靜かに內觀する所に、世の人の味ひ知らぬ情調を感得しようといふのが、彼の根本の態度であり、吾々の深く考ふべき所でもある。

【語義】○花は盛に　櫻の花は咲きの盛りに。この「に」は「なる」を中止形にして存したもので、文脈的に考察すれば、

花は盛なる

月は隈なき」をのみ見るものかは

といふ樣になるのである。○隈なき　陰のない。澄み渡つて一點の翳もなく、從つて照さぬ隈もなく皓々と澄み渡つてゐるのをいふ。○見るものかは　見るものであらうや、さうではない。「かは」は反語。語の眞意は、見ると限つたものではない、見るべきものとは限らぬといふ趣である。○雨にむかひて月を戀ひ　降る雨に對して、雨ゆゑにかくれて見えない月を戀ひ慕ひ。所謂中秋無月の趣をいふ。○たれこめて春のゆくへ知らぬ　室內に閉ぢ籠つてゐて、春がどう移つて行つたかをも知らない。「たれこめて」は簾を垂れての意、病氣か何かで家の中にとぢ籠つてゐるのをいふ。「春のゆくへ」は春がどちらの方へ行つたのかといふ事、春を擬人的にいうた詞で、いつの間に春がどうなつて了つたかといふ事である。これは古今集の『心地そこなひて、わづらひける時に、風にあたらじとて、おろしこめてのみ侍りけるあひだに、折れる櫻の散り方になりけるを見てよめる。藤原因香朝臣。たれこめて春のゆくへもしらぬ間に待ちし櫻もうつろひにけり』とある歌の詞をそのまゝ取つたものである。○なほ　やはり。○あはれに情ふかし　しんみりとして情趣が深い。○咲きぬべきほどの梢　將に花が咲かうといふ頃の半開の枝。「ぬべき」は「べき」を强めた形。○散りしをれたる庭　花が散つて淋しい趣を呈するに至つた庭。「しをれ」は花が散つて今迄と變つた淋しい趣を呈する、それを指した詞である。○見どころ　見る價値、よいと認めるべき點。○歌の詞書　歌の前に書いてある小序、前書、はしがき。○まかれりけるに　行つた所か。○はやく　もはや。○散り過ぎにければ　散つて了つてゐたので。下に「次のやうに詠んだ」といふ意の含まれてゐる事はいふ迄もない。○さはる事ありて　さしさはる事があつて、故障があつて。○とも　下の「書けるは」に掛る。○まからで　花見に行かいで斯う詠んだといふ意。○なども　などとも。○劣れる事かは　劣つてゐる事であらうや、決して劣つてをりはしない。「かは」は反語。○慕ふならひ　戀ひ慕ふならはし、惜む世の習はし。「慕ふ」はこゝでは惜むといふ心持。○さろ事なれど　尤もの事だが。自然の人情として如何にもさうあるべき事だかの意。○ことに　特に。「かたくなる」に掛る副詞。○かたくなる人　無教養で物の情合の分らぬ人。所謂「わからずや」をいふ。「よき人」の反對。

○今は。もはや、もうこれは。○などはいふめる。などとはいふやうだ。「める」は、見える、らしいの意の推量語。

よろづの事も、始め終りこそをかしけれ。男女の情も、偏にあひ見るをばいふものかは。逢はでやみにし憂さを思ひ、あだなる契をかこち、長き夜をひとり明し、遠き雲ゐを思ひやり、浅茅が宿に昔を忍ぶこそ、色このむとはいはめ。

【通解】月花のみに限らず、凡て何事も、始めと終りとが特に面白い。男女間の情趣にしても、只ひたすらに打解けて相逢ふだけが戀だとはいへない。或は逢はずに了つたなさけなさを回想し、或は固く契つた仲のはかなく變つて了つた事を歎き、秋の夜長を輾轉反側して一人明し、或は遠く離れてゐる戀人の上に思ひを馳せ、或は荒れはてて浅茅ばかりが生ひ茂つた住居に昔の戀をじつと思出す、こんなのこそほんとに戀の情趣を解するといふべきであらう。

【文旨】何事でも始め終りが面白い。「始め」はこれからならうとする所、「終り」はもうすんだ所、凡て眞の情趣は物の絶頂には無い、今に〳〵と待ち受ける所、既に過ぎ去つて回顧する所、そこに眞の面白味はある。期待の樂みと追憶の樂み、そこに俗人の味ひ知らぬ趣がある。斯ういふのが兼好の「始め終り」といふ心持の一つだらう。それから又、物は満ちてはいけない、足り整つてはいけない、缺けてゐる、物足りない、もう少しといふ所、あゝ惜しかつたといふ所、そこにほんとのうまみがある。斯ういふ事も兼好の「始め終り」といふ心持の一つだらう。

【語義】○よろづの事も　凡ての事も。前節を受けて、月や花に限らず凡て何事もといふ意。○始め終り　始めと終り。その詞の精しい内容は文旨中に述べた通り。○をかしけれ　面白い、趣がある。○男女の情　男女間の情愛、戀愛。○偏にあひ見るをばいふものかは　只もう思ふがまゝに打解けて親しく逢ふのをばいふものであらうや、決してさういうのを眞の戀とはいはぬ。戀の眞趣はそんな所にはないといふ意。「いふ」といふ動詞には「戀と」――若しくは下文の「色このむと」といふ補語の省略があるものと見てよからう。○逢はでやみにし憂さを思ひ　逢はずにそのまゝおしまひになつた心憂さを思ひ。相愛の情が成立しながら而もそれが戀として成果を見ずに了つた心の憂さを追憶するといふ意。○あだなる契をかこち　はかない契を恨み歎き。二世三世と固い契をかはしながら而もそれが末遂げずにはかなく變つて了つたといふのである。○遠き雲ゐを思ひやり　遥かの空を思ひやり。別れて遠地にゐる戀人の上を色々と思慕想像するのをいふ。「雲ゐ」は空、轉じては遠地の義にいふ詞。○浅茅が宿に昔を忍ぶ　荒れはてた住居にあつて昔の戀をじつと思ひなつかしむ。「浅茅」はまばらに生えた茅で、庭の荒れたさまにいふ常套語。○色このむ　ほんとに戀の情趣が分るといふ心持で、肉體的にいふ好色では勿論ない。

望月の隈なきを、千里の外まで眺めたるよりも、暁近くなりて待ちいでたるが、いと心ぶかう、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間のかげ、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、またなくあはれなり。椎柴白樫などの、濡れたるやうなる葉の上に、きらめきたるこそ、身にしみて、心あらむ友もがなと、都こひしう覺ゆれ。

【通解】満月の晃々として照さぬ隈もない光を、遥か遠くまで眺めてゐるのよりも、明け方近くなつてやつと迎へ得た下弦の月が、如何にも情趣ふかく、青みを帯びたやうで、或は深い山の杉の梢の間にちら〳〵と見えてゐる所とか、或はさつと時雨を催して來た雲の間に一寸かくれた趣などの方が、遥かにしんみりとした情調がある。椎の木や白樫などの、つや〳〵として水に濡れたやうな葉の上に、月影がきら〳〵と映じてゐるのは、如何にもしん

みりとした感じがして、情趣を解するやうな友がほしいなァと、都戀しい情も起る。

【文旨】 晃々たる滿月よりも、淡い曉月の方が却て情趣が深い、といふのである。この文は、……よりも……またなくあはれなりの呼應に目をつける必要がある。さうして文脈を辿つて見ると、

望月の隈なきを千里の外まで眺めたるよりも

曉近くなりて待ちいでたる（月）が　いと心ぶかう　青みたるやうにて

深き山の杉の梢に見えたる木の間の影　うちしぐれたる村雲がくれのほど　またなくあはれなり

斯うなつて、「深き山……」「うちしぐれたる……」は曉月の懸つてゐる場所なり場合なりを例示したといふ事になる。それから以下の「椎柴白樫……」も、やはり曉月の情調を以ていうてゐるのだらう。實景からいへばそれは曉月に限つた事ではなく、寧ろ滿月の方にさういふ趣は多い譯であるが、こゝは曉月の情調を高調してゐるのだから、やはりこれも曉月に伴ふ一つの情趣と見る方が自然だらう。

【語義】 ○望月。十五夜、滿月。○千里の外まで眺めたるよりも。遙か遠くまで眺めたのよりも。どこも彼所も月に照されてゐる、遠く目を放つてさうした光景を眺めるよりも、といふ意。○曉近くなりて。夜明方に近い頃になつて、もう明方といふ頃になつて。○待ちいでたるが。待つてゐる内に出た月が。有明の月をいふ。○いと心ぶかう。非常に情趣深く。しんみりとした深い情調のあるのをいふ。滿月頃の月の光は白味が勝つてゐる、末になる程白味は失せて青味が勝つて來る、が青みがかつてゐるのをいふ。○青みたるやうにて。青みを帶びたやうで。光それをいうたのである。○杉の梢に見えたる木の間のかげ。杉の枝の所に見えてゐる木の間の月影。即ち杉の木の枝の間から月がちら〳〵と漏れて見える所をいふ。○うちしぐれたる。一寸しぐれを催した。さつと時雨が降つて來たといふ意。○むら雲がくれのほど。村雲に一寸かくれた間。「村雲」は群つた雲で、空一面の雲でなく空の所々に黑く群つた雲である。從つて月は一寸雲にかくれて見えなくなり、やがて又漏れて出て來る。そのかくれた瞬間の趣がごくよいといふのである。○またなく。この上なく、並びなく、非常に。○椎柴。椎の木の叢生してゐるのをいふ。○白樫。くろがしともいふ。殼斗科、槲屬の常綠喬木で、葉の裏は灰白色を呈してゐる。○濡れたるやうなる。水に濡れたやうな。葉のつや〳〵と光つてゐるのを形容した詞。○きらめきたる。きら〳〵と輝いてゐる。月の光で照り輝いてゐるのをいふ。○身にしみて。深く感じての意。○心あらむ友もがなと。情趣を解するやうな友がほしいものだと。「心ある」は情趣風流を解するの意。「あらむ」は「ある」の婉曲敍法。「がな」は希求の趣をあらはす感興の語。○都こひしう覺ゆれ。都の空が戀しく思はれる。これは都から離れて山里に住む身としての感じをいうたもので、日頃は別に何の思もないが、斯ういふ情調に接すると、這般の情趣を相語るべき友のほしさに、しみ〴〵都が戀しくなるといふのである。

すべて、月花をば、さのみ目にて見る物かは。春は家を立ちさらでも、月の夜は閨のうちながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。

【通解】 すべて、月や花をば、さう何も只々目で見るものと限つた事であらうや。春は家から外へ出掛けないでも、月の夜は寢所の内にゐるまゝでも、其の情景を心の中に想つてゐるのが、誠に頼もしく興趣津々として面白いのだ。

【文旨】 月花の情趣は目に見る所にのみはない。心で見る——見ずに思つてゐる所に妙味があるといふのである。

【語義】 ○さのみ。さう何も只、何もさう一概に。「のみ」に強い趣がある。○立ちさらでも。立ち出でないでも、そのまゝ家の内に居ても。下文の「思へるこそ」に掛る。○閨のうちながらも。寢室の内にゐるまゝでも。寢て居

るまゝで月の事を考へてゐるといふのである。○思へるこそ　心の中で思つてゐるのこそ。○たのもしう　心に頼みになるといふ思想で、こゝはそれからそれへと聯想が湧いて、興趣津々として盡きる所がないといふ趣と考へられる。

よき人は、ひとへにすけるさまにも見えず、興ずるさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ。花のもとには、ねぢより、立ちより、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、はては、大きなる枝、心なく折り取りぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおりたちて跡つけなど、よろづの物、よそながら見る事なし。

【通解】身分教養のある上品な人は、一概に風流がるといふ樣子にも見えず、物をもてはやす有樣もごくあつさりしてゐる。片田舎の人に限つて、何事もしつこく興がりもてはやすものだ。花の下には人をおし分けて、ぐん〳〵とねぢより、立ちより、わき目もふらず見守つて、酒を飲み、連歌をやつて、しまひのはてには、大きな枝を心なく折り取つて了ふ。泉には手足をつッこんでぢやぶ〳〵やつたり、雪にはわざ〳〵降りて行つて足跡をつけたりなど、どんな物をでも、それとなくよそながら見るといふ事がない。

【文旨】さらりとして深入りせず、物を客觀的に見て樂む——これが兼好の大きな趣味觀の一つである。徒然草にいふ所の「よき人」はさういふ心の持主を指してゐるのである。之に反して田舎者は何事もしつこい、かたくなで物の情趣のデリケートな所を味ふ事が出來ぬ。その意味に於て兼好は田舎者をひどく嫌ふ。「花のもと」に、「泉」に、「雪」に、如何にもさうした田舎人の面目が躍如としてゐる。

【語義】○よき人　身分が高く、教養があつて、物の分つた、上品な人。○ひとへに　只一途に、夢中になつて。「すける」に掛る副詞。○すける　すき好める、いやに凝つて風流がる。○興ずる樣も　面白がる有樣も、もてはやす樣子も。○なほざりなり　疎略である、あつさりとしてゐる。○片田舎　邊鄙な田舎。○色こく　しつこく、濃厚に。○よろづはもて興ずれ　萬事をばもてはやし樂み興ずる。「は」は「をば」の意の提示客語。○ねぢより　ぐん〳〵とそばへ寄り。人を押し分けからだをねぢて、ぐん〳〵と寄つて行く趣があり〳〵と見えるやうな言葉である。○あからめもせず　わき目もふらず、わき見もせず。「あから」は「あかる」(ワカル、離ル)から來た語。○まもりて　見守つて、見つめて。○心なく　無考に、理解も趣味もなく。○折り取りぬ　折り取つて了ふ。この場合の「ぬ」は一般敍法を強めた修辭で、「た」といふ意味は持つてゐない。○手足さしひたして　手足を入れて、手足を漬けて。納涼などの際に於ける田舎者のしつこい態度である。○おりたちて　おりて行つて。おりてその上に立つといふ意。雪見の際の趣である。○跡つけなど　足跡をつけたりなど。○よそながら見る事なし　よそにあるまゝで見る事はない。それとなく大やうに物を見る事なく、一々立入つて見なくては承知しないといふ意。

さやうの人の、祭見しさま、いとめづらかなりき。「見ごといとおそし。そのほどは桟敷不用なり」とて、奥なる屋にて、酒飲み、物食ひ、囲碁雙六など遊びて、桟敷には人をおきたれば、「わたり候ふ」といふ時に、おの〳〵肝つぶるゝやうに、爭ひ走り上りて、落ちぬべきまで簾張りいでて、押しあひつゝ、一事も見洩さじとまもりて、とありかゝりと、物毎にいひて、わたり過ぎぬれば、「また渡らむまで」といひて下りぬ。唯物をのみ見むとするなるべし。都の人のゆゝしげなるは、眠りていとも見ず。若くするゑ〳〵なるは、宮仕にたちね、人の後にさぶらふは、さまあしくも及

びかゝらず、わりなく見むとする人もなし。

【通解】　さうした連中の賀茂祭を見物した様子が、又どうも實に珍妙だつた。「お通りがばかに遲い。その内は棧敷にゐてもむだだ」というて、奥の家で、酒を飲み、物を食ひ、碁や雙六などをやつて、棧敷には見張りの人がおいてあるので、それが「今行列がお通りになります」といふ時、肝をつぶしたやうにあわてくさつて、爭ひ走り上つて、丸で落ちさうに簾を押し出して、押しあひへしあひ、一事も見落すまいと見守つて、あゝだ、かうだと、一一に批評をし、行列が通つて了ふと、「又通るまで」というて棧敷からおりて行つて了ふ。祭の氣分も情調も何もない、唯々物だけ見ようとするのだらう。之に反して、都の人の如何にも身分ありげな方となると、目をつぶつてゐてたいして見もしない。若く身分の低い下々の人々は、それ〴〵仕へる主人のために起つたり居たりして御用を辨じ、人の後に侍してゐる者は、ぶざまに前へのしかゝるといふやうな事はしない、凡て田舍者のやうにたつて見ようとする人もない。

【文旨】　田舍者の賀茂祭見物――只々祭の行列だけを見ようとする珍妙奇拔な態度を如實に描寫し、更に之がコントラストとして都會人士の悠々迫らざる態度をやゝ誇張と思へるほどに書いてゐる。前節にはよき人の對照として、一般的に無趣味な田舍人の態度を描寫し、この節はそれを承けて、「さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなりき」というて、或特殊の場合に起つた事實のやうに書いてゐる。そこに文の變化があつて面白い。そしてこの節が、祭そのものの情調に筆を轉じ、更に無常觀に轉じて行く、その思想轉換の楔子になつてゐるのである。

【語義】　○さやうの人　そのやうな人、そのやうな無趣味な田舍者。○祭　賀茂の祭。四月の中の酉の日に行はれる葵祭。○めづらかなりき　珍しかつた。頗る珍妙だつたと、嘲る心持でいうた語。○見ごと　見る事、見るべき物。こゝでは祭の行列を指す。○そのほど　その間、祭の行列の通る迄の間。○棧敷　行列見物の爲めに設けた棧敷。○不用なり　無駄だ。棧敷にゐても何にもならぬの意。○奥なる屋　奥の家。棧敷の仕掛けてある家の座敷をいふ。○人をおきたれば　人がおいてあるから。行列の通るのを奥へ知らせる爲めに棧敷に見張りの人がおいてあるといふわけ。○わたり候ふ　おわたりになります。只今行列が通りますといふ意。○肝つぶるゝやうに　驚きあわてたさまを形容した詞。○落ちぬべきまで　落ちさうにまで。前へ〳〵と押し出して棧敷から落ちさうになるのをいふ。○簾張りいでて　棧敷に掛けてある簾を前へ押し出して。前へ〳〵と人々が押し出すので自然さういふ事になるのである。○まもりて　見守つて、見つめて。○とありかゝり　あゝある、斯うある。あゝだ、斯うだ。○物毎にいひて　一々にいつて、行列の一つ一つについて一々批評して。○わたり過ぎぬれば　行列が通つて了ふと。○また渡らむまで　また次の行列の通るまで。又この次まで奥へ行かうの意。○下りぬ　棧敷をおりて奥へ行く。○物をのみ見むとするなるべし　物をだけ見ようとするのだらう。祭の氣分情調など味ふ事は丸で念頭になくて、只々祭の行列や何かをばかり見ようとするのだらう。○ゆゝしげなるは　如何にも立派な身分でありさうに見える人は。○眠りて　目をねぶつて、目をつぶつてゐて。○いとも見ず　さうたいして見ない、そんなに見ようともしない。この「いとも」は打消を伴つた動詞に掛る副詞で、そんなに、大して、さうひどくの意。○すゑ〴〵なるは　末々の者は、下々の召使の者は。○宮仕にたちゐ　主人に奉仕する爲めに立つたりゐたりし、仕へる主人の用を辨じて立ち働き。○人の後にさぶらふは　人の後に侍する者は。お伴の者などをいふ。○さまあしくも　ざまわるくも、見苦しくも。○及びかゝらず　前の方へのしかゝらない。「及びかゝる」は後方から腰を延して前の方におしかゝるのをいふ。○わりなく　たつて、強ひて、無理に、無暗に。

何となく癸かけ渡して、なまめかしきに、明けはなれぬほど、忍びて寄する車どものゆかしきを、それか、かれかなど、思ひよすれば、牛飼下部などの見知れるもあり。をかしくも、きらき

らしくも、さま〳〵に行きかふ、見るもつれ〳〵ならず。暮るゝ程には、立てならべつる車ども、所なくなみゐつる人も、いづかたへ行きつらむ、程なく稀になりて、車どものらうがはしさもすみぬれば、簾・疊を取り拂ひ、目の前にさびしげになり行くこそ、世のためしも思ひ知られて、あはれなれ。大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ。

【通解】　ずうーッと斯う一體に葵を掛け渡して、如何にも優雅なのに、そこへまだ夜の明け離れぬ内に、微行で棧敷の所へ寄せる色々な車のゆかしく主は誰かと知りたく思はれるのを、あの人かナ抔と、色々推測して居ると、その中には見知り越しの牛飼や下部などのゐるのもある。さうした物見車の、或は面白く趣好をこらしたの、或はきらびやかに美々しいのと、色々に行きちがふ、それを見てゐると氣が紛れて更に徒然を感じない。所が、祭もすんで日の暮れる頃には、立て並べてあつた多くの車も、一杯に並んでゐた澤山の人も、どこへ行つたものやら、程なくまばらになつて、多くの車の混雜もすんで了ふと、棧敷の簾や莫蓙も取り拂ひ、目前に如何にも淋しい光景になつて行く、それを見ては、世の榮枯盛衰のためしも思ひ知られて、實に感慨が深い。斯うした大通りのさまを見たのこそ、ほんに祭を見たといふものだ。

【文旨】　物見車を中心にして祭の情景を描寫し、一轉して、祭りの終つた夕方に於ける淋しさを敍して、例の無常觀へ導ぐべき素地を作つてゐる。「大路見たるこそ祭見たるにてはあれ」とは、實に兼好の獨壇的境地だといへよう。世の人は祭そのもの――みこし、行列、おねり、といふやうなもので象徴された祭を祭として見物してゐる。兼好の趣味はそんな所にはない。祭を見ようとする人を見、見る人の去つた跡の寂しさを味ふ。そしてそこにほんとの祭の情調を感得してゐるのである。

【語義】　○何となく　葵がずうーッと掛け渡してある、それを見た時のふわりとした感じをそのまゝ「何となく」といつたのであつて、文法的にいへば「かけ渡し」に掛る副詞である。○葵かけ渡して　葵をずうーッと一面に掛けて。賀茂の祭には簾や柱などに葵を掛ける、それで葵祭ともいふのである。○なまめかしきに　優雅であるのに。「に」は反戻ではない、こまかくいへば、なまめかしい、さうした光景の所へ、といふ思想。○明けはなれぬほど　夜のまだ明け離れない内、朝暗い内から。○忍びて寄する車どものゆかしきを　人に知られぬやうに微行で棧敷へ寄せる色々な物見車がゆかしくてその主の知りたいのを。○それかかれか　その人か、彼の人か。はてあの車はあの人かナ、それともあの人かナ抔と推量して見るといふ意。○思ひよすれば　思ひよせると、推量して見ると。○牛飼・下部などの見知れるもあり　牛飼や下部などの見知つてゐるのもある。牛飼や下部をこちらで知つてゐる、即ち、見知り越しの牛飼や下部もゐて、それによつて其の主人公の推測されるものもあるといふ意。○をかしくも　或は趣あるさまで。風流な造りの車をいふ。○きら〳〵しくも　或はきらびやかに飾り立てて。美々しい造りの車をいふ。○さま〳〵に行きかふ　色々と行き交ふ。色々の狀態を呈して、あちらに行きこちらに行き、車が行きちがふ。「行きかふ」は終止でなく連體假止の形で、「行きちがつてゐるそれを」といふ心持で下に接してゐる。○見るもつれ〳〵ならず　見るも徒然を覺えない。見る目に變化があつて面白く氣が紛れて更に退屈しないといふ意。○暮るゝ程には　日の暮れる頃には。○所なく　すきまなく、一杯に。○なみゐつる　並んでゐた。○らうがはしさ　亂らがはしさ、亂雜さ。歸りを急ぐ車の雜沓をいふ。「亂がはし」の音轉。○簾・疊　棧敷に掛けてあつた簾、敷いてあつた莫蓙。○世のためし　世間の例、世の中の榮枯盛衰の事例。○あはれなれ　感慨が深い。○大路見たる芝々都の大路のさうした有樣を見たのこそ、ほんとに祭を見たのである。祭の眞の情調は大路のさまにあるといふ心持。

かの棧敷の前をこゝら行きかふ人の、見知れるが數多あるにて知りぬ。世の人數もさのみは多か

らぬにこそ。この人みなうせなむ後、我が身死ぬべきに定りたりとも、ほどなく待ちつけぬべし。

【通解】 かの棧敷の前を澤山行き來する人の中に、見知り越しの人が大勢あるのでわかる。世間の人數もそんなに多くはないのだ。假にその人が皆死んだ後、自分が死ぬべきものと定つてゐるとした所で、間もなくその死に逢著するに違ひない。

【文旨】 極めて自然に祭から無常觀に這入つてゐる。澤山の人が棧敷の前をぞろ〳〵通る、その内には幾らも見知り越しの人がゐる、して見れば世間の人は多いやうで案外少いのだ。その人が皆死んだ後、自分が死ぬと極つてゐるものとしても、ぢきに死に當面すべき時はやつて來るといふのである。

【語義】 ○こゝら　數多、澤山。○人の　人の中に。○知りぬ　分つた。次の事實――「世の人數もさのみ多からぬこそ」といふ事が、上の事實によつて分つたといふ思想。但、口語としては「分る」と現在的に取扱ふ方が自然だらう。○さのみは多からぬにこそ　そんなには多くないのだ、思つた程そんなに多くはない。非常に多いやうだがその實さうひどく多くはないといふ思想。○うせなむ後　死んで了つた後。○我が身死ぬべきに定りたりとも　自分の身が死ぬべきものにきまつてゐるとしても。「とも」の假定形によく留意せよ。○待ちつけぬべし　待つてゐてその時に逢ふに違ひない。死を待ち合はせる、即ち死に逢著して死んで了ふ、といふ思想。

大きなるうつはものに水を入れて、細き孔をあけたらむに、滴ること少しと云ふとも、怠る間なく漏りゆかば、やがて盡きぬべし。都の中に多き人、死なざる日はあるべからず。一日に一人二人のみならむや。鳥部野、舟岡、さらぬ野山にも、送る數おほかる日はあれど、送らぬ日はなし。

されば棺をひさぐもの、作りてうち置くほどなし。若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり。今日まで遁れ來にけるは、ありがたき不思議なり。しばしも世をのどかに思ひなむや。まゝ子立といふものを、雙六の石にてつくりて、立て竝べたる程は、取られむ事、いづれの石とも知らねども、數へ當てて、ひとつを取りぬれば、その外は遁れぬと見れど、また〳〵かぞふれば、かれこれまぬき行くほどに、いづれも遁れざるに似たり。兵の軍にいづるは、死に近きことを知りて、家を忘れ、身をも忘る。世をそむける草の庵には、しづかに水石をもてあそびて、これをよそに聞くと思へるはいとはかなし。しづかなる山の奥、無常の敵きほひ來らざらむや。その死に臨めること、軍の陣に進めるにおなじ。

【通解】 大きな器物に水を入れて、細い穴をあけたとしたら、滴ることは少しでも、休むひまもなく、漏れて行つたら、やがて無くなつて了はう。都の中に澤山人がゐるが、人の死なぬといふ日のあらう筈はない。それも一日に一人や二人の少數ではない。鳥部野と小舟岡とか其の他の野山にも、死人を送る數の多くある日はあつても、一人も送らぬといふ日はない。だから、棺を賣る者は、拵へておいとく暇もなく賣れて了ふ。若いにもよらず、強いにもよらず、思ひも掛けずやつて來るのは死期である。今日までその死を遁れて生きながらへて來たのは、實に得難い奇蹟である。暫くたりとも世の中をのんきに考へてはゐられない。繼子立といふものを雙六の石で作つて、それを竝べた所では、取られるのはどの石とも分らぬが、數へ當てて一つを取ると、その外の石は取られる事を遁れたやうに見える、所が又々數へると、あれこれと段々とまびいて行くうちに、結局どれもこれも皆取られて了ふ、

人の死は正にそれと似てゐる。武士の戰陣に出る者は、死に近い事を知つて、家をも忘れ、身をも忘れる。世を遁れた草の庵では、靜かに庭園の泉石の幽景を樂んで、それを他所に聞いて、戰死などといふ事を耳にしても、自分に緣のない他所事のやうに思つてゐるが、それは誠にはかなくなさけない話だ。靜かな山奥だからとて、どうして無常の敵が勢こんで攻めて來なからう。その死に臨んでゐる事は、戰陣に進んでゐるのと同じ事だ。

【文旨】　大きな器物に水を入れて小さな穴をあけて置く。繼子立を作つて段々石を間引いて行く。何れも人の死の譬喩として端的なものである。殊に當時の人が遊戯としてよくやつたらう所の繼子立を取つて、それを說明して「いづれも遁れざるに似たり」と書いたあたり、慥かに譬喩の妙を極めた筆致である。そして最後に、戰陣に臨む勇士は必死を期して生命を忘れてゐる。世を避けた隱遁者は靜かに幽居の趣を愛して、それをよそに聞いてゐるが、而も死に當面してゐる點からいへば、戰陣に臨む者と何の變りもない、と力强く結んでゐる。だから後生を念じ佛道を修めよといふ例のお說教を附け加へぬ所もよい。そしてこの戰士と隱遁者との心情描寫は、筆者の時代、筆者の生活を背景にして考へる時、殊に活きた文、活きた感想として吾々に響いて來ると思ふ。

【語義】　○あけたらむに　あけたとしたら、あけたと假定するに。○少しといふとも　少くても。「云ふとも」は漢文の「雖」を假定の形に直譯した言葉と考へればよい。○やがて　その內に、間もなく。「直ちに」といふ原義よりはやゝ輕い例。○多き人　澤山の人。人は澤山ゐるが其の中での意。○あるべからず　ある筈はない。○鳥部野　舟岡　共に葬送する所。○さらぬ　さうでない、その外の。○おほかる　多くある。○ひさぐ　賣る。○作りてうち置くほどなし　作つておいておく間はない、作るそばからすぐに賣れる。○若きにもよらず云々　年が若いからとて、身體が强いからとて、そんな事は一向あてにならぬ、いつ何時死がやつて來るか分らぬ、死ぬべき時節といふものは全くはかり知られぬものだ。○遁れ來にけるは　死を遁れて來たのは、無事に生きながらへて來たのは。○ありがたき不思議　得がたい不思議な事だ。思ひも掛けぬ奇蹟的な事だといふ思想。○しばしも世をのどかに思ひなむや　しばらくたりとも世をゆつたりと考へようや、しばらくたりとも、ゆつたりとしたのんきな氣分で生きてはゐられない。○まゝ子立　繼子立の意。雙六の石を並べてやる一種の遊戯。黑白の石各十五を圖のやうに並べて、先づイの石から左へ數へて行つて、十番目に當るロの石を取る。次にハから數へて行つて十番目の石を取る。さうして十づつ數へては十番目の石を取ると、結局白の石はニだけ一つ殘る事になる。今度はニから右の方へ向けて、殘つてゐる黑石を十づつ數へて順々に十番目に當る石を取つて行くと、結局黑の石は皆取られて了つて、最後にニだけ殘るのである。塵劫記といふ昔の數學書にある事で、先腹十五人、當腹十五人の子があつて、段段數へて二十九人迄除いて、殘る一人に跡目を讓らうといふ時、まゝ母が斯ういふ立て方をして結局は先妻の子が一人殘つたといふ話である。それで「まゝ子立」といふ。○遁れぬ　遁れた。打消の「ぬ」ではない。○まぬき行く　まびいて行く、並んでゐる物の中から飛び飛びに間を拔いて行く。○似たり　人の死が似てゐるといふ思想。○兵　武士、兵士。○死に近き　死といふものに近い、死に瀕してゐる。やがて戰死すべき身である意。○世をそむける草の庵には　世を背いた草庵の內に於ては。世を遁れて隱者の生活を送つてゐる者はの意。○水石をもてあそびて　泉水や庭石を弄んで。庭園の趣を眺めて靜かに隱居住ひを樂むをいふ。○これをよそに聞く　これをよそ事に聞く。戰死などいふ事を耳にしてもそれは全くのよそ事で自分の身には何の交涉もないと思ふといふ意。○いとはかなし　誠にはかない。その心掛かはかなくなさけないといふ意。○無常の敵　無常といふ敵。戰場に於ける敵に喩へて、無常を擬した修辭、死を指す事いふ迄もない。○きほひ　きそひ。勢込んでの意。○その死に臨めること　それが死に臨んでゐること、さういふ所へも死の迫つてゐる事は。さうして靜かに隱棲してゐる身もやはり死に當面してゐる事はの意。

第百三十八段

祭過ぎぬれば、後の葵不用なりとて、ある人の御簾なるを皆取らせられ侍りしが、色もなくおぼえ侍りしを、よき人のしたまふ事なれば、さるべきにやと思ひしかど、周防内侍が、

かくれどもかひなき物は、もろともにみすのあふひの枯葉なりけり。

と詠めるも、母屋の御簾に葵のかゝりたる枯葉を詠めるよし、家の集に書けり。ふるき歌の詞書に、「枯れたる葵にさしてつかはしける」とも侍り。枕草子にも、「こしかた戀しきもの、かれたる葵」と書けるこそ、いみじくなつかしう思ひよりたれ。鴨長明が四季物語にも、「玉だれに後の葵はとまりけり」とぞ書ける。おのれと枯るゝだにこそあるを、名殘なくいかゞ取り捨つべき。

【通解】賀茂の祭がすんで了ふと、祭の後の葵はもういらないというて、或人が御簾に掛つてゐる葵をすつかり取り捨てさせられなされましたのが、如何にも風情のない仕打だと思はれましたが、然し立派な方のなされる事だから、然るべき據り所のある事なのかとも思つたのであつたが、然し、周防の内侍が、

かくれども……いくら掛けておいてもその甲斐のないものは、あの方と共々に見る事の叶はぬみすの葵の枯葉でありますワ。――「あふひ」といふ名にちなんで、戀人と逢つて一緒に見る日を樂みに、双葉の葵をみすに掛けて置きましたのに、丸であの方がかれ〴〵に遠ざかつて了ふ事を暗示するかのやうなこの葵の枯葉を獨り斯うして淋しく眺めてゐるのですもの、「あふひ」といふその名もほんとに何の甲斐もない事でありますワ。と詠じたのも、母屋の御簾に掛つてゐる葵の枯葉を詠んだといふ事が、その家集に書いてある。古い歌の前書にも「枯れた葵につけて遣はした歌」ともあります。枕草子にも「過ぎた昔の戀しいもの、枯れた葵」と書いてゐるのは、實にどうもなつかしい思ひよりである。鴨長明の四季物語にも、「玉だれに後の葵はとまりけり」と書いてゐる。ひとりでに枯れるのでさへ惜しいものを、どうしてすつかりむざ〴〵取り捨ててよからう。

【文旨】前段に祭の事を書いた、それから思ひついて、祭の後の葵は取り捨てないでそのまゝ簾に掛けておくものだといふ考證――それも情味本位の考證をやつてゐる。或よい人が、祭の後の葵は不用だといふので、御簾に掛つてゐたのを取り捨てさせた、それを見て如何にも色ない仕打とは思つたが、然しあゝした立派な方のする事だから、或はそれが本來かとも思つた、然し自分の記憶を辿つて見ると、枯れた葵の例證はいくらもある、やはり取捨てるのは色ない仕打だと、斯う筋を運んで、「おのれと枯るゝだにこそあるを、名殘なくいかゞ取り捨つべき」と強く結んだ譯である。

【語義】○祭　賀茂の祭。○過ぎぬれば　過ぎて了ふと、すむと。○後の葵　祭後の葵。祭のすんだ後まで葵をそのまゝ掛けておくので、それを「後の葵」といひ習はしたのである。○不用なり　用がない、いらない、むだだといふ。○よき人　身分が高く教養のある人。○さるべきにや　然かあるべき根據があるのか、さうするのが至當であるのか、やはりさうすべきものであるのか。○周防内侍　後拾遺集以後の勅撰集に歌が澤山載つてゐる女歌人。○かくれども　「かくれども」は葵を懸けると思をかけるとの言ひ懸け、「みす」は御簾と見ずとの言ひ懸け、「あふひ」は葵と逢ふ日との言ひ懸け、「かれは」枯葉に離れを掛けたのである。○母屋　寢殿（正殿）の中央で、棟の下に當る室。○家の集　周防内侍の家集。「家の集」は或歌人の一個人の歌を集めたもの。○枯れたる葵にさして　

かはしける　枯れた葵にさしてやつた、枯れた葵に歌を書いた短册か何かをつけてやつたその歌、といふ意味である。○こしかた　戀しきもの　かれたる葵　『過ぎた昔のこひしいもの、枯れた葵。それを見るにつけてしみ〴〵過きた昔の戀しくなるものは枯れた葵だの意。枕草子には『すぎにしかたのこひしきもの。枯れたる葵。雛あそびの調度』云々と色々列擧してゐる。○いみじくなつかしう思ひよりたれ　非常になつかしく思ひよつたものだ。清少納言が、來し方の戀しいものをいふにつけて、枯れた葵を其の一つに擧げたのは實にどうもなつかしい思ひよりだ、といふ心持の表現。○鴨長明　方丈記の著者として知られた人。○四季物語　鴨長明が大原山に遁世した後、一月より十二月に至る間、毎月の景物人事の推移につけて、昔見し宮中の年中行事を想起し、それを筆錄すると共に、それに關聯した故事や感想などを記した和文の書である。○玉だれに後の葵はとまりけり　四季物語第四（四月）の條に見えてゐる歌で、下の句は『かれても通へ人の面影』である。「玉だれ」は簾の美稱。「かれても」は枯れてもに離れてもを掛けたもので、歌の意味は、斯うして簾には祭の後の葵が今なほ止まつてゐて、葉は枯れてもありし日を忍ばしめる、その葉の枯れた通り、あなたは既に離れ〴〵になつて了はれた、それにしてもせめてその面影だけはこちらに通つて下さい、といふのである。即ち葵のかれたのに事よせて、緣は切れても、全然こちらを忘れて外の女に親みなどせず、せめて心ではこちらを思つてゐて下さいといふのである。四季物語の文によれば、自分を捨てて他の上宮仕への女房と親んでゐる小野の大將の仕打を恨んだ和泉式部の歌と考へられる。○おのれと枯るゝだにこそあるを　ひとりでに枯れるのでも惜しいものを。「おのれと」は自分と、自然に、ひとりでにの意。「こそあるを」は「こそいとをしくあるを」の略。「自然と枯れるだけでも澤山だのに」と解する說もあるが、どうも「惜しい」といふ心持の省略と考へたい文調である。○名殘なく　殘らず、すつかり。○いかゞ　どうして、いかで。反語。

御帳にかゝれる藥玉も、九月九日、菊にとりかへらるゝといへば、菖蒲は菊の折までもあるべきにこそ。枇杷皇太后宮かくれ給ひて後、ふるき御帳のうちに、菖蒲、藥玉などの枯れたるが侍りけるを見て、「をりならぬねをなほぞかけつる」と辨ののとのいへる返事に、「あやめの草はありながら」とも、江侍從が詠みしぞかし。

【通解】　御帳にかゝつてゐる藥玉も、九月九日に、菊にとりかへられるといふ事だから、五月五日の菖蒲は菊の折までもあるべきものなのだ。枇杷の皇太后の宮が御かくれになつて後、古い御帳の內に、菖蒲や藥玉などの枯れたのがあつたのを見て、「折ならぬねを猶ぞかけつる」と、辨の乳母のいうた返事に、「あやめの草はありながら」とも、江侍從が詠んだ事である。

【文旨】　前段を確める爲めに、更に五月五日の菖蒲や藥玉は九月九日の菊の時までそのまゝ置くものだといふ事を例證して、後の葵の取り捨つまじき意味を更に强めたのである。

【語義】　○御帳　おんとばり。「帳」はとばり。高貴の御方の御座のとばりを敬つて「御帳」といふ。○藥玉　邪氣を拂ふといふ意味で五月五日の菖蒲と共にかけたもの。種々の香料を玉にし、色々の造花を結びつけ、五色の絲でかゞつて、その絲を長く垂れる。○九月九日　重陽の節句をいふ。○枇杷皇太后宮　御堂關白道長の女妍子。三條天皇の中宮。萬壽四年九月三十四歲で崩御。○ふるき御帳　枇杷皇太后の居られた御部屋のとばり。○をりならぬねを　千載集哀傷の部に、『枇杷殿の皇太后宮わづらひ給ひける時、所をかへて試みむとて外にわたり給へりけるを、かくれたまひてのち、陽明門院一品親王（內親王の誤）と申しける、枇杷殿に歸り給へりけるに、ふるき御帳のうちに菖蒲藥玉などの枯れたるが侍りけるを見てよみ侍りける。辨乳母、あやめ草淚の玉にぬきかへてをりならぬねをなほぞかけつる』とあるのをいふ。歌の意味は、あやめ草を藥玉に通して、既に時節はづれになつた其の根が今

もやはり掛けてある、それを見て、藥玉を涙の玉に通しかへて、只々音に泣くのみである。「ぬきかへて」は貫きかへて、即ち緒に通しかへての意。「折ならぬね」は、その時節ならぬ根、即ち五月五日のその節でない折のあやめの根。そして「ね」に菖蒲の根と泣く音の音とを掛けたのである。○辨のめのと　三條天皇の皇女陽明門院禎子內親王の御乳母。「めのと」は乳母、子供のかしづき。○あやめの草はありながら　前に引いた千載集の辨乳母の歌のすぐ次に『かへし』として、『玉ぬきしあやめの草はありながら、よどのは荒れむものとやは見し』とある。歌の意味は、玉を通した、菖蒲の草はそのまゝありながら、その主はおかくれになつて、かくも夜殿の荒れようとは、實に思ひも掛けない事であつた。「よどの」は、皇太后の御寢室の夜殿に、菖蒲の名所の淀野を掛けたのである。○江侍從　赤染衞門の女。父が侍從大江匡衡であつたから、「江侍從」といふた。

第百三十九段

家にありたき木は、松、櫻。松は五葉もよし。花はひとへなるよし。八重櫻は奈良の都にのみありけるを、このごろぞ世に多くなり侍るなる。吉野の花、左近の櫻、皆ひとへにてこそあれ。八重櫻はことやうのものなり。いとこちたく、ねぢけたり。植ゑずともありなむ。遲櫻またすさまじ。蟲のつきたるも、むつかし。梅はしろき、うす紅梅、一重なるが疾く咲きたるも、かさなりたる紅梅のにほひめでたきも、みなをかし。おそき梅は、櫻に咲きあひて、おぼえおとり、けおされて、枝に萎みつきたる、こゝろうし。「一重なるがまづ咲きて散りたるは、心とくをかし」とて、京極入道中納言は、なほ一重梅をなむ軒近く植ゑられたりける。京極の屋の南むきに、今も二本はべるめり。柳、またをかし。卯月ばかりの若楓、すべてよろづの花紅葉にも優りてめでたきものなり。橘、桂、いづれも木はものふり、大きなるよし。

【通解】家の內に植ゑて置きたい木は、松に櫻だ。松は五葉の松もよい。櫻の花は一重なのがよい。八重櫻はもと奈良の都にだけあつたものだのに、それが段々と廣まつて、此のごろ到る所に澤山あるやうになつたのです。一體吉野の櫻でも左近の櫻でも、皆一重であるのだ。八重櫻は一種變てこなものだ。いやにしつこくて、下卑てゐる。そんなものは植ゑなくもよからう。遲櫻、これが亦時はづれで興のないものだ。毛蟲のついたのも氣味が惡い。梅は白いのや、薄紅梅や、それから一重のが早く咲いたのも、八重の紅梅の花の色つやの美しいのも、皆面白い。遲い梅は、櫻とかち合つて、その爲めに世人から餘りちやほやされず、櫻に壓倒されて、しよんぼりと枝に萎みついたやうに咲いてゐる、それは誠になさけない。そんな譯で、「一重の梅が他に先だつて咲いて、外の花の咲く頃にはもう散つてゐるのは、如何にも氣早で面白い」というて、京極入道中納言は、やはり一重の梅をば軒近く植ゑられたのであつた。京極の御屋敷の南側に、今でもそれが二本あるやうだ。柳が、また面白い。それから四月の頃の若楓は、おしなべて世の樣々の花や紅葉にも優つていゝものである。橘、桂、何れも幹は時代がついて、大きなのがよい。

【文旨】この一段は、全く枕草子の筆致を眞似たもので、枕草子の方では、『木は』『木の花は』『草は』『草の花は』と四段に分れてゐるのを一括して一段に書いたのである。この一節は「木」に關する記事である。文としての趣は所詮枕草子には及ばぬ。特に評論一方といふ調子で書いてゐるので、徒然草自體としてもあまり出來榮えのよい方とはいへない。それにしても、八重などの「ことやう」に「こちたくねぢけ」たものを厭つて一重のさつぱりしたものを好むといふ筆者の趣味は遺憾なく發揮されてゐる。

【語義】　○家にありきた木　家にありたい木、家の内に植ゑて置きたい木。○松は五葉もよし　普通の松も勿論よいが、五葉の松も亦よいとの意。○八重櫻云々　奈良の都に八重櫻を植ゑたのは聖武天皇の時といふ。それを始めて京都の宮中へ移し植ゑたのは一條帝の時である。詞花集に『一條院の御時、奈良の八重櫻を人の奉りけるを、その折御前に侍りければ、その花を題に歌よめとおほせごとありければ。伊勢大輔。いにしへの奈良の都の八重櫻けふ九重ににほひぬるかな』○このごろぞ云々　昔は奈良の都に限つてゐたもので、こんなに世間に多くなつたのは此の頃の事だといふ意。「世に」はこゝは非常にといふ副詞でなく、世間にの意と見てよからう。○左近の櫻　内裏の紫宸殿の南庭の御階の前の左に櫻があり、右に橘があつて、それを左近の櫻（儀式の時、この方に左近衛の陣を引くよりいふ）、右近の橘（朝儀の時、右近衛の官がこの樹の側に陣列するよりいふ）といふ。○ことやう　異樣、普通と變つた、變てこな、妙に變つた。○こちたく　事々しく、いやにしつこく。○ねぢけたり　すなほでない、さらりとしてゐない、下卑てゐる。○植ゑずともありなむ　植ゑないでもよからう。○遲櫻　普通の櫻よりも後れて遲く咲く櫻。○すさまじ　時はづれで興がない、折はづれで面白くない。○蟲のつきたるもむつかし　遲櫻には よく毛虫がつく、それもむさぐるしく氣味が惡いとの意。○梅はしろき　並立的に「をかし」に掛る。○一重なるが疾く咲きたるも　花の一重なのが早く咲いたのも。下に「かさなりたる紅梅」とある趣からいへば、「一重なるが」は「一重なる白梅の」といふ心持と見てよからう。○にほひめでたきも　花の色つやの結構なのも。「にほひ」はこゝは香でなく、色彩の美をいうたのである。○咲きあひて　一緒に咲いて、同時に咲いて。○おぼえおとり　世の人から寵愛せられる事が劣り。○けおされて　壓倒されて。「け」は接頭語で櫻に壓倒されるのをいふ。○萎みつきたる　しぼみついてゐる。如何にもしよんぼりと木にかぢりついたやうに咲いてゐるといふ感じをそのまゝいうた語。○こゝろうし　なさけないものだ。それを見るこちらの心に物憂く感ずるとの意。○一重なるが　一重の梅が。こゝからが「とて」に對するクォーテーションとなる。○まづ咲きて散りたるは　先に咲いて散つたのは。外の花より先きに咲いて散る、即ち、外の花の咲かぬ先きに咲いて、外の花の咲き出す頃にはもう散つて了ふ。○心とく　氣ばやく、愚圖々々してゐないで氣もちがよい。○京極入道中納言　藤原定家。有名な歌人。正二位權中納言。仁治二年八月、年八十で死んだ。○なほ　やはり。梅は紅梅、八重何れもよいのだが、その中でもやはり一重の早咲が一番氣に入つてそれを軒近く植ゑられたといふのである。○京極の屋　京極の邸。定家卿の住まれた京極の御屋敷。○今も　今でも。○はべるめり　あるやうだ。あるといふのを婉曲にいうた形。○卯月ばかり　陰曆四月の頃。○若楓　若葉の萌え出たばかりの楓。櫻の散つた頃、目のさめるやうな美しい淺綠の新芽の延びるのをいふ。○すべて　概して、おしなべて。下の「まさりて」に掛る副詞。○めでたき　結構な、ごくよい、立派な。○いづれも　どちらも。橘や桂は共にの意。○ものふり　時代がついて、古木になつて。

草は山吹、藤、杜若、撫子。池には蓮。秋の草は荻、薄、桔梗、萩、女郎花、藤袴、紫苑、われもかう、苅萱、龍膽、菊、黃菊も、葛、葛、朝顏、いづれもいと高からず、さゝやかなる垣にしげからぬよし。

【通解】　草は山吹、藤、杜若、撫子がよい。池にあるものでは蓮がよい。秋の草では荻、薄、桔梗、萩、女郎花、藤袴、紫苑、われもかう、苅萱、龍膽、菊、黃菊もいゝ、葛、葛、朝顏、どれもあまり高くない、小さな垣に、ばらッとあるのがよい。

【文旨】　枕草子の筆致に模して草と草の花とのよいものを列擧しただけで、その凡てはごく平凡な誰しも知つてゐる種類のものばかりである。「いづれもいと高からず、さゝやかなる垣にしげからぬよし」というたのが一寸面白い著眼である。

【語義】○蓮　「はちす」は蜂窩の義で、蓮房の形からいうたもの、それを略して「はす」といふ。○紫苑「しをん」を音轉で「しをに」といふ。○われもかう　地楡と書く。宛字にして吾木香、破帽額とも書く。薔薇科に屬する多年生草本で、葉は藤に似て、羽狀複葉、秋の頃莖頭に紫又は白の小形の花を著ける。○菊黄菊も　「菊」といつてそこへ割註的に「黄菊もよい」といふ心持を入れて、すぐ次に接して行つた語調。○いと高からず　そんなに高くなく。漢文で書けば「不甚高」である。これは、

いと高からず(ざる)　垣に
さゝやかなる

といふ文脈で、草のたけの高くなくの意でなくて、垣の丈の高くないのを言ふのである。○さゝやかなる　小さい。○しげからぬよし　繁くないのがよい。ごちや〳〵と繁く植ゑず、まばらにばらッと植ゑてあるのがよい。

この外、世にまれなるもの、唐めきたる名の聞きにくゝ、花も見なれぬなど、いとなつかしからず。大かた何も珍しく、ありがたきものは、よからぬ人のもて興ずるものなり。さやうの物、なくてありなむ。

【通解】この外、世間に稀なもの、支那風の名前の聞きにくゝ、花も見馴れないのなどは、餘り感じがよくない。大體何でも珍しく、めつたにないやうな珍奇な物は、身分教養のない人のもてはやすものである。そのやうな物は、無くて結構だ。

【文旨】例の異を好まぬ安らかな見地から下した結論である。

【語義】○唐めきたる名の聞きにくゝ　唐風のむづかしい名の聞き苦しくて。○大かた何も　大體何でも。草に限らず大體何でも彼でもの意。○ありがたき　珍しい、稀な。○よからぬ人　よくない人、身分も低く教養もなくて、物の趣の分らぬ下品な人。○もて興ずる　もてはやす、興じ樂む。○なくてありなむ　なくてよい。寧ろない方がよいといふ語調。

第百四十段

身死して財殘ることは、智者のせざるところなり。よからぬもの蓄へおきたるも拙く、よきものは、心をとめけむと、はかなし。こちたく多かる、まして口をし。「我こそ得め」などいふものどもありて、あとに爭ひたる、さまあし。後は誰にと志すものあらば、生けらむ中にぞ讓るべき。朝夕なくてかなはざらむ物こそあらめ、その外は何も持たでぞあらまほしき。

【通解】死後に財物の殘ることは、智慧のある者のしない事である。くだらない物を蓄へておいたのもみつともないし、よい物は、それに心が引かれたらうと思はれて、如何にもはかない氣がする。うんと澤山にあるなどは、まして苦々しい。「それは是非俺が貰はう」などいふ者があつて、死後に爭うてゐるなどは、如何にも醜態だ。死後は誰それにやらうと志す物があつたら、生きてゐるうちに讓るがよい。朝晩無くて叶はぬやうな物は致し方がないが、その外は何も持たずにゐたいものだ。

【文旨】例の簡易生活のすゝめである。智者は死後に財を殘す事をしない。下らぬものを殘してゐれば、何だこんな物を大切にしてゐたのかと拙く思はれるし　よいものはよいもので、それに執著したらうとはかない感じがする。そんなのがどつさりあればなほ更苦々しい。形見分けの喧嘩などと來ては醜態の極。結局日用必須品の外は何

も持たぬに限るといふのである。

【語義】 ○身死して。その身が死んで、死んだ後に。○財。財貨。主として家財什器などを指していうてゐるやうである。○拙く。つまらない、見苦しい。其の人がつまらなく見えるの意。○心をとめけむとはかなし。生前それに心をとめ執著して珍重したのだらうとはかなく思はれる。「はかなし」は、それを見る人の心に、その人の心持が如何にもたよりなく、何だか憐れッぽいものに思はれるといふ意。○こちたく。事々しく、仰山に。○多かるで多くあるのは。○口をし。苦々しい、歎かはしい。○我こそ得め。それはおれが貰はう。死後に身内の者などの中でそれは是非おれが貰ふと主張する者があるといふのである。○あとに。死後に。○爭ひたる。爭つてゐるのは。○さまあし。ざまがわるい、見つともない、醜態だ。○あとは云々。これは自分の死後は誰それに讓らうといふやうに志す品物があつたら。○生けらむ中。生きてあらむ中、生きてゐる中、生前。○朝夕云々。朝夕なくて叶はぬ物だけは仕方がないが。「こそあらめ」は「こそあらめど」の意の副詞的終止で、その中に、致し方がないがといふ心持を含んでゐる、こゝで文が切れてゐると考へてはいけない。

第百四十一段

悲田院の堯蓮上人は、俗姓は三浦のなにがしとかや、さうなき武者なり。故郷の人の來りて物がたりすとて、「あづまびとこそ、いひつることは頼まるれ。都の人は、ことうけのみよくて、實なし」といひしを、聖、「それはさこそ思すらめども、おのれは都に久しく住みて、馴れて見侍るに、人の心おとれりとは思ひ侍らず。なべて心やはらかに、情あるゆゑに、人のいふほどの事、けやけくいなびがたくて、よろづえ言ひはなたず、心弱くことうけしつ。僞せむとは思はねど、ともしく、かなはぬ人のみあれば、おのづから本意通らぬこと多かるべし。あづまびとは、我が方なれど、げには、心の色なく、情おくれ、偏にすくよかなるものなれば、はじめより否といひて止みぬ。にぎはひ豐かなれば、人には頼まるゝぞかし」と、ことわられ侍りしこそ、この聖、聲うちゆがみ、あら〳〵しくて、聖教のこまやかなる理、いと辨へずもやと思ひしに、この一言の後、心にくゝなりて、多かる中に、寺をも住持せらるゝは、かく和ぎたるところありて、その益もあるにこそと覺え侍りし。

【通解】 悲田院の堯蓮上人は、俗姓は三浦のなにがしとかいうて、立派な武士である。故郷の人が來て色々話をする序手に、「關東人こそ、一旦言つた事はあてになる。京都の人は、口先の請合ばかりよくて、誠意がない」と言つた所が、上人は「そこもとは成程さう思召ませうが、私は永らく京都に住んで、親しく京都の人につき合つて見まするに、人の心が劣つてゐるとは思ひません。一體に氣が穩かで、情合があるので、人から何かいはれると、きつぱり斷りきれなくて、萬事思ふ通りに突ッ放せず、つい心弱く請合つて了ふ。もとよりうそをつかうとは思はないのだが、さてそれを實行する段になると、貧乏で、思ふに任せぬ人ばかりゐるので、自然考への通らぬ事が多いに違ひない。關東人は、自分の郷里ではあるが、實際どうも、愛想がなく、情合が乏しく、きすく一方であるので、否なものは最初から否といつて斷つて了ふ。一旦引受けたからは、生活が豐かで裕福なので、自然人からたよりにされるのだ」と說明されたので、今迄はこの坊さんは、言葉遣ひが訛つてあらつぽいので、どうせ佛典の細かい道

理は餘りよく分つてはゐなからうも知れぬと思つてゐたが、この一言を聞いてから、其の人が奥ゆかしくなつて、多くの僧侶の中で、かく一ヶ寺の住持ともなられるのは、斯ういふ穏かに情味のある所があつて、その利益もあるからの事だと思はれました。

【文旨】　都の人は輕薄で、一向あてにならぬ、田舍の人は素朴で、頼りになる――それはよく世間でいふ事で、慥かに一面の眞理ではある。然しそれが眞理の凡てではない。結果から見れば、多くの場合慥かに都人は口先ばかりで實がない事になる。然しその由つて來る所を究めて見れば大いに同情すべき美點があり、田舍者の素朴といふ中には却つて好ましからぬ要素が含まれてゐる。それは都の人は氣が弱く、情合があるので、何か人から頼まれでもすると、出來ないとは知りながら、どうもきつぱり斷れなくて、つい引受けて了ふ。而も生計は兎角不如意と來てゐるので、つい言責不履行といふ事になる。之に反して、田舍の人は情かこはい、氣すく一方で、否なものなら否と斷つて了ふ。暮しが樂なので、引受けたからにはその實行に骨が折れぬ。自然人から頼みにされる、といふのである。如何にもよく人情の機微を穿つた觀察である。一體兼好は田舍者がきらひであつた。前の祭見物の所でもかなりこつぴどくこきおろしてゐる。それもつまりは心の色がない、きすく一方、實用一方といふ點についてである。心の情調といふ事が凡ての議論の基調になつてゐる譯である。彼が堯蓮上人の言にひどく共鳴したのは全く此の點である。或は筆者自身の意見を堯蓮上人などといふ人物に假託したものかもしれぬ。何れにしてもこれが筆者自らの言はんとする所である事はいふ迄もない。

【語義】　○悲田院　もとは今日の養育院に相當する寺の稱であつたが、後には單なる寺院の稱呼となつたやうだ、こゝにいふのは泉涌寺の末寺で、今の京都市扇町大應寺邊にあつた寺。○堯蓮上人　傳記不明。○俗姓　出家した前の姓氏。○とかや　とかいうて。○さうなき　雙なき、ならびない、立派な。○故郷の人　上人の郷里の人。それは下文によつて關東である事は確實。○物がたりすとて　話をするというて。何かの話をする序手にの意。

○あづまびと　東國の人。○いひつることは　頼まれて　言つた事は頼みになる、一旦言つた事は必ず實行するからあてになる。○ことうけのみよくて　請合ばかりよくて。「ことうけ」は受合ひ承諾する返事。○聖　淨行の僧。堯蓮上人を指す。○それ　そのもと、第二人稱の代名詞。○さこそ思すらめども　如何にもさう思召ませうが、さう思ひなさるのも無理はないがの意。○おのれは　自分は、私は。○馴れて　都の人に馴れて、都の人と親しく交つて。○人の心おとれり　人の心が劣つてゐる、都の人の心が田舍の人の心よりも劣つてゐる。○なべて　概して、おしなべて。○心やはらかに　心が柔和で氣すくでなく。○情　情合。○人のいふほどの事　人が頼むといふ事。「ほどの事」は苟もいふ事は凡てといふやうな心持。○けやけく　きつぱりと、明かに際立つて。○いなびがたく否み難く、ことわりきれず。○よろづえ言ひはなたず　凡て思つた通りにはつきりと言ひきり得ない。「言ひはなつ」は心に思ふだけを口に出していふ、言ひ切つて突ッぱねるの意。○ことうけしつ　受合つて了ふ、引受けたといふ返事を與へて了ふ。「つ」は唐突に完了する趣である。こゝもつい引受けて了ふといふ趣が「つ」の一語によく出てゐる。○ともしくかなはぬ人のみあれば　貧乏で不如意な人ばかりゐるから。「ともしく」は財が乏しい、貧乏なの意。「かなはぬ」は裕福でなくて思ふに任せぬといふ意。「のみ」は特に強めていうたまでである。○本意通らぬ　考へが通らぬ。「本意」は斯々しようと思ふその精神。○我が方なれど　自分の方ではあるが。自分の郷里の事だから惡くいひたくはないがといふ心持　○げには　實際どうも。「實際の事をいへば」といふ心持でなくて、「げに」を強めた語調と考へられる。○心の色なく　愛想がなく。心が生一本で、やさしみがなく。○情おくれ　情が乏しい、人情味が少ない「おくる」は劣つてゐるの意。○偏にすくよかなるものなれば　一概に氣すくなものであるから。「すくよか」は氣すくで愛敬のないさまにいふ語。○否といひて止みぬ　否といつて斷つて了ふ。否なものは否とはつきり斷つて了ふ。「止みぬ」は止めて了ふ、手をつけずに斷つて了ふの意。○にぎはひ豐かなれば　富み足りてゐるから。「にぎはひ」は名詞でなくて、「にぎはふ」といふ動詞。それと「豐かなり」といふ形容動詞と熟した詞である。

○人には頼まるゝぞかし　一旦引受けたからにはそれを遂行するだけの實力があるので自然人から力にされる、即ちそのいふ事があてになるといふのである。○ことわられ　道理をいひ解かれ。○侍りしこそ　なされたのによつて。「侍りしにこそ」といふ心持。そして「こそ」は下文の「こゝろにくゝなりて」に係る。「なりて」は「なりけれ」さて」の結びの省略。「この聖……思ひしに」は挿入句で、この言葉を聞かなかつた以前の事を述べたのである。○聲うちゆがみ　言葉が訛つて。「ゆがみ」は正しくなく訛つてゐる。こゝは關東訛があるといふのである。「聲」といつても別段音聲が悪いといふ方でなく、詞遣ひのなまり――勿論それにはアクセントの訛も含んでゐる――をいふのである。○あらく〳〵しくて　言葉遣が荒つぽいので。○聖教　經文、佛典。○こまやかなる理　こまかい道理、緻密な教理。○いと辨へずもやと　そんなに分つてゐないかもしれないと。○一言の後　一言を聞いて後。○心にくゝなりて　奥ゆかしくなつて。○多かる中に　多くある僧の中で。○住持せらるゝは　住職として持つて居られるのは。「らるゝ」は敬語。○和ぎたるところありて　心のやはらいだ所があつて、心が柔和で情があるので。○その益もあるにこそ　その利益もあるのだ。○覺え侍りし　思はれました、感じた事でした。「侍りき」と結ぶ所を連體止めにしたのは、そこに言葉の餘情を存した調子である。

第百四十二段

心なしと見ゆるものも、よき一言はいふものなり。ある荒夷の恐しげなるが、かたへにあひて、「御子はおはすや」と問ひしに、「一人も持ち侍らず」と答へしかば、「さては物のあはれは知り給はじ。情なき御心にぞものし給ふらむと、いとおそろし。子ゆゑにこそ、よろづのあはれは思ひ知らるれ」といひたりし、さもありぬべき事なり。恩愛の道ならでは、かゝるものの心に慈悲心なしなりとも、孝養の心なきものも、子持ちてこそ、親の志はおもひ知るなれ。

【通解】何のわきまへもないやうに見える者でも、たまに一言葉位はいゝ事をいふものである。或荒々しい田舎武士の見るから恐しさうな奴が、傍輩に向つて、「お子さんはおありですか」と問うた所が、「いや一人も持つて居りません」と答へたので、「それでは物の情合はお分りになりますまい。情知らずの御心でおありなされる事だらうと、誠に恐しい。子故にこそ、萬事の情合はしみ〴〵思ひ知られるものです」と言つてゐたが、それは如何にもさうあるべき事だ。親子の愛情を外にしては、どうして斯ういふ連中の心に慈悲心があり得よう。親に對して孝養の心の無い者でも、子を持つて始めて、親の深い志がしみ〴〵分るものである。

【文旨】心なしと見えるものでも、たまにはいゝ事をいふものだというて、その一例を擧げてゐる。それは子の無いものには物の情合は分らぬといふ事である。俗累を離脱して佛道に悟入するといふ見地から、子といふ者は持つまじきものだと主張する筆者も、一面には斯うした人情の機微をよく解してゐるのである。

【語義】○心なし　事理を解しない。○荒夷　荒々しい田舎武士。「えびす」は邊境の田舎者、又は田舎侍（特に東國のもの）などを指していうた語。○恐しげなるが　恐しさうなのが、見るから恐しげな容貌をした奴が。○かたへにあひて　傍輩に向つて。○おはすや　おありなされるか。○さては　それでは。○物のあはれ　物の情趣、何かの情合。○情なき御心　無情な御心、冷酷な御心。○ものし給ふらむ　おありなされるでせう。○子ゆゑにこそ云々　子を愛する心からこそ世の中の凡ての情趣も成程と思ひ合はされる。○いひたりし　いうてゐたのは、いうてゐるのを聞いた事があるがといふ趣の表現。○さもありぬべき　如何にもさうあるべき、尤もな「も」は感興の助詞。○恩愛の道云々　恩愛の道でなくては、斯ういふ者の心に慈悲があらうや。斯うした荒夷などの心にやさしい慈悲心を持つのは皆恩愛の道ゆゑだといふ意。「恩愛」はもと佛語で、親子、夫婦、兄弟等の家庭的愛情をい

ふ語。特に親子の間の情合にいふ事が多い。こゝも親として子を慰ふ道といふ心持で使つてゐるのである。○孝養。孝行。「けうやう」と訓ずるのは佛典上のよみ方。○親の志　親の心、子を思ふ親の深い心。

世をすてたる人の、よろづにするすみなるが、なべてほだし多かる人の、よろづにへつらひ、望ふかきを見て、むげに思ひくたすは、僻事なり。その人の心になりて思へば、まことにかなしからむ親のため、妻子のためには、恥をも忘れ、盗もしつづきことなり。されば、盗人をいましめ、僻事をのみ罪せむよりは、世の人の飢ゑず寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。人恒の産なき時は恒の心なし。人きはまりて盗す。世治らずして、凍餒の苦みあらば、科のもの絶ゆべからず。人を苦め、法を犯さしめて、それを罪なはむこと、不便のわざなり。さていかゞして人を惠むべきとならば、上のおごり費すところを止め、民を撫で、農をすゝめば、下に利あらむこと疑あるべからず。衣食世の常なる上に、ひがごとせむ人をぞ、まことの盗人とはいふべき。

【通解】世を捨てた人の、萬事に無係累無一物であるものが、すべてに係累の多い人の、何かにつけて人に追従し、慾の深いのを見て、むやみとそれを輕蔑するのは間違つてゐる。その當人の心になつて考へれば、ほんとにいとしい親や妻子の爲めには、恥も外聞も忘れて了ひ、盗をもしかねない事である。だから、盗人を縛り、悪いことをのみ罪しようとするよりは、世人の飢ゑずこゞえぬやうに、世を治めて行きたいものである。人に一定の産がないと、一定の心の守りがなくなる。人は貧に迫ればつい盗みをする。世が治まらないで、うゑこゞえの苦しみがあつては、罪人の絶えよう筈はない。人を苦め、法を犯させておいて、それを罪に行ふといふのは、實に可愛相な事だ。然らば如何にして人を惠むべきかといふに、それは、上の奢つて浪費する所を廢して、人民を愛撫し、農業をすゝめたならば、下々に利益のあらう事は疑のある筈がない。衣食が普通に出來てゐて、それで猶且つ悪い事をする人をば、ほんとの盗人とは稱すべきである。

【文意】前節を承けて、全く無係累の世捨人などは、兎角世人の人に諂ひ慾の深い態度を一概にくさして了ふものだが、それはいけない、その當人の心になつて見れば、いとしい親や妻子の爲めには、人に諂ひ慾をかくどころか、盗もやり兼ねない事だ、というてやさしい同情の心を寄せておいて、それから孟子の仁政論――授産主義の政治說を引出して、それを敷衍してゐる。この最後の政治論は、用語の調子まで殆ど孟子の飜案に過ぎぬやうであるが、最後の一句「衣食世の常なる上に」云々といふのは、一篇の結論として如何にも力強い筆致だ。貧の盗みはほんとの盗人とはいへぬ、衣食が普通に足りてゐながら尙且つ悪い事をする奴こそほんとの盗人だといふのである。

【語義】○世をすてたる人　世捨人、世を捨てゝ佛門に入つた人。○よろづにするすみなるが　萬物に無係累無一物であるものが。「するすみ」は匹如身と書いて、無係累無一物の獨身の意にいふ語。○なべて　おしなべて、概して。○ほだし多かる人　係累束縛の多くある人。「ほだし」は自分の自由を束縛するものの事で、こゝでは妻子などの係累を指す。○よろづに諂ひ　萬事につけて人に媚び諂ひ。○望ふかき　望む所が深い、慾が深い。○むげに一途に、むやみに。○思ひくたす　思ひくさす、下らぬ奴だと思ふ、輕蔑する。○僻事　よくない事、間違つてゐる事。○その人　その當人。さういふほだしの多い人。○まことに　ほんとに。下の「恥を忘れ」云々に掛る副詞。○かなしからむ親のため云々　いとしい親の爲めには。○盗もしつべきことなり　つい盗もしさうな事だ。盗をするのも無理はないと、同情と理解を持つて書いた文調。○いましめ　捕へ縛り。○僻事をのみ　悪事をばかり。この所と文末の所とにある「僻事」は道にはづれた事、悪事の意で、前にあるのよりも語の内容がひど

い。○世をば行はまほしきなり　世の中をば治めたいものだ、政治をやつて行きたいものだ。○人恒の產なき時は恒の心なし　人は一定の產がないと一定の心の守りがなくなる。これは孟子の語で、「產」は原典では產業の意だが、こゝは資產の意に轉用してゐる。○人きはまりて盜す　人は困窮すると盜みをする。○凍餒　こゞえ、うゑ。○科のもの　とが人、罪人。○絕ゆべからず　絕えよう筈はない。○罪なはむこと　罪に行はうことは、罪に處するのは。○不便のわざ　可愛相なこと、氣の毒なこと、痛ましいこと。○さて　而して、然らば。○とならば　といへばそれは。○上　上に立つもの。君や高位高官の如き、凡て民の上に立つもの。○撫で　愛撫し、かはゆがり。○疑あるべからず　疑のある筈はない、疑ふべき餘地はない、きつとさうなる。

第百四十三段

人の終焉のありさまの、いみじかりし事など、人のかたるを聞くに、たゞ靜かにして亂れずといはゞ、心にくかるべきを、愚かなる人は、あやしく異なる相を語りつけ、いひし言葉も、ふるまひも、おのれが好む方に譽めなすこそ、その人の日ごろの本意にもあらずやと覺ゆれ。この大事は、權化の人も定むべからず、博學の士もはかるべからず。おのれ違ふ所なくば、人の見聞くにはよるべからず。

【通解】人の臨終の模樣の、すばらしく立派であつた事などを、人の語つてゐるのを聞くに、只ごく靜かに從容として取亂した所がなかつたといはゞ、如何にも奧ゆかしいであらうのに、それを愚かな人は、不思議な變つた事のあつたやうに餘分の事まで附け足して語り、其の人の言つた詞にしても、した事にしても、自分の好む方に引きつけて譽め立てるものだが、それはその死んだ當人の平素の本意にも背かうかと思はれる。この臨終といふ一大事は、神佛がかりに人と化して此の世に生れて來た人でも斯々と定められるものでなし、博學の士でもこんな具合と豫め推測されものではない。だからその本人さへ亂れる所がなければそれでよいのであつて、人の見たり聞いたりする事によつて臨終の價値が上下さるべきものではない、そんな事はどうでもよい事である。

【文意】これも自然な安らかな殊更に巧まぬのを好む筆者の趣味のあらはれの一つである。人の臨終の立派さを傳へようとして、紫雲がたなびいたの、香華が降つたの――それほど大業でないにしても、ちやんと起き返つて一人一人に挨拶したとか、につこりと笑つて合掌したのが最後だつたとか、兎角色々の事をいふ。それも自分の好きな方に取りなしていゝ加減におまけをつけて話す。それは如何にも馬鹿氣た事だ。臨終といふ一大事はどんな立派な人にも豫測は出來ぬ。要は心が道にはづれず一點亂るゝ所がなければそれでよい。人の見聞を標的にして殊更に臨終を立派にしようなど考へる必要は毛頭ない、といふのである。

【語義】○終焉　臨終、死にぎは。○いみじかりし事　立派であつた事、すばらしかつた事。○靜かにして亂れず　心靜かで取亂した所がない。○心にくかるべきを　奧ゆかしく感じようのにそれを。○あやしく異なる相　不思議に變つてゐるすがた有樣。○語りつけ　語り加へ、附け足して語り。○おのれが好む方に譽めなす　自分の好きな方に引きつけて譽め上げる。○その人の云々　其の死んだ當人の平生思つてゐた事とは相反するのではないかと思はれる。譽められる當人も甚だ不本意な譯だといふ意。○この大事　死卽ち臨終といふ一大事。○權化の人　佛菩薩などが衆生濟度のためにかりに人間としてこの世に現はれた者。「權現」といふも同義。○定むべからず　斯斯と定める事は出來ない。○おのれ違ふ所なくば云々　自分の心が道に違はず取亂す所さへなければ、人の評判などはどうでもよい、人の見たり聞いたりする所によつて臨終の價値が上下さるべきものではないといふ意。

第百四十四段

栂尾の上人、道を過ぎ給ひけるに、河にて馬洗ふをのこ、「あし〳〵」といひければ、上人たちとまりて、「あなたふとや。宿執開發の人かな。阿字々々と唱ふるぞや。いかなる人の御馬ぞ。あまりにたふとく覺ゆるは」と、尋ね給ひければ、「府生殿の御馬に候ふ」と答へけり。「こはめでたき事かな。阿字本不生にこそあなれ。うれしき結緣をもしつるかな」とて、感涙をのごはれけるとぞ。

【通解】 栂尾の上人が、道を御通りになつた時、河で馬を洗ふ男が、「あし〳〵」というたので、上人は立ち止つて、「あゝ尊い事ぢや。これは前世の功德の開發した人ぢや。しきりに阿字々々と唱へて居るわ。どういふ方の御馬か。あまりに尊く思はれるよ」と尋ねなされると、其の男が、「府生殿の御馬で御座りまする」と答へた。すると上人は、「これは又結構な事かな。如何さま阿字本不生ぢや。有難い法緣に參り合はせて誠にうれしい事ぢや」というて、感涙を拭はれたといふ事である。

【文旨】 馬を洗ふ男が「足々」というたのを、「阿字々々」と聞きちがへ、「府生」を「不生」と聞き違へて、ひどく有難がつた、上人のその純な、道を思ふより外に何物もない態度を嬉しく思つて書いてゐるのである。馬を洗ふ男の言葉をわざと阿字本不生と云ひなして佛教に導いたといふでもなし、又、馬が阿字で持主が府生（不生）、これがほんまに阿字本不生ぢやといふ洒落ではもとより無い。

【語義】 ○栂尾の上人　釋高辨。明惠上人といふ。北山の栂尾に居つて華嚴宗中興の祖と仰がれ、寛喜四年に寂した人。○あし〳〵　馬に足をあげろと命ずる意味で「足々」というてゐる、それを「阿字々々」と聞いたのである。○あなたふとや　あゝ尊い事よ、誠にありがたい事ぢや。「あな」は驚歎の時發する感歎詞。「や」は「よ」と同じく感歎の意をあらはす詞。○宿執開發の人　前世で執持した功德がこの世であらはれた人、過去の功德によつて有德の人として生れた人。○覺ゆるは　思はれるよ。「は」は感興咏歎の助詞。○府生殿　近衞府に屬する官人で左右六人、近衞舍人の中から任じたもの。その「府生」を上人は又「不生」と聞き違へたのである。○阿字本不生　密教教義の根本義で、本不生とは本然的實在を意味し、後天的に創造されぬといふ意、梵語字母の第一たる阿字は總ての言語や聲の根本で、一切の聲も言語もこの一字に含まれ、本初的にして、他の因によつて生じたものでない。因てこの阿字に寄せて一切諸法本初不生の義を知らしめるのである。この觀法を阿字觀といふ。○結緣　佛法に觸れて未來得度の緣を結ぶこと。○のごはれ　ぬぐはれ。

第百四十五段

御隨身秦重躬、北面の下野入道信願を、「落馬の相ある人なり。よく〳〵つゝしみ給へ」といひけるを、いとまことしからず思ひけるに、信願、馬より落ちて死ににけり。道に長じぬる一言、神の如しと人おもへり。さて「いかなる相ぞ」と、人の問ひければ、「極めて桃尻にして、沛艾の馬を好みしかば、この相をおほせ侍りき。いつかは申し誤りたる」とぞいひける。

【通解】 御隨身の秦の重躬が、北面の武士下野の入道信願の事を、「落馬の相のあるお人だ。よく〳〵御愼みなされ」というたのを、それを聞いた人々は一向あてにならぬやうに思つてゐたところが、其の後信願は、馬から落ち

で死んで了つた。人々は、道に達した者の一言は、まるで神樣のやうだと思つた。そこで或人が、「落馬の相がある」といはれたのはどんな相ですか」と尋ねた所が「あの人は非常に尻の坐りが悪くて、而も氣の荒いむやみと跳ね上る馬がすきだつたので、それで落馬の相があるというたのです。何と私の申す事に誤は御座いますまいがナ」というたのであつた。

【文旨】 眞理は平凡な所にある。然るに凡人はそれに氣がつかぬ。達人、名人は、その平凡な眞理をよく摑んでゐる。桃尻――尻のすわりが悪くて、而もじや〳〵馬がすきでは所詮落馬は免れぬ。それが落馬の相だといふ事は、誰しも首肯し得べき事、それを聞いては寧ろ「何の事だ」とあきれる程平凡な眞理である。而もそれに思ひ至らないで禍を買ふ。この一段はさういふ心持を以て書いてゐるのだと思ふ。

【語義】 ○御隨身　近衞將監將曹以下の官人、上皇の御幸又は攝政關白の出行の時、弓箭を帶して前後を警衞する近衞府の官人。○北面　北面の武士、上皇の御所警固の武士。○信願を　信願の事を。信願を評してといふ心持の言葉遣。○落馬の相　馬から落ちる人相。○いとまことしからず　一向に誠らしからず、更にほんとらしくなく。○思ひぬるに　信願が思つたといふ風にも取れるが、前後の文調上それを聞いた人が思つたと取る方が自然だらう。○道に長じぬる一言　道に長じた人の一言。「道に長ず」は何かの道の蘊奥を究める意。こゝは馬術又は觀相の名人といふ心持。○人おもへり　人々が思つた。○さて　そこで、さう感じたにつけて。○人の　或人が。○桃尻　桃の實は尻のすわりが悪い、盆の上におくところ〳〵する。そのやうに、馬に乘つて、尻が鞍の上にすわらぬのをいひ習はした當時の語といふ。○にして　であつて而も。○沛艾の馬　はね狂ふ馬、じや〳〵馬。○この相をおほせ侍りき　この人相を負はせました、この相があると申した。○いつかは云々　「かは」は反語。いつ申し誤つたか、いつとて申し誤らぬ。但、私の申す事はいつも此の通り間違はないといふよりも、何と私の申した事に間違はないでせうといつたやうな語調である。

第百四十六段

明雲座主、相者に逢ひ給ひて、「おのれもし兵仗の難やある」と尋ね給ひければ、相人、「まことにその相おはします」と申す。「いかなる相ぞ」と尋ね給ひければ、「傷害の恐おはしますまじき御身にて、假にもかくおぼしよりて尋ね給ふ。これ既にそのあやぶみの兆なり」と申しけり。はたして矢にあたりてうせ給ひにけり。

【通解】 明雲座主が、觀相者にお向ひになつて、「自分に若しか兵器にかゝる災難はあるまいか」とお尋ねになると、相人は、「如何にもその相がおありなされる」と申す。「どういふ相か」とお尋ねなされると、「傷害の御心配などのおありになる筈のない御身で、假にもそんな事を思ひ寄つて御尋ね遊ばされる。これが既にその危難の前兆でござる」と申した。所が、果して矢に中つておなくなりになつてしまつた。

【文旨】 天台座主として行ひまして居れば、てんで劍難の相などいふ事が念頭に浮ぶ筈がない。それを危ぶんで人相見に尋ねるのは、そこに既にさうした危難の前兆があらはれてゐるといふのである。目と眉との間に疊りがあるとか、眸子に赤い線があらはれたとか、さういふ所謂人相上の專門の事よりも、眞理は却つて斯ういふ平凡の所に伏在してゐる、そこに共鳴して書いてゐるのである。

【語義】 ○明雲座主　比叡山の座主明雲。久我太政大臣雅實の孫、權大納言源顯通の子。「座主」は比叡山延曆寺の長老で、「天台座主」ともいふ。○相者　人相を見る事に長じた人。源平盛衰記には、信西が明雲を相した事が見えてゐる。○兵仗の難　武器によつて傷害を受け又は殺されること。所謂劍難の相である。「兵仗」は太刀弓矢等凡

での武器をいふ。○まことに　なるほど如何にもといふ語調。○傷害の恐おはすまじき御身　武器の傷害などあらう筈のない御身。天台座として行ひすましてゐれば、その心配のあらう筈はないとの意。○假にもかくおぼしより　假にも劍難の相はないかと思ひついて。「おぼしよる」は「思ひよる」の敬體で、思ひつきなされるの意。○そのあやぶみの兆　兵仗の危難の前兆。○果して云々　壽永二年、源義仲が後白河上皇の法住寺の御所を圍み攻めた時、明雲もそこに參籠してゐて、矢に中つて入滅。

第百四十七段

灸治あまた所になりぬれば、神事に穢ありといふこと、近く人のいひ出せるなり。格式等にも見えずとぞ。

【通解】灸をすゑた個所が數多くなると、穢があるとして神事にたづさはるのを忌むといふ事は、近頃人の言ひ出した事である。格式等正式の規定の上にも見えてゐないといふ事だ。

【文旨】例の古實趣味から世俗の說の誤を正したもので、次の段と共に、保健上灸治をすゝめる微意が含まれてゐるのだらう。筆者が健康を氣にした事は所々に見えてゐる。

【語義】○灸治　灸をすゑて療治すること。○あまた所になりぬれば　そのすゑた個所が澤山になると。○格式　法規の事で、格は法制に關する勅令官符を集めたもの、式は諸法令の施行細則。

第百四十八段

四十以後の人、身に灸を加へて、三里をやかざれば、上氣のことあり。かならず灸すべし。

【通解】四十過ぎの人は、からだに灸をすゑて、それから三里を燒いて置かないと、のぼせる事がある。必ずそこに灸をすゑるがよい。

【文旨】保健上灸をすゑろといふのである。

【語義】○灸を加へて　灸をすゑて。○三里　灸穴の一、膝の下の外側のやゝ凹んだ所の稱。○やかざれば　灸でやかないと、灸をすゑないと。○上氣　のぼせること。

第百四十九段

鹿茸を鼻にあてゝ嗅ぐべからず。ちひさき蟲ありて、鼻より入りて腦をはむといへり。

【通解】鹿茸を鼻にあてゝ嗅いではいけない。小さい蟲が居つて、鼻から這入つて腦をおかすというてある。

【文旨】これも保健上の一つの注意である。

【語義】○鹿茸　鹿のふくろづの。「袋角」は、夏時、鹿の角の落ちて後に生じた新角、形が袋に似てゐる所からいふ。○いへり　物の本にさういうてあるといふ心持の表現。本草綱目、鹿の條に『說曰、鹿茸不可以鼻齅之、中有小白蟲、視之不見、入人鼻、必爲蟲類』とあるをいふ。

第百五十段

能をつかむとする人、よくせざらむほどは、なまじひに人に知られじ、内々よく習ひ得て、さし出でたらむこそ、いと心にくからめと、常にいふめれど、かくいふ人、一藝もならひ得ることなし。いまだ堅固かたほなるより、上手の中にまじりて、譏り笑はるゝにも恥ぢず、つれなくすぎてたしなむ人、天性その骨なけれども、道になづまず、妄にせずして、年をおくれば、堪能の嗜まざるよりは、終に上手の位にいたり、徳たけ、人に許されて、ならびなき名を得ることなり。天下のものの上手といへども、はじめは不堪のきこえもあり、むげの瑕瑾もありき。されども、その人、道のおきて正しく、これを重くして、放埒せざれば、世の博士にて、萬人の師となること、諸道かはるべからず。

【通解】藝を身につけようとする人が、まだよく出來ないその内は、なまなか人に知られまい、こつそりとよく習つて、うまくなつた所で、すつと人中に出てやつて見せるのこそ、いかにも奥ゆかしく思はれる事だらうと、常にいふやうだが、そんな事をいふ人は、一藝も習熟し得るものではない。まだ全然未熟な内から、上手な人の中に雑つて、譏り笑はれるのにも恥ぢらふ事なく、何といはれても平氣で押通つてしつかり心掛けてゐる人は、生れつきそのわざについての天分はなくても、道に拘泥せず、道をおろそかにして我流に墮しないで、長の年月を送つて行く内には、器用で深く心掛けてやらないものよりは、却つて終に天下の上手といふ位置に達し、徳も高くなり、萬人に認められて、無雙の名を得るものである。何道によらず、天下の上手と呼ばれる程の人でも、最初は不器用だといふ評判もあり、實にひどい缺點もあつたものだ。けれども、その人が、道の規格を正しく守り、これを重んじて、自儘にしないで、其の結果一世の模範として、萬人の師表となる、斯ういふ事は、どんな道でも皆變る筈はない。

【文旨】藝能を修めるについての筆者の主張である。こつそりと稽古してうまくなつた所で一つ世間の奴等を驚かしてやらう――これはアマチュア藝術家のよくいふ事だ。さういふ世間普通の心理を巧みに描寫して、「かくいふ人一藝もならひ得ることなし」と斷じてゐる。そして、未熟な内から上手の中にまじつて何といはれても平氣で努力する、それも只圖々しいのでなくて、「道になづまず、妄にせずして、年をおくる」やうにすれば、天性不器用のものも必ず名人上手といはれるやうになるというてゐる。そして、今日天下の名人と呼ばれる人でも最初は不器用ともいはれ、ひどいきずもあつた、只道を守ること正しく、慎重に努力した結果大家として人の師表となる、諸道皆同じ事だと結んでゐる。悪器用悪達者を憎んで、厭くまでも道に忠なる努力家をよいとする、それが兼好の藝術觀で、實に千古の達見と稱すべきである。

【語義】○能をつかむとする人　藝能を身につけようとする人。「つかむ」は「つけむ」に同意の古語。○よくせざらむほどは　その藝のまだよく出來ない内は。「せざらむ」は「せざる」の婉曲敍法。○なまじひに　なまなか、なまじつか。○内々　ないく、こつそり、ないしよで。○習ひ得て　習得して、習つて上手になつてから。○さし出でたらむこそ　すつと人中に出たらうのこそ。その藝を人中で演じるのがの意。「さし」は接頭語で、ずつと勢よくといふやうな心持を含めて使はれる。○心にくからめ　奥ゆかしからう。どんなに人から奥ゆかしく思はれようといふ意。○堅固　全然、ごく〳〵。「かたほなる」に掛る副詞。○かたほ　未熟、不十分。「まほ」に對する語で、物の十分でなく、整はないで、その全眞を發揮しない意。○上手　上手な人。但、今日の言葉では寧ろ名人といふ

に當る。○つれなくすぎてたしなむ人。平氣で押通つてその道を嗜む人。「つれなく」は何といはれても平氣で、情こはく構へてゐる意。愚考では「すきてたしなむ」即ち漢文流にいへば「好而嗜之」といふ文ではないかと思ふが、諸本皆「すぎて」と濁つてゐるから、暫く「過して」の自動詞的表現と解して置く。○天性その骨なけれども　天性その才分がなくても。その藝に對する天分は惠まれてゐなくてもの意。「骨」は天分、天才の意。「なけれども」を「ないけれども」と解する說もあるが、前後凡て一般既定法の表現と見るが自然だと思ふ。○道になづまず　道に拘泥せず。道に囚はれてそれに滯る事なくの意。○妄にせず　道を妄にしない、道をおろそかにして我流を通すやうな事をしない。「道になづまず」さればというて「妄にせず」といふ心持。○年をおくれば　年をおくる內には、年數を積むうちには。○堪能の嗜まざるよりは　器用で嗜まない人よりは。「堪能」は器用で、今日いふ意味の「上手」に當る。○德たけ　德が高くなり。その藝の上の德が高く進んで貫祿がつくといふ意。○人に許されて　人から上手として許されて、人の尊敬を受けて。○ならびなき名　無雙の名、天下無雙だといふ名聲。○ものの上手　何かの上手、何道によらずその名人。○不堪　不器用、下手。○きこえ　評判、噂。○むげの瑕瑾　甚しいきず。「瑕瑾」は普通に玉のきずの意に使はれる熟語。○道のおきて正しく　道の守りが正しく。「おきて」は規則の意、道の規則を正しく守るといふのである。○これを重くし　之を重んじ。道のおきてを重んじの意。○放埒せざれば　ほしいまゝをしないので其の結果。○世の博士にて　世の中の手本として。「博士」は道の指導者といふ意。○諸道かはるべからず　何の道でもかはる筈はない、學問技術どんな道でも皆同じ事だ。

第百五十一段

ある人の曰く、年五十になるまで上手に至らざらむ藝をば捨つべきなり。勵み習ふべき行末もなし。老人の事をば、人もえ笑はず。衆に交りたるも、あいなく見ぐるし。大かたよろづのしわざは止めて、暇あるこそ、めやすく、あらまほしけれ。世俗の事にたづさはりて、生涯を暮すは、下愚の人なり。ゆかしく覺えむことは、學び聞くとも、その趣を知りなば、おぼつかなからずして止むべし。もとより望むことなくしてやまむは、第一のことなり。

【通解】或人のいふやう、年五十になるまで上手にならないやうな藝は思ひ切つてしまふがよい。これから先勵み習ふべき前途もない。老人の事は、人も氣の毒がつてよう笑はぬもの。いゝ年をして平氣で多勢の一座に交つてゐるのも、如何にも興なく見つともない。大體年を取つたら色々なしわざは止めて、閑散なからだでゐるのが、誠に見よくて、好もしいものだ。由來世俗の事にかゝはつて、一生を暮すのは、馬鹿の骨頂だ。どうか知りたいと不審に思ふやうな事は、それは學び聞くにしても、その事の趣が分つたら、一應不審が晴れたといふ程度で止めるがよい。若し始めから知りたいなどと望む所がなしにしまへば、それにこした事はない。

【文旨】或人の言葉に假託しての筆者自身の意見——五十にもなるまで上手にならぬ藝は捨てるがよい。もう先が短い、どうせうまくはならぬ。それに下手でも年寄りのする事は人が氣の毒がつて笑はぬ。笑はぬからとて出しやばるのも見苦しい。年よりはひまでゐるに限る。一體俗事にたづさはつて一生を暮すのは愚の極。習ひたいと思ふ事も、一通り分つたらもうそれでいゝとする。最初からその氣を起さぬのは一番の上乘だ、といふ意見を述べたのである。前段は道に忠なるつゝましい態度をよしとしたもの、これは物にこだはらず俗事を避けて閑寂を樂む生涯をよしとしたもの、共に筆者の趣味觀の一つのあらはれであつて、どちらにも深く味ふべき眞理がある。

【語義】○行末もなし　前途もない、將來もない。これからその藝を勵み習ふべき餘命もいくらもないとの意。○老人の事をば云々　老人の事は人も笑はぬ。「え……ず」はよう何々せぬ、何々し得ぬの意。○あいなく　愛なく、

興がなく。○大かた　大體年寄りは。○いとま　ひま。○めやすく　見やすく、見よく、見た目がよく。○あらまほしけれ　さうありたいものだ、願はしいものだ。「見よくありたい」と續くのではない、見よくて、さうありたい——即ち見よくて好もしいものだの意。○下愚の人　一番愚かな人。○ゆかしく覺えむこと　不審でその内容を知りたく思はれるやうな事。こゝの「ゆかし」も原義通り、その事について追求的興味の禁じ難いといふ意。○學び聞く人について學んだり聞いたりする、習ふ。○とも　にしても。假に習ふにしてもの意。○おぼつかなくはないといふ所で。「おぼつかなし」はよく分らぬ、不審だ、ぼんやりしてゐるの意。○もとより　最初から。○望むことなくしてやまむは　習はうと望む事なくして止めようのは。習ひたいなどいふ氣を起さずにすんでしまへばそれはの意。○第一のこと　一番よいこと。

第百五十二段

西大寺静然上人、腰かゞまり、眉白く、まことに徳たけたるありさまにて、内裏へ參られたりけるを、西園寺内大臣殿、「あなたふとのけしきや」とて、信仰のきそくありければ、資朝卿これを見て、「年のよりたるに候ふ」と申されりけり。後日に、むく犬のあさましく老いさらぼひて、毛はげたるを引かせて、「この氣色たふとく見えて候ふ」とて、内府へ參らせられたりけるとぞ。

【通解】西大寺の静然上人が、腰は曲り、眉は白く、見るからに高徳らしい樣子で、宮中へ參られた所が、それを見て西園寺内大臣殿が、「あゝ尊い御樣子ぢや」というて、信仰の面持が見えたので、資朝卿が之を見て、「ナニ年のよつた迄で御座います」と申された。後日になつて、資朝卿は、むく犬の二目と見られぬやうに老い朽ちて、毛のはげたのを供人に引かせて、「この犬の樣子が如何にも尊く見える事で御座います」というて、内大臣に差上げられたといふことだ。

【文旨】隨分人を馬鹿にした話だが、その仕打がきびくしして面白い。單なる茶目にしては少しあてつけ過ぎる。或は内大臣が鎌倉びいきなので、こんなひどいあてつけをやつたのかもしれぬ。史實を背景にして考へれば或は資朝のさうした意氣のあらはれの一つとも見られよう。然しこの文自體から吾々の感得する感じはさうではない。由來筆者は年よりがきらいだ、年よりの世間へ出しやばる事がきらいだ、從つて心の徳のない單なる年よりは、筆者の目には寧ろ「あさましき」ものとして映ずる。所が腰の曲つた、眉の白い老僧、斯ういふものは得て世間の尊崇の的になる。西園寺内大臣も世の凡俗なみに「あなたふとのけしきや」と頭を下げる。それを資朝が「年のよりたるに候ふ」と事の根柢を穿つた只一言——その一言が筆者には痛快でたまらぬ。そして後日に毛のはげたよぼ〳〵のむく犬を献上して、「この氣色たふとく見えて候」といふ、戯弄もこゝ迄行くと人をして襟を正さしめるものがある。そこが筆者の共鳴して止まぬ所なのだらう。或はこれは、内大臣にあてつけるといふよりも、静然上人といふ坊主が、只年とつただけ、只位が經上つただけで、世の所謂俗坊主たるに過ぎぬといふ事を諷したものかもしれぬ。さうしたら内大臣もそのむく犬を見て「成程なア」と破顔一笑したかもしれない。何れにしてもさらりとした痛快味、それが此の一文の文としての全生命であらう。

【語義】○西大寺　南都七大寺の一。○静然上人　西大寺の中興開基睿尊より四代目の長老。○徳たけたる　徳の高い、高徳の、有難い。○内裏　御所、宮中。○西園寺内大臣　實衡。左大臣公衡の子。○あなたふとのけしきや　あゝ尊い樣子よ。「たふとの」は「たふとき」に同じ。○きそく　氣色の字を充てる。「けしき」に同じく、やうす、顔色の意。○資朝卿　權中納言藤原資朝。日野中納言といふ。俊光の子。後醍醐帝の謀臣として王政復古の大業を企て、北條の爲めに囚へられて、佐渡に流され、元弘二年に守護本間氏に殺された。○年のよりたるに候ふ

年かよつたのであります。別段たぶとい事もない只年が寄つただけだの意。○あさましく　あまりひどく、見るもなさけない程に。○老いさらぼひて　老い朽ちて、ひどく老いてよぼ〳〵になつて。○引かせて　引連れさせて、人に引張らせて。○この氣色　この犬の様子。○内府　内大臣の唐名。西園寺内大臣を指す。

第百五十三段

【通解】　爲兼大納言入道が捕へられて、大勢の武士が取圍んで、六波羅へつれて行つた時、資朝卿が、一條邊でこれを見て、「あゝ羨しい。世に生きてゐるところの思ひ出として、どうか斯うありたいものだ」といはれたのであつた。

【文旨】　簡潔な筆致の内によく資朝卿の意氣が見えてゐる。そして徒然草一卷があの南北朝時代の産物と考へられるのに、端的に其の渦中の中心人物を描いて、而もかなり鮮かに其の意氣を寫したものは、此の一段だけである事も注目に値する。爲兼は持明院派の謀臣、資朝は大覺寺派の大忠臣であるが、爲兼配流の當時は、資朝は兩統の間に公正に仕へてゐて、まだ大覺寺派の方人といふ色彩が鮮かでなかつたので、斯く十分の同情を寄せたのであらう。それにしても後にあれだけの忠節を全うした氣魄は、まざ〳〵とこの言葉の中に窺はれる。

【語義】　○爲兼大納言入道　權大納言藤原爲兼。定家の曾孫。毘沙門堂といふ。後薙髮して蓮覺といひ、元弘二年薨。○めしとられて　永仁六年に坐して佐渡に流された事もあるが、それは資朝九歳の時の事だから、本文にいふのは、その後西園寺實兼の讒により正和四年十二月土佐に流された事をいうたものだらう。この當時資朝は二十六歳であつた。――と橘氏は考證して居られる。○六波羅　京都洛東の地名。そこに北條氏が南北兩六波羅の廳を おいて、北條氏の一族を以て畿内西國の政を行はせた所。○ゐて行きければ　率ゐて行つたので、つれて行つた時に。○一條わたり　一條邊。「わたり」はあたり。○世にあらむおもひで　世に生きてゐる思ひ出、「思ひ出」は後日にそれを思ひ出すことの意から、本懷、本願、願ひといふ意に使はれた詞。

第百五十四段

【通解】　この資朝卿が、或時東寺の門の所で雨宿りをしてをられた所が、そこにかたは者が澤山に集つてゐた、

この人、東寺の門に雨やどりせられたりけるに、かたはものどもの集り居たるが、手も足もねぢゆがみ、うちかへりて、いづくも不具に、ことやうなるを見て、とり〳〵に類なきくせものなり、尤も愛するに足れりと思ひて、まもり給ひけるほどに、やがてその興つきて、見にくゝいぶせく覺えければ、たゞすなほに、珍しからぬものには如かずと思ひて、かへりて後、この間、植木を好みて、ことやうに曲折あるを求めて、目を喜ばしめつるは、かのかたはものを愛するなりけりと、興なく覺えければ、鉢に植ゑられける木ども、みなほり棄てられにけり。さもありぬべきことなり。

その連中が手も足もねぢけ歪み、そり返つて、からだ中どこも彼も不具で、異様であるのを見て、これはそれ〴〵に無類な變り者だ、殊に愛玩するに値すると思つて、じつと見守つて居られる内に、すぐその興味がなくなつて、如何にも見にくく、心持悪く感ぜられたので、何でも只すらりとして、珍奇でないものに越した事はないと思つて、家に歸つて後、この程から、自分が植木を好んで、妙に風變りな曲りくねつた趣のあるのを求めて、それを眺めて喜んでゐたのは、つまり彼の不具者を愛するのと同じ譯だつたのだと、興ざめて感じたので、鉢に植ゑておかれた色々な木を、皆堀り棄てて了はれた。なるほど如何にもさうありさうな事である。

【文旨】 これも資朝の行動に共鳴した話――特に自然のまゝで巧まぬ趣を喜ぶといふ點に於て非常に共鳴した話である。それにしても「すなほに珍しからぬもの」をよしとする爲めに摑んだ題材としては隨分思ひ切つて變つたものである。本章と前の二章との話を綜合して見ると、資朝といふ人は餘程皮肉な、隨分思ひ切つた事を平氣でやつてのける種類の人で、其の行動が、平凡の平凡、自然の自然でなくて、奇拔の道程を通り越しての平凡自然であつたともいへよう。そしてそこに兼好が特に一種の深い共鳴を感じたもののやうに考へられる。

【語義】 ○この人　前段を承けて資朝卿を指す。○東寺　眞言宗の總本山で、もと羅城門外東側に建てられた大寺、今は京都下京區九條町にある。○かたはものども　不具者共。不具の乞食達卽ち天刑病者の類であらう。○居たるが　居たのが。「どもの……たるが」と呼應して主語を爲す格。○ねぢゆがみ　ねぢれゆがみ。くねり曲つてゐるのをいふ。○うちかへりて　そりかへつて。○いづくも　どこもかもの意。○不具にことやうなるを　かたはで普通と變つてゐるのを。「に」は「にて」の意。○とり〴〵に　皆それ〴〵に。○くせもの　變りもの。一風變つた面白い奴の意。○尤も愛するに足れり　大いに愛するに足りる。すてきに面白いといふ口吻。○まもり　見守り、見つめ。○やがて　すぐに。○その興つきて　その興味が盡きて、それを見てゐるについての面白味がなくなつて。○いぶせく　不快に、氣もちわるく。○すなほに　すなほで、すらりとして、妙にひねくれないで。「に」は「にして」。○めづらしからぬものには如かず　珍しくないものの方がよい。○この間　この程。○曲折あるを　曲りくねつた趣のあるのを。○目を喜ばしめつるは　見て樂しみとしたのは。○愛するなりけり　愛するのであつた。愛した譯であつたのだと心に悟つた趣をあらはした文調。○さもありぬべきことなり　いかにもさうあるべき事だ、如何にも尤もな事だ。「も」は感興の助詞。

第百五十五段

世にしたがはむ人は、まづ機嫌を知るべし。ついであしきことは、人の耳にもさかひ、心にも違ひて、その事成らず。さやうの折節を心得べなり。たゞし、病をうけ、子うみ、死ぬる事のみ、機嫌をはからず、ついであしとて、止むことなし。生住異滅の移り變るまことの大事は、たけき河の漲り流るゝが如し。しばしも滯らず、直に行ひゆくものなり。されば、眞俗につけて、かならず果し遂げむと思はむことは、機嫌をいふべからず。とかくの用意なく、足を踏みとどむまじきなり。

【通解】 世につれて行かうとする人は、まづ第一に物事のしほあひを知らなければならない。折の悪い事は、人の耳にも逆らひ、心にも反して、その事が成就しない。さういふ場合を心得べきである。但し、病氣になり、子を產み、死ぬといふ三つの事だけは、しほあひを計つては起らぬ、今は折が悪いからというて、止める事はない。この人生に於ける生住異滅――生ずる、とゞまる、變る、滅するといふほんとの大事は、恰も烈しい河の滔々として

漲り流れるが如くで、暫くも滯る事なく、ずん〳〵と實現して行くものである。だから、佛法上の事にしても世俗の道にして、これは是非ともしとげようと思ふ事は、しほあひを彼れ是れいうてゐてはならぬ。何かの心使ひをする事なく、愚圖々々と足踏をしてゐずに直ちに實行すべきである。

【文旨】　これも例の無常觀である。萬事を放下してこれこそといふ一大事に猛進せよといふ主張である。最初に「世に從はむ人はまづ機嫌を知るべし」というてゐるのは抑揚の筆法で、後に病症死は「機嫌をはからず」といひ、必ず仕遂げようとする事は「機嫌をいふべからず」といふ、それを強める爲めの措辭ともいへよう。要するに筆者の眼目は四相の不可抗力なる推移を高調するに存するのである。

【語義】　○世にしたがはむ人。世につれて行かうとする人、世間に順應して人附合をしようとする人。○機嫌。時機、機會、しほあひ。○ついで。折、場合。○人の耳にもさかひ。人の耳にもさからひ。他人にいうてもそれを聞入れてくれぬ意。○さやうの折節。さういふやうな時機、こんな時にやつては事がうまく成就せぬといふさうした時機をよく心得なくてはならぬの意。○機嫌をはからず。時機をはからない。今は時機がよいの悪いのといつてはゐない、突如として起つて來る。○生住異滅。佛語。萬有諸法の生滅變異する相を說く名目で、「生」は物の生ずる、「住」はとゞまる、「異」は變化する、「滅」は滅するである。之を人間畜生等の有情にあてていへば生・老・病・死の四苦である。○まことの大事。ほんとの大事。この四つが眞の重大事だといふのである。○たけき河。水勢の强く烈しい河。○直に行ひゆく。ずん〳〵と進んで行く。「行はれ行く」といふ所を、それが行つて行くといふやうに書いたのである。○眞俗。佛法につけ世間の事につけの意。○機嫌をいふべからず。時機のよしあしなどをいふべきではない、時機の事をかれこれというてゐてはならぬ。○とかくの用意なく。あゝかうの心づかひなく。あゝのかうのと色々に意を用ひて躊躇する事なく只眞一文字にその事に突入せよの意。「用意」はこゝでは仕度準備の意ではなく、心使ひ、配慮の意と見るべきだらう。○足を踏みとゞむまじきなり。愚圖々々と躊躇してはならぬ事である。愚圖々々せずどし〳〵と實行すべきものだの意。

春暮れて後夏になり、夏はてて秋の來るにはあらず。春はやがて夏の氣を催し、夏より既に秋はかよひ、秋はすなはち寒くなり、十月は小春の天氣、草も青くなり、梅も莟みぬ。木の葉の落つるも、まづ落ちてめぐむにはあらず、下よりきざしつはるに堪へずして落つるなり。迎ふる氣、下に設けたる故に、待ちとるついで甚だ早し。生老病死のうつり來ること、またこれに過ぎたり。四季はなほ定れるついであり。死期はついでを待たず。死は前よりしも來らず、かねて後に迫れり。人みな死あることを知りて、待つ事しかも急ならざるに、覺えずして來る。沖の干潟遙かなれども、磯より潮の滿つるが如し。

【通解】　春が暮れて後夏になり、夏がすんで了つてから秋が來るのではない。春は同時に夏の氣を催し、夏から既に秋の氣が通ひ、秋はそのまゝ寒くなり、十月は又小春日和で、草も青くなり、梅も莟を持つて來る。木の葉の落ちるのも、まづ落ちてから次のが芽ぐむのではなくて、下から新芽が萌し芽ぐむのに堪へられないで落ちるのだ。新を迎へる氣が、ちやんと內部に待ち構へてゐるので、それを待つて交代して行く手順が非常に早くさつさと運んで行く。人間の一生に於て生老病死の循つて來ることは、又これ以上に早い。四季にはそれでもなほ一定の順序がある。死期は順序を待ちはしない。死は前からやつて來るとは限らない、かねて、人知れず背後に迫つてゐる。人は皆死のある事を知つてゐて、而もそれを豫期する事が甚だ切でなく、さう早く來ようとは思はないのに、思ひ掛けずひよつこりとやつて來る。それは恰も沖の干潟がずつと遠くて、容易に潮が滿ちて來さうにもなく見えてゐな

から、岸の方から潮が滿ちて來て、やがて一面に滿ちてしまふやうなものである。

【文旨】前節を承けて、四季の變遷、木の葉の凋落――それは凡て次のものが下にきざすから前のものがさつさと過ぎて行くのだと說いて、さていよ〳〵文の眼目たる「死」を持出してゐる。人が呑氣に生きてゐるうしろにはちやんと死が迫つてゐる、生れて老いて病んで死ぬ、それが人生の四相であるが、それも四季の如く順序正しく來るものではない、生れてすぐにも死ねば、ぴん〳〵した血氣盛りの身でも死ぬ、全く死は「覺えずして來る」ものだというて、海岸の潮の滿ちる例を引いて文を結んでゐるのである。

【語義】○やがて　そのまゝすぐに、春でありながら同時に。○秋はかよひ　秋の氣がかよひ、夏の內に早くも秋の氣が通ひ。○すなはち　そのまゝすぐに。「やがて」も同義。○小春　陰曆十月、今の十一月の末頃、卽ち冬の始めの候、春のやうに天氣の和暖なのをいふ。從つて十月の異名としてもいふ。○荅みぬ　つぼみが出來る。こゝの「ぬ」は强勢の修辭。○きざしつはる　きざし芽ぐむ。「つはる」は身ごもるの意で、芽が下にきざし身ごもつて出て來る、卽ち芽ぐむのをいふ。○迎ふる氣云々　新しい物を迎へる氣がちやんと下に待ち構へてゐるので、從つて新を迎へて舊い物の辭し去る手順がさつさと早く運んで行く、といふ意。「待ちとる」は待ち受ける、待ち受けて或事をするといふ意の慣用動詞。○生老病死　生れて老いて病んで死ぬ。これを四相とも四苦といつて、生涯に於て避ける事の出來ぬ四つのすがた、四つの苦惱である。○これに過ぎたり　四季の變遷よりも更に早い。○死は前よりしも來らず　死は必ずしも前方から來るといふものではない。「しも」は强勢の詞。死の來る事の人の目に分らぬ意をいうたものである。○かねて後に迫れり　豫め後方に迫つてゐる。「前よりしも來らず」を更に明かにして、こつそりうしろに迫つてゐるというたのである。○待つ事しかも急ならざるに　而も之を期待する事が急切でなく、そんなにせつぱつまつたものとも豫期してゐないのに、といふ意。○覺えずして　思ひ掛けないで、さういふ自覺のない所へ突如として。○沖の干潟云々　潮が引いて沖の方遙かに干潟になつてゐて、まだ〳〵容易に潮が滿ちて來さうにもなく見えてゐる內に、却て海岸の方から潮が滿ちて來て、段々と一面に滿ちて行くといふ喩。「干潟」は海中の潮の干た所。潮が干て地面が水上にあらはれてゐる所。「磯」は海岸。

第百五十六段

大臣の大饗は、さるべき所を申しうけて行ふ、常のことなり。宇治左大臣殿は東三條殿にて行はる。內裏にてありけるを、申されけるによりて、他所へ行幸ありけり。させる事のよせなけれども、女院の御所など借り申す故實なりとぞ。

【通解】大臣に任ぜられた折の大饗は、然るべき所を朝廷へ願つて拜借して行ふのが、通例である。宇治の左大臣殿は、東三條殿で行はれた。當時その御殿は內裏になつてゐたのを、お願ひなされたので、陛下は他所へ行幸遊ばされた。別段外戚などいふ御緣故がなくても、女院の御所などを拜借するしたきりだといふ事だ。

【語義】○大臣の大饗　任大臣の披露式。大臣に任ぜられた人が、公卿を招いて行ふ披露の饗宴。○さるべき所　然るべき所、相當な所。○申しうけて　願つて借り受けて、拜借して。○常のことなり　通例の事である。さうするのが普通になつてゐるの意。○宇治左大臣　藤原賴長。宇治惡左府と呼ばれた。關白忠通の弟で、崇德上皇をすすめて保元の亂を起した人。○東三條殿　三條大路の北に面し、烏丸と東洞院との間に在つた內裏。○內裏にてありけるを　御所であつたのを。當時天皇がこの東三條殿に居られたといふのである。○申されけるによりて　拜借を願出たために。○させる事のよせなけれども　さしたる因戚等の關係なくとも。「させる」は、さしたる、格別の、別段これといふ、等の意。「事のよせ」は事の緣故の意。卽ち其の女院との因戚上の關係等をいふ。「なけれども」は

既定の形であるが、「ないけれども」の意ではなくて、「なくとも」の強調表現と考へられる。○女院　母后又は女御、内親王等で特に院號を奉つた御方の稱。○故實　先例、古式。それが昔からの式作法としてきまつた習はしになつてゐるの意。

第百五十七段

筆をとればもの書かれ、樂器をとれば音をたてむと思ふ。盃をとれば酒をおもひ、賽をとれば攤うたむことを思ふ。心はかならず事に觸れて來る。假にも不善のたはぶれをなすべからず。あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。卒爾にして多年の非を改むることもあり。假に今この文をひろげざらましかば、このことを知らむや。これすなはち觸るゝ所の益なり。

【通解】筆を取れば自然と何か書くやうになり、樂器を取れば音をたてゝ見ようと思ふ。盃を取れば酒がほしくなり、賽を取れば雙六をやらうといふ氣になる。人の心は必ず何か事に觸れて起つて來るものである。だから假にも善くない戯をしてはならない。つい一寸かりそめに經文の一句を見ると、自然とその前後の文も目につく。それでふッと一朝にして多年の誤を改める事もある。假に今この經文をひろげて見なかつたとしたら、どうしてその誤に氣附かうや。これ即ち物に觸れたが爲めに得る所の利益である。

【文旨】人の心は環境によつて色々と動く。だから接觸する所を愼んで、假にも不善の戯をしてはいけない。一寸經文を開いても、その爲めに多年の非を改める事もある。よいものに接觸すれば常にさうした利益がある。といふて、次節の本論に這入る素地を爲したのである。

【語義】○もの書かれ　自然と何かが書ける。「書かれ」の「れ」は自然動作をあらはす助動詞。○攤うたむ　雙六をしよう。「攤」はもと錢打というて、錢を兩掌の内に持つて、よく念じて擲ち、其のなめかたの現れ方で勝負を決する遊戯の稱であつたが、後には一般に雙六の別名となつてゐた。○心は云々　人の心は必ず何か事に觸れて起つて來る。何か物事に觸れると、それをやつて見ようといふ心の働きが起つて來る、それをいふのである。○あからさまに　かりそめに、つい一寸。○聖教　經文、佛教上の教典。○何となく　自然と、別段見ようとして佛書をひろげるも自然に。○前後の文も見ゆ　その一句の前後の文も目にはひる。一寸經文の一句を見ようとして佛書をひろげると、別段見る氣はなくても自然とその前後の所も目に這入るといふのである。○卒爾にして　ふッとして、思ひも掛けず一朝にして。○多年の非　長年の誤。今迄長い間抱いてゐた間違つた考。○このことを知らむや　この事を知らうや知りはしない。「や」は反語、自己の多年の非を氣づかずに了ふといふ意。○この文　聖教即ち經文を指す。

心更に起らずとも、佛前にありて、數珠を取り、經を取らば、怠るうちにも、善業おのづから修せられ、散亂の心ながらも、繩床に坐せば、おぼえずして禪定なるべし。事理もとより二ならず。外相もしそむかざれば、内證かならず熟す。強ひて不信といふべからず。仰ぎてこれを尊むべし。

【通解】求道の心は少しも起らないでも、佛様の前に居て、數珠を取り、お經を取つたら、なまけてゐながらも、善業は自然と行ぜられ、氣が散つてゐながらも、繩床に坐つてゐれば、我知らず心が寂靜統一の境地に入るであらう。事と理即ち相對の現象と絶對の實在とはもとより別々のものではない。外面の形が若し道に背かなければ、内

心の悟は必ず熟する。だから外面の形を修する事を強ひて不信といふべきではない。どこ迄も之を仰ぎ尊むがよい。

【文旨】「心は物に觸れて來る」といふ論歩を進めて信仰上の問題に這入つたのである。信仰は心だ、形ではない、いくら佛様の前で御經を讀み、座禪の床に坐つてゐても、心に信念がなくては何にもならぬ――それは如何にも眞理のやうであつて實はさうでない。形と理、現象と實在、それはもと〳〵唯一不二であつて、眞理のあらはれが事相であり、事相の本體が眞理である、信仰心はなくとも兎に角佛前にお念佛を申してゐれば、自然と善業は修せられる、外部の形を整へてゐれば、自然と内心の悟は出來て來る、といふのである。これも兼好の主張の一つで、諸所に此の思想が散見してゐる。つまり屁理窟をこね廻してゐるよりお經の一卷も上げるがよいといふのであつて、「事理不二」といふやうな事も、深い佛教上の理論から根本的に論議してゐるのではない。

【語義】○心更に起らずとも　求道の念は少しも起らないでも。○善業　善果を受くべきよい業因。「業」とは吾吾の身・口・意の三に作す所の行爲の稱。○散亂の心　靜かでない心、專念でないこと。心が物事に動かされて氣が散つてゐて專一でないのをいふ。○繩床　繩を張つた粗末な椅子、禪者の用ひるもの。○おぼえずして　思はず識らず。さうと自分で氣がつかないでも自然に。○禪定　寂靜にして精神統一の狀態。正しく眞理を思惟し、安靜に思慮して、心を一處に住せしめて、動亂せしめないのをいふ。○事理　現象と實在。事と理とはもと〳〵別處に列在するものではなくて、恰も水と波との如く、事のまゝに理であり、理のまゝに事であるといふ所から「事理不二」といふ。「事理もとより二ならず」は此の詞を直譯したのである。○外相　外面のかたち。即ち「事」に當る。○そむかざれば　道に背かなければ、理に反してゐなければ。○内證　内心の證悟。○熟す　ほんとに出來上る。○強ひて不信といふべからず　無理に不信というてはならぬ、外面的の信仰を強ひて不信だ下らないといふべきではない。○これを　外相の道にそむかぬ事を。即ち表面的にでも、形だけでも、お念佛を申し又は座禪をする事をである。

第百五十八段

「盃のそこを捨つる事は、いかゞ心得たる」とある人の尋ねさせたまひしに、「凝當と申し侍るは、そこに凝りたるを捨つるにや候ふらむ」と申し侍りしかば、「さにはあらず、魚道なり。流を殘して、口のつきたる所をすゝぐなり」とぞ仰せられし。

【通解】「盃の底を捨てる事は、どういふ意味と思つてゐるか」と、或人がお尋ねになつたので、自分は、「その事を凝當と申しまするは、底にこびりついたおりを捨てるといふのでもございませうか」と申しましたら、「いやさうではない、それは魚道ぢや。流を殘して、口のついた所をゆすぐのだ」と仰せられたことであつた。

【文旨】例の考證趣味で、當時の献酬上の風習と詞とについて自分の考を或貴人に反駁された事を筆錄したといふ迄で、その說に服したといふ趣は見えてゐない。

【語義】○盃のそこを捨つること　人に献酬をする時、盃の底に少し酒を殘してそれを捨てること。○いかゞ心得たる　どう心得てゐるか、どういふ意味と思つてゐるか、○凝當　酒の献酬に餘瀝を捨てる事を當時の詞でギョートーといひ、又餘瀝をこぼす器、即ち今の盃洗のやうなものをもさう呼んでゐたやうである。それを兼好は「凝當」の字と考へて――若しくは一般に世間でその字を用ひ習はしてゐたので――「當に凝りたるを捨つ」と解してゐたのである。「當」の字はッコと訓ずる。「凝りたろ」は、こびりついたおり、殘つたおりの意。○申し侍るは「申し侍りそは」と考へてよからう。世間でそれを凝當と申しますがそれはの意。○魚道　ギョートーといふのは凝當ではなく、ギョドー（魚道）の訛だといふのである。下學集に『魚道者建ニ殘盃ニ器也、以ニ餘瀝ニ洗ニ杯滓ニ、喻ニ之魚過』

舊道ニ故云ニ魚道一也』と見えてゐる。それに基いての意見だらう。○流を殘して　口をつけた所へ流すやうに盃の底に少し酒を殘すのをいふ。

第百五十九段

「みなむすびといふは、絲をむすび重ねたるが、蜷といふ貝に似たればいふ」と、或やんごとなき人仰せられき。になといふは誤なり。

【通解】「みなむすびといふのは、絲を結び重ねたさまが、蜷といふ貝に似てゐるからいふのだ」と、或高貴の方が仰せられた。して見ると世間で「にな」といふのは誤である。

【語義】○みなむすび　紐の結び方の名。公卿の表袴、又は僧の袈裟などの飾に、絲をあはび結びの樣に、長く小さく結んだものといふ。○蜷　湖、川、溝等に住む一寸位の小貝で、螺旋のやうに殼の卷上つてゐるもの。○やんごとなき　貴い。○になといふは誤なり　になといふのは間違だ。「みなむすび」を世間で「になむすび」といふのは間違だといふのだらう。所が字書に從へば「みな」も「にな」も共にあつて、寧ろ「にな」の方が普通になつてゐるから誤といふべきではなからう。思ふに「みな」の方が古い詞で、兼好當時から――或はもつと前から――「にな」となつて今日に及んでゐるのだらう。

第百六十段

門に額かくるを、「うつ」といふはよからぬにや。勘解由小路の二品禪門は、「額かくる」とのたまひき。「見物の棧敷うつ」もよからぬにや。「平張うつ」などは、常の事なり。「棧敷構ふる」などいふべし。「護摩たく」といふもわろし。「修する」「護摩する」などいふなり。「行法」も「法」の字をすみていふ、わろし、濁りていふと、清閑寺僧正仰せられき。常にいふ事に、かゝることゝのみ多し。

【通解】門に額をかけることを、「額うつ」といふのはよくないのだらうか。勘解由小路の二品禪門は、「額かくる」と仰せになつた。「見物の棧敷うつ」といふのもよくないのだらうか。「平張うつ」などいふのは普通一般の事である。然し棧敷の方は「棧敷構ふる」などいふがよい。「護摩たく」といふのもよくない。「護摩修する」「護摩する」などいふのである。「行法」も「法」の字を清んでいふのはよくない、濁つていふのだと、清閑寺の僧正が仰せられた。ふだんいふ事に、こんな風の間違が仲々多い。

【文旨】例の考證趣味から日常語の誤を指摘したいといふまでである。クォーテーションがはつきりしない。全文が清閑寺僧正の言のやうにも考へられるが、文初の調子から見ると、「護摩たく」以下が僧正の言のやうでもある。なぜさういふのが惡いかについては原文そのものに言明されてゐないのであるから、強ひて考證探求する必要はない。吾々はこの文を通して、當時一般に亂れてゐた言詞遣をひどく氣にしたらしい、尙古趣味の人にありがちな、さうした兼好の片影を認め得ればそれでよい譯である。

【語義】○うつ　平家物語に額打論といふのがあつて、その文中には『額を打つ』の言葉が澤山出てゐる。蓋し「額うつ」といふ語は當時一般に用ひられてゐたのであらう。○よからぬにや　よくないのであらうか。○勘解由小路の二品禪門　從二位藤原經尹。大納言行成卿の後で、代々世尊寺流書道の宗家として、この人も有名な書家で、

諸寺の門額など書いた人である。○見物の　何か物を――例へば祭などを見物する場合の。○平張　日おほひの爲めに、上に平らに張つた幕をいふ、今日のテントのやうなもの。○常の事なり　普通の事である。平張は常に「うつ」といひ習はしてゐる。○護摩　梵語、焚燒と譯する、木を燒いて、智慧の火で煩惱を燒盡すといふ意味の密教の行事。○行法　佛法上の修行。○清閑寺僧正　道我僧正をいふ。清閑寺は清水寺の東南で、もと延暦寺末、今眞言宗智積院に屬してゐる。

第百六十一段

花の盛は、冬至より百五十日とも、時正の後七日ともいへど、立春より七十五日、おほやうたがはず。

【通解】櫻の花盛は、冬至から百五十日目だともいひ、彼岸の中日の後七日目だともいふが、立春から七十五日目といふ所が大體狂はない。

【文旨】花盛りについての曆學者などの意見を、兼好が年々の實驗に徵して批判したのだらう。一寸した事だが作者の自然現象についての深い憧憬が窺はれて面白い。冬至から百五十日とすると五月二十頃になつて遲過ぎる。それにつけて橘氏は原文が「百五日」とあつたのを誤寫したのではないかといつて居る。

【語義】○花の盛　櫻花の盛。○冬至　太陽が赤道から一番遠く南に行つた時で、日の最も短い時、今では十二月廿二三日に當る。○時正　彼岸の中日、晝夜平分の時。○立春　冬から春に轉ずる日、春の第一日で、二月三四日に當る。○おほやう　大體、大抵。

第百六十二段

遍照寺の承仕法師、池の鳥を日ごろ飼ひつけて、堂の内まで餌をまきて、戸一つをあけたれば、數も知らず入りこもりける後、おのれも入りて、立てこめて、捕へつゝ殺しけるよそほひ、おどろおどろしく聞えけるを、草刈る童聞きて、人に告げければ、村の男どもおこりて、入りて見るに、大雁どもふためきあへる中に、法師まじりて、うち伏せねぢ殺しければ、この法師を捕へて、所より使廳へ出したりけり。殺すところの鳥を首にかけさせて、禁獄せられにけり。基俊大納言、別當の時になむ侍りける。

【通解】遍照寺の雜役をする坊主が、池の鳥を日頃から餌をやつて馴しておいて、堂の内まで餌をまいて、入口の戸を一つあけておくと、鳥は餌に釣られて無數に堂の内へ這入り込んだ、そのあとから自分もなかへ這入つて、戸をしめ切つておいて、捕へては殺し、捕へては殺した、その樣子物音が、物すさまじく外へ漏れ聞えたのを、草刈りの童が聞きつけて、人に告げたので、村の男達が大勢出て來て、堂内に這入つて見ると、大きな雁がいくつもばた〳〵やつてゐる中に、坊主がまざつて、打伏せねぢ殺してゐたので、男達はこの坊主をつかまへて、その土地から檢非違使廳へ突き出したのであつた。廳では殺した鳥を首に懸けさせて、牢屋へお入れになつたのであつた。これは基俊大納言が、檢非違使の別當の時でありました。

【文旨】殺生も殺生、兼ねてたくらんだ念入りの殺生である。そのむごたらしいさまを、かなり委曲に描寫して

おいて、文末にそれを處分した檢非違使の別當の名を出してゐるのは、さうした坊主の仕打ちを憎むと共に、その處罰の方法の宜しきを得たのに敬服して書いてゐるのだらう。

【語義】 ○遍照寺　嵯峨の廣澤の池のそばにあつた眞言宗の寺。○承仕法師　持佛の莊嚴等の雜役などする僧。固有名詞ではない。○飼ひつけ　飼ひ馴して。常日頃餌を與へて自分に馴れさせたのである。○あけたれば　あけておくと。○入りこもりける後　這入り込んだ後、堂の内に這入つて來た後に。○立てこめて　戸をしめきつて。その一つの入口を閉ぢて鳥が遁げられぬやうにしたのである。○捕へつゝ　捕へては。「つゝ」は事の繰返しをあらはす語。ながらではない。○よそほひ　樣子、有樣。形にも音にもいふ、こゝは外部にもれた仰山な音をさしていうてゐる。○おどろおどろしく　おそろしく大きく、物すさまじく。鳥の悲鳴や羽音の非常なのをいふ。○おこりて　方々から澤山立ち出て。○大雁　大きな雁。「大雁」といふ名の特別の鳥ではない。○ふためきあへる　互にばたばたと音を立ててゐる、何れもあわてくさつてばたゝくと逃げまはつてゐる。○まじりて　まざつて、一緒になつて。○所より　その土地から。その村が訴人になつて訴へ出たといふのである。○使廳　檢非違使廳。○殺すところの　殺した所の。○禁獄せられにけり　牢屋に入れられた、獄につながれた。「せられ」は敬稱で、別當の命として使廳においてさうされたといふのである。○基俊大納言　前の九十九段に出てゐたのと同じ人で、弘安八年九年に檢非違使の別當であつた。○別當　檢非違使の別當卽ちその長官。

第百六十三段

太衝の太の字、點打つ打たずといふこと、陰陽のともがら、相論のことありけり。もりちか入道申し侍りしは、「吉平が自筆の占文の裏に書かれたる御記、近衛關白殿にあり。點うちたるを書きたり」と申しき。

【通解】 太衝の太の字に點を打つ打たないー「太」と書くが正しいか「大」と書くが正しいかといふ事を、陰陽道の連中が、互に議論しあつた事があつた。その時もりちか入道の申した事には、「安倍吉平の自筆の占文の裏に書かれた御日記が、近衛關白家にある。その占文には點をうつた太の字が書いてある」と申した。

【文旨】 これも細かい考證に興味を持つて筆錄した一つである。兼好の斯うした方面はどこ迄も尙古一點張で、それ自體の研究に突き入るといふ行き方ではなかつた。

【語義】 ○太衝　陰陽道で用ひる九月の異名。○陰陽のともがら　陰陽師たち、陰陽寮の人々。陰陽寮は中務省に屬して、天文、曆數、占筮等の事を司つた役所。○相論　互に論じ合ふこと、議論。○もりちか入道　傳不明。○吉平　天文博士安倍晴朗の子で、三條後一條頃の陰陽道の大家。○占文　占ひの事を書いた書類。○御記　天子の書かせ給ひし日記の稱。橘氏の說によれば、吉平が朝廷に奉つた占文の裏に、どのか天皇が日記を書かせ給ひ、それを近衛家で祕藏して居たのだらうといふ。

第百六十四段

世の人相逢ふ時、しばらくも默止することなし。かならず言葉あり。そのことを聞くに、おほくは無益の談なり。世間の浮說、人の是非、自他のために失多く得少し。これをかたる時、たがひの心に、無益のことなりといふことを知らず。

【通解】世間の人が出逢つた時、一寸の間も默つてゐる事はない。必ず何かしやべつてゐる。その云つてゐる言を聞いて見ると、多くは何の益もない話である。世の中のいゝ加減な噂話とか、他人のよしあしの批評とかいふ類で、相互の爲めに損が多くて利は少ない。所がそんな事を話し合つてゐる時、お互の心に、それが何の役にも立たぬ事だといふ事を自覺してゐない。

【文旨】世間の人が出逢ふと必ず愚にもつかぬ事を得々としやべり合ふ、而もそれが何の役にも立たぬといふ事に氣づいてゐない、なさけない譯だといふのである。獨り靜かに樂む、兼好のさうした態度はこの段ばかりでなく隨所に見えてゐる。

【語義】○默止する　默つてゐる。○そのこと　その言葉。○浮說　根もない噂話、根據も何も無い話。○人の是非　人のよしあし、他人に對する兎角の批判。○自他のために　自分のためにも他人のためにも、お互の爲めに。○失　損失。○得　利得、利益。○たがひの心　話し合つてゐる同士の心。

第百六十五段

あづまの人の、都の人にまじはり、都の人の、あづまに行きて身をたて、また本寺本山をはなれぬる顯密の僧、すべて、わが俗にあらずして、人にまじはれる、見ぐるし。

【通解】東國の人が、京都の人士に立ち交はるとか、都の人が、東國へ行つて身を立てるとか、又は本寺本山を離れてしまつてゐる顯敎の諸宗や密敎たる眞言の僧とか、凡て自分本來の畑でなくて、人に交つてゐるのは、見苦しいものだ。

【文旨】第百六十七段の文初に書いてゐる思想ともどこか共通した所がある。凡て畠違ひの人はどことなくしつくりせぬ所がある。田舍者は田舍に、都の人は都に、顯敎の僧は顯敎の寺に、凡て自分の育つた畠でやつて行くがいゝ、場違ひは見苦しいものだといふのであらう。

【語義】○あづまの人　東國の人、東國生れの人。○身をたて　生計の道を立て。○本寺本山　本寺も本山も同意で、一宗の諸末寺の長たる寺をいふ。○はなれたる　離れた。緣を切つて他宗に入つたといふ意。○顯密の僧　顯敎密敎の僧。「密」は密宗卽ち眞言宗の事で、それに對して他宗を凡て顯敎といふ。從つて「顯密の僧」は一切各派の僧の義である。○我が俗にあらずして　自分の本來の立場でなくて。こゝの「俗」は生活環境、所謂ハタケといふ心持の用語例と考へられる。

第百六十六段

人間の營みあへるわざを見るに、春の日に雪佛をつくりて、そのために金銀珠玉の飾をいとなみ、堂を建てむとするに似たり。その構へを待ちて、よく安置してむや。人の命ありと見るほども、下より消ゆること、雪のごとくなるうちに、いとなみ待つこと甚だおほし。

【通解】世間で互にせつせとやつてゐる事を見ると、丁度春の日に雪佛を拵へて、その爲めに骨を折つて金銀珠玉の飾を作り、堂を建てようとするに類してゐる。どうしてその堂の出來上るのを待つて、雪佛を安置する事が出來よう。人がまだ〳〵澤山壽命があると思つてゐる其の間も、內部からどん〳〵生命の消えていくこと、恰も雪の通りであるそのなかに、色々とあくせくやつて其の成るのを待つ事が餘りにも澤山にある。

【文旨】例の無常觀だが、「春の日の雪佛」が一寸面白い。春の日の雪佛が刻々に消えて行くやうに、人は生きてゐると思ふ間も刻々と目に見えずに死んで行きつゝあるのだ、斯うして斯うと色々經營期待した所で、それの出來上る時分には自己當體は既に死滅してゐよう、それこそ雪佛の爲めに飾りを作り堂を營むの愚と何の擇ぶ所もない、といふのである。

【語義】○人間　世間、世の中。こゝは「世間の人々」といふ心持で、「人間の」がすぐ下の「いとなみあへる」の主格を成してゐると考へられる。理論的にいへばその句を隔てて下の「わざ」に掛る形修のやうにも考へられるが、それはこゝの文調に自然でないやうだ。○營みあへる　しあつてゐる、お互に色々とあくせくやつてゐる。○春の日に　特に融け易いといふ感じを働かせる爲めに斯う書いたのだらう。○雪佛　雪で佛の形を作つたもの。雪達摩の類。○堂　「堂塔」となつた本もある。今古い本に從つて「塔」の字を省く。○構へを待ちて　堂の出來上るのを待つて。○よく安置してむや　安置する事が出來ようや、雪佛はすぐ融けて了ふから、堂が出來ても安置する事が出來ない。「てむや」はこゝは可能の反語になつてゐる。○見るほども　見る間も、思つてゐるその内にも。○下より消ゆる　内部から消えて行く。目には見えないが而も命は刻々に消えて行く、その感じを「下より」といふたのだらう。又雪達摩も形はちやんとしてゐるのに目に見えぬ下の方が融けてごそりと下に落ちるやうな事がある。それ等を思ひ合せて書いたのだらう。○いとなみ待つ　色々と經營してその出來上るのを待つ。「いとなみ」は動詞の連用形。名詞ではない。

第百六十七段

一道にたづさはる人、あらぬ道の席にのぞみて、「あはれ我が道ならましかば、かくよそに見侍らじものを」といひ、心にも思へること、常のことなれど、よにわろく覺ゆるなり。知らぬ道の羨しく覺えば、「あならやまし。などか習はざりけむ」と言ひてありなむ。

【通解】或一つの道を專門にやつてゐる人が、專門外の道の席上に出て、「あゝこれが自分のやつてゐる道だつたら、斯うして傍觀しては居りますまいものを」と口にいひ、或はさう心の内に思つてゐる事は、世間にありがちの事だが、それは實に見ッともない事だと思ふ。若し知らない道が羨しく思はれたならば、「あゝ羨しい。なぜ自分は習はなかつたらう」と云つてゐるがいゝ。

【文旨】何でも慢心してはいけない、えらがつてはいけないといふ事を述べるための段取として、自分の專門外の席に臨んだ場合に、世人にありがちな負け惜みを持出して、それを排してゐるのである。「よにわろく覺ゆるなり」は批判よりも寧ろ憎惡の氣分である。

【語義】○たづさはる　關與する、關係する、やる。○あらぬ道の席　自分の專門外の道の席上。こゝの「あらぬ」は他の、外のといふ意。○よそに見侍らじものを　傍觀しては居りますまいのに。「ものを」は下に或省略のあるのを常とする、こゝでは「實になさけない」「どうも專門外だから殘念だ」といふ樣な心持を含めたものと思つてよからう。○心にも思へる　或は心で思つてゐる、口に出して言はぬ迄も心でさう思つてゐる。○よにわろく　非常に卑しく。「よに」は甚だ、非常にの意。「わろく」は「わろしと」で、見ッともない事だと、實に不體裁だとの意。○言ひてありなむ　言うてゐるがいゝ。こゝの「ありなむ」もその方がいゝといふ選擇の心持である。

我が智を取り出でて人に爭ふは、角あるものの角をかたぶけ、牙あるものの牙をかみいだす類なり。人としては、善にほこらず、物と爭はざるを德とす。他に勝ることのあるは大なる失なり。

品の高さにても、才藝のすぐれたるにても、先祖の譽にても、人にまされりと思へる人は、たとひ言葉に出でてこそいはねども、内心に若干のとがあり。愼みてこれを忘るべし。をこにも見え、人にもいひけたれ、禍をも招くは、たゞこの慢心なり。一道にもまことに長じぬる人は、みづから明かにその非を知るゆゑに、志常に滿たずして、つひに物に誇ることなし。

【通解】自分の智惠を持出して人と爭ふのは、例へば角のあるものが角を傾けて敵を突かうとし、牙のあるものが牙をかみ出して敵を嚙まうとする類である。獸なら仕方もないが、人としては、自分の善い事にほこらず、他と爭はぬのがよい事だ。他にまされりとする所のあるのは、大きな缺點である。家柄の高いといふ事にしても、才藝のすぐれてゐる事にしても、自分の先祖の譽れにしても、人にまさつてゐると思つてゐる人は、たとひそれを言葉に出していはぬ迄も、内心にそれだけの大きな難點がある。愼んで斯うした考を忘れるがいゝ。馬鹿々々しくも見え、人にもいひけなされ、禍をも招くのは、たゞこの慢心である。一道にもほんとに長じた人は、自分自身明かにその缺點を知るからして、志は常に滿たず、これでいゝとしないで、どこ迄も物に誇るといふ事はない。

【文旨】智を出してはいかぬ、增長してはいかぬ、何事によらずおれはえらいといふ氣が出ると、よしやそれを口に出さないでも、さう思ふだけで既に心にそれだけの難がある、凡そつまらぬものは慢心だ、苟も一道に長じた人は、自分で自分の非が分るから、永久に不滿を感じてゐて、決して誇るといふ事はない、といふのである。

【語義】○善にほこらず　自分の善事長所を自慢せず。○物と爭はざる　他と爭はない。「物」は「人」といふと同意で、何かにつけて人と爭はぬといふ意。○德とす　德とする。……が德だ、……が値打だ、……がよい所だといふ思想。○他に勝ることのあるは　おれは人よりえらいといふ自覺を持つのは。原文の文字通りに解釋すれば、他より勝れてゐる事のあるのはとなるが、まさつてゐる事自體が「失」でなくて、さういふ意識を持つて、從つて人を馬鹿にするやうになるのが「失」だといふのである。○失　缺點、よくないこと。○品の高さ　身分家柄の高さ。○いはねども　いはないでも、いはぬにしても。上に「たとひ」とある假設形式の呼應としては「いはずとも」とあるべき所、それを「こそ」で强め、既定の「ねども」で强めたまでで、「いはないけれども」といふ既定事實でない事勿論である。○若干の　隨分多くの。多くのといふのを不定に曖昧にいふ慣用句。○とが　とがむべき所、難點。○これを　まされりと思ふその思を。○をこにも見え　馬鹿氣ても見え。○人にもいひけたれ　他人にもいひけなされ、人からも色々と非難され。○その非　自分のよくない所。○志常に滿たずして　自分の向上心がいつもそれでよいと滿足しないで。○つひに　どこまでも、いつまでも、しまひまで。

第百六十八段

年老いたる人の、一事すぐれたる才能ありて、「この人の後には、誰にか問はむ」などいはるゝは、老の方人にて、生けるもいたづらならず。さはあれど、それもすたれたる所のなきは、一生この事にて暮れにけりと拙く見ゆ。「今は忘れにけり」といひてありなむ。大方は知りたりとも、すゞろにいひ散らすは、さばかりの才にはあらぬにやと見え、おのづから誤もありぬべし。「さだかにも辨へ知らず」などいひたるは、なほまことに道のあるじとも覺えぬべし。まして、知らぬこと、したりがほに、おとなしく、もどきぬべくもあらぬ人のいひ聞かするを、さもあらずと思ひながら聞き居たる、いとわびし。

【通解】年取つた人が、何か一事すぐれた才能があつて、「この人の死後には、誰にこの道の事を尋ねよう」などといはれるのは、それこそ老人の味方――老人の爲めに氣を吐く者で、さういふ人は長生きをしてゐても無意味ではない。さうではあるが、然しそれもどこかすたれてうまく行かなくなつた所のないのは、一生涯この事に掛りきりで暮して了つたのだなアと、如何にもつまらなく見える。「いやもう忘れて了ひましたよ」というてゐるがいゝ。大體はよく心得て居るにしても、むやみとその事をいひ散らすのは、それほど大した才ではないのだらうかと思はれるし、又さうしてしやべつてゐる中には自然誤もあるに違ひない。「いやはつきりと辨へて居りません」などといつてゐるのは、やはりほんとに斯道の大家だとも感じよう。まして、知りもせぬ事を、得々然として、而もちやんとした、こちらから非を打つ事の出來ぬやうな人が言つて聞かせるのを、そんな事は無いそれは間違つてゐるがなアと思ひながらだまつて聞いてゐるのは、實にやりきれない。

【文旨】大體兼好は年寄りをすかぬ、殊にその圖々しく人中に出しやばつてなりふりも構はぬ事にひどい反感を抱いてゐる事は前にも見えてゐる。こゝではその老人に一寸花を持たせて、老人でも一事特にすぐれてゐて、この人の死後は誰にこの道の事を尋ねよう抔と人に仰がれる人は生きてゐるのも意味がある、といふそばからすぐに、それも年取つたらどこか廢れた所のあるがいゝ、「今は忘れにけり」というてゐるがいゝと論じてゐる。兼好の趣味はどこ迄も物に執著せず、さらりとして、間の抜けたやうな所にある。「すたれたる所」といふ一句が「今は忘れにけり」と呼應して、よくさうした心持を出してゐると思ふ。老人の事に關聯して、更に一般に、えらがり知つたか振りをする者はつまらぬ、「よくも存じません」などといふと如何にもなつかしいといひ、更に又、知りもせぬ事を得々然として、それもちやんとした、横槍を入れる事の出來ぬやうな人の言つて聞かせるのを、違つてゐるがなアと思ひながら默つて聞いてゐる抔は實にやりきれないというて、吾々の日常經驗する事を、如何にも穿つた言葉でさら〳〵と描寫してゐる。

【語義】○後には　死んだ後には。○老の方人　老人の味方、老人仲間の爲めに氣を吐く人。○生けるもいたづらならず　生きてゐる事も無意味ではない、それなら年取つてよぼ〳〵して生きてゐても生きるだけの意味がある。○すたれたる所　廢れた所。衰へて拙くなつた所とか、忘れてうまく行かぬやうになつた所とかをいふ。○一生この事にて云々　年取つてまで一點の缺點もないとなると、一生其の才能だけにかゝりきりで心のゆとりもなく只もうそれに夢中になつて暮して了つたのだなアと思はれて、何だか其の人がつまらなく見えるといふ意。○いひてありなむ　いうてゐるがいゝ。こゝも選擇の意の「ありなむ」。○大方は　大體は、あら方は。○すゞろに　むやみと、やたらに。○さばかりの　それほどの、さう大した。○さだかにも辨へ知らず　はつきりとも辨へ知らない、よくは存じません。「も」は輕い感興の助詞。○なほ　やはり、やはりどうも。○道のあるじ　その道の棟梁、斯道の第一人者。○覺えぬべし　思はれるに違ひない。その詞を聞いて誰しもさう感ずるに違ひないといふ意。○したりがほに　得意顔に、得々然として。○おとなしくもどきぬべくもあらぬ人　ちやんとしてこちらから非を打つべくもない人。「おとなし」は年配身分凡て相當で輕く扱ふ事の出來ぬといふ意。「もどく」は非難する、非を打つ、横槍を入れる。○さもあらず　そんな事はない、それは違ふ。○わびし　つらい、難儀だ、閉口する、やりきれない。

第百六十九段

何事の式といふことは、後嵯峨の御代まではいはざりけるを、近き程よりいふ詞なりと、人の申し侍りしに、建禮門院の右京大夫、後鳥羽院の御位の後、又うちずみしたることをいふに、「世の式も變りたる事はなきにも」と書きたり。

【通解】何々の式といふことは、後嵯峨の御代までは云はなかつたのを、近い頃になつてからいふ詞であると或人が申しましたが、建禮門院の右京の大夫が、後鳥羽院の御即位の後に、再び宮中にあがつて仕へた事をいつてゐる所に、「世の式もかはりたる事はなきにも」と書いてある。

【文旨】これも尚古趣味からの詞の考證で、世間でよく何々の式といふ、その詞は、後嵯峨の御代までは云はなかつたものだと或人から聞いた、所がふと右京大夫集の中に「世の式」といふ詞が見つかつたので、して見ると後嵯峨の御代よりずつと前から使はれた言葉で、さきに聞いた說は誤つてゐるのだといふ心持で記錄したものであらう。群書類從所收の右京大夫集には「世のけしきも」とあるが、それは寧ろ誤で、他の類例から見てもやはり「世のしきも」とあつたものだらうといふ。

【語義】○何事の式。何々の式。「式」は儀式の式で、仕方、やり口、風習等の義にいうたものと考へられる。「何事の」は例へば後に「世の式」とあるやうに、式に關する修飾語を、一般的にいうた言葉遣だらう。○建禮門院の右京大夫　建禮門院に仕へた右京の大夫といふ女官。「建禮門院」は高倉天皇の中宮平德子。○うちずみしたる宮中に仕へ內裏のうちに定住したの意。○世の式も云々　世の中の一般の風も別段以前と變つた事はないのにつけてもといふ意。

第百七十段

さしたる事なくて、人のがり行くは、よからぬことなり。用ありて行きたりとも、その事はてなば、とく歸るべし。久しく居たる、いとむつかし。人と向ひたれば、詞おほく、身もくたびれ、心もしづかならず、萬の事さはりて、時をうつす、互のため益なし。厭はしげにいはむもわろし。心づきなき事あらむをりは、なか〳〵その由をもいひてむ。おなじ心に、向はまほしく思はむ人の、つれ〴〵にて、「今しばし、今日は心しづかに」などいはむは、この限にはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべきことなり。その事となきに、人の來りて、のどかに物語して歸りぬる、いとよし。また文も、「久しく聞えさせねば」などばかり言ひおこせたる、いと嬉し。

【通解】格別これといふ用も無くて、人の所へ行くのは、よくない事である。用があつて行つたにしても、その用事が濟んだら、さッさと歸るがいゝ。人がいつ迄も長居をしてゐるのは、實に煩はしく迷惑なものだ。人と對坐して居ると、自然口數も多く、からだもくたびれ、心も靜かでなく、色々な事に差支へて、時間を空過する、それはお互の爲めに何の益もない。さればとて折角の來客に對してさも厭さうに當つけがましくいふのもよくない。だから客にあられるのが氣に染まぬ事のあるやうな場合には、却てさつぱりとその譯をも云ふがよからう。但、氣持がびッたり合つて、對坐してゐたく思ふ樣な人が、ちやうど無聊の折柄で、「もう暫く、今日はまア一つゆつくり落著いて」などいつて引留めるやうな場合はこの限ではないであらう。阮籍は氣の合つた來訪者には青い眼をして愉快さうに迎へたといふが、これは誰しもあるべき事だ。別段何の用といふ事もないのに、飄然と人がやつて來て、ゆつくりと話をして歸つて行く、これは實にいゝ。又手紙も、「久しくおたよりを申上げなかつたから」などとだけ書いてよこしたのは、誠に嬉しい。

【文旨】これも長閑な心靜かさを喜ぶ筆者の氣分を述べた一つで、「互のため益なし」までは寧ろ平凡。「心づきなき事あらむをりは、なか〳〵その由をもいひてむ」は、「厭はしげに」いふよりも、寧ろさつぱりと「今日は實は少少差支があつてゆつくりお話も致し兼ねます」といふ風に、さつぱり言つて了ふ方がいゝといふので、こゝにもさ

らりとした筆者好みが見えてゐる。「おなじ心に」から以下は、飄然として物にこだはらず、理窟ぬきにさらりと行かうといふ筆者の好みで、斯うした思想も隨所に見えてゐる。前後矛盾したやうだが決してさうでない。人情の機微はこゝに存するのである。

【語義】○さしたる事なくて　格別これといふ用事もなくて。○人のがり　人の許へ。○とく　早く、さッさと。○久しく居たる　人の久しく居るのは、長尻をしてゐるのは。○むつかし　うるさい、厭はしい、迷惑だ。○向ひたれば　對坐してゐると。「たれば」は「てあれば」の約で、「てゐると」の意。○さはりて　差支へて、支障を來して。この前後の文脈について、「かやうに種々の方面に妨げをなして時を移すことは、御互にとつて何の利益もない」といふやうに、「心もしづかならず」と引離して別に一文節を爲す如く解する說もあるが、私は「人と向ひたれば……時を移す（モノデ、ソレハ）互のため益なし」と續くものと考へてゐる。○厭はしげに　いやさうに、さも厭はしいといふ風に。○心づきなき事あらむをりは　心にそまない、人に長居されるのが自分の氣に副はない事のある樣な折には。「あらむ」は「ある」の婉曲敍法。○なかなかその由をもいひてむ　却てその旨を客にいふがいゝ。「いひてむ」はこゝは「いふがいゝ」といふ選擇の意と見てよからう。○おなじ心に　同じ心で、ぴッたりと心持が合つて。平素からよく氣が合つてゐてといふよりも、その場合妙に意氣相投じてといふ心持で、「向はましく思はむ」の副修を成してゐるのである。○向はまほしく思はむ人　相對してゐたいと思ふやうな人。こちらが向ふと對坐してゐたいと思ふ人といふのである。○つれづれにて　所在がなくて、恰度ひまで無聊に苦むやうな場合で。○今しばし云々　まアもう暫くいらつしやい、今日はゆつくり落著いて話しませうといふ意。○この限にはあらざるべし　この限ではない、これは例外だ。斯ういふ場合はゆつくり話し込むもいゝといふのである。○阮籍が青き眼　阮籍は晉代の竹林の七賢の一人で、氣の合つた客が來ると青眼で迎へ、いやだと思ふ客が來ると白眼で迎へたといふ。○その事となきに　別段これといふ用事でもないのに。○のどかに　しづかに落著いて、ゆつくりと。○歸りぬる　歸つて行く、歸つて了ふ。○久しく聞えさせねば　久しくおたよりを申上げないから。「聞え」は「いふ」の敬語動詞、「させ」は敬相の助動詞。○おこせたる　よこしたのは。

第百七十一段

貝をおほふ人の、わが前なるをばおきて、よそを見わたして、人の袖のかげ、膝の下まで目をくばる間に、前なるをば人におほはれぬ。よくおほふ人は、よそまでわりなく取るとは見えずして、近きばかりおほふやうなれど、多くおほふなり。碁盤のすみに石を立てゝはじくに、むかひなる石をまもり彈くはあたらず。わが手もとをよく見て、こゝなるひじりめをすぐに彈けば、立てたる石必ずあたる。

【通解】貝覆ひをする人が、自分の前にある貝をばさしおいて、よその方をずうーッと見渡して、人の袖のかげや、膝の下まで目を配つてゐる内に、自分の前にある貝をば人に覆はれて了ふ。うまくふせる人は、よその方まで強ひて取ろやうには見えないで、手近のばかり覆ふやうだが、それでゐて澤山かぶせて勝つのである。碁盤の隅に石をおいて彈くのに、向ふ側にある石を見守つて彈くのは當らない。自分の手もとをよく見て、手もとにある聖目の所を眞直に彈くと、置いた石が向ふの石に必ずあたるものだ。

【文旨】手許に氣をつけよ、他に氣を配つてゐると手許が拔ける、他を見る前に先づ自ら省みよといふので、儒教系のさうした樣々の教訓を擧げるに先立つて、先づ卑近の遊戯に例を取つたのである。カルタなどでも吾々の屢

歴經驗する事で、慥かに一面の眞理を含んでゐる。

【語義】○貝をおほふ人　貝覆ひをやる人。貝覆ひといふ遊戯は、貝合はせの類で、平安朝末期から行はれたやうだが、その方法は明かでない。畢竟貝合はせと同じく、場に貝を散らして置き、條件に合ふ貝を覆ふ遊戯と考へられる。○おほはれぬ　覆はれて了ふ。○わりなく　無理に、強ひて、むやみに。○石をたてて　石をおいて。碁石とすれば丸いから立ちはせぬ、特別に立てるやうに出來た石といふ趣でもないから、これは「置いて」の義と見てよからう。○まもり　見守つて、見詰めて、じつと覘つて。○こゝなる　手許にある、手近にある。○ひじりめ　聖目。今日所謂セイモク、卽ち碁盤の中央と上下と左右と四隅とに合計九ヶ所打つてある點の事だらう。「ひじり目」は所謂セイモクでなく全體の筋をいうたもので、こゝも手近の筋といふ事だらうといふやうな說もあるが明かでない。向ふの隅のセイモクにおいてある石をこちらの隅のセイモクと見て差支ないやうだ。○すぐに　まつすぐに。

萬のこと、外にむきて求むべからず。たゞこゝもとを正しくすべし。清獻公が言葉に、「好事を行じて、前程を問ふことなかれ」といへり。世を保たむ道もかくや侍らむ。內を愼まず、輕くほしきまゝにして、みだりなれば、遠國必ずそむく時、始めて謀をもとむ。「風にあたり、濕に臥して、病を神靈に訴ふるは、愚かなる人なり」と醫書にいへるが如し。目の前なる人の愁をやめ、惠をほどこし、道を正しくせば、その化遠く流れむことを知らざるなり。禹の行きて三苗を征せしも、師をかへして德を布くには如かざりき。

【通解】何事によらず、外に向つて求めてはいけない。たゞ手許を正しくするがいゝ。清獻公の言葉に、「唯いゝ事を行つて居て、さきざきの事などは考へないがいゝ」というてある。世を安らかに治める道もこの通りであります。內部の政道を愼まず、輕はづみに氣儘放埒で、ふしだらの事をしてゐれば、遠國が必ず叛く、その時になつて始めてどうしたものかと計策をもとめてゐる。その愚かさは恰も「風に當つたり、濕氣のある所に寢たりして、その爲めに病氣にかゝつておきながら、どうか病をおたほし下さいと神樣に願懸けするのは、馬鹿な人である」と、醫學の本にいうてある通りである。さういふ連中は、目前に居る人の苦しみ訴へてゐる所をやすめ、恩惠を施し、政道を正しくして行けば、その德化が次第に遠く流れ及ぶといふ事を知らないのである。禹が親しく軍を出して三苗を征したのも、その效は軍を還して德を布いたのには及ばなかつた——遠征するよりも手近に德を布いた方が遙かに其の效が多かつたのである。

【文旨】外に求めるよりも手許を正しくせよといふ事を儒教方面の引例によつて詳悉し、更に挿入的に醫書の文句まで引いてゐるのである。「醫書にいへるが如し」の文脈は、

內を愼まず……謀をもとむ

（ソハ恰モ）風にあたり……と醫書にいへるが如し

（カ、ル輩ハ）目の前なる……ことを知らざるなり

といふ筋と見てよからう。

【語義】○こゝもと　手許、自分の手近の所。○清獻公　宋の趙抃のこと。宋の仁宗英宗神宗に歴事し、歿後清獻と謚された。○好事を行じて云々　人は只いゝ事をしてゐればそれでよい、先き先きの事まで考へてはならぬ、といふ意。「前程」はゆきさきの道のりをいふ語。この句は清獻公座右銘といふ事だが、出典不明。○世を保たむ道　世の中を治める道、政道。○內を愼まず　內部卽ち側近の政道を愼まないで。○輕く　輕率で、輕はづみで。○ほ

しきまゝにして　勝手氣儘で、放縱で。○みだりなれば　やたら無性だと、妄慢にして居ると。○遠國必ずそむく時「遠國必ずそむく、その時」の略。○風に當り濕に臥して　風に當れば寒疾に懼り、濕氣にふれゝば腹疾になるといふ。さうして自ら病氣を招きながら、而も病氣になつた曉といふ意。○病を神靈に訴ふ　病氣のなほるやうに神に願懸する。○愁をやめ　愁訴する所の苦みを休めてやり。○禹の行きて云々　書經の大禹謨に、禹が帝堯の命を受けて三苗といふ國の亂を討ちに行つたが、容易に從はなかつた、そこで禹は伯益の建議に從ひ兵を止め師を還して國内に德を布いた所が、三苗も間もなく服して來たといふ事がある。「三苗」はその頃江南荊揚の間に在つた蠻國で、險を恃んで亂を爲したのである。

第百七十二段

若き時は、血氣内にあまり、心物に動きて、情欲おほし。身をあやぶめて、碎け易きこと、珠を走らしむるに似たり。美麗を好みて寶を費し、これを捨てゝ苔の袂にやつれ、勇める心盛にして、物と爭ひ、心に恥ぢ羨み、好む所日々に定らず。色にふけり、情にめで、行を潔くして、百年の身をあやまり、命を失へるためし、願はしくして、身の全く久しからむことをば思はず。すけるかたに心ひきて、ながき世がたりともなる。身をあやまつことは、若き時のしわざなり。

【通解】　若い時は、血氣が内にあり餘り、物毎に心が動いて、色々な欲望が多い。一身を危くして、身の破滅を招き易いこと、恰も珠を走らすがやうである。美麗を好んでその爲めに財貨を費し、さうかと思ふと急に氣が變つて、又その美麗なものを捨てて、墨染の姿に身をやつし、勇み氣が盛で、兎角人と爭ひ、何かにつけて心の中に恥ぢ羨み、今日はこれ明日はあれと好みがしよッちう變つて一定しない。戀愛に耽り、なさけにほだされ、小きみのよい行ひをして、百年の天壽を保つべき大切な身を誤り、一命を失つたやうな例がやつて見たくて、我が身の安全長久であるやうにといふ事は考へない。兎角好色風流の方面に氣が引かされて、末の世迄の世間話の種にもなる。このやうに身を誤る事は、若い時の所行なのだ。

【文旨】　若い者は血氣が盛で思慮が淺い、兎角物事にむきになつて、氣が變り易く、一時の感情の爲めにあたら一生を誤り、一身を犧牲にする、さうした思想を情調本位の筆で詳悉したのである。多少極端でもあり、輪郭的な概念的な描寫ではあるが、たしかに青年の心理の一面を摑んではゐる。「色にふけり……願はしくて」の所の文脈は二樣に考へられよう。

色にふけり　情にめで　＝行を潔くして　百年の身をあやまり　命を失へる　＝ためし＝願はしくて

色にふけり　情にめで　行を潔くし　て　百年の身をあやまり　命を失へる　＝ためし＝願はしくて

前者は、若者は兎角色にふけり情にめでる、そして昔の人の行を潔くして身をあやまり命を失つた例が願はしい、といふのであり、後者は、昔の人の色にふけり情にめで行を潔くして百年の身をあやまり命を失つた例が願はしい、といふのである。構文上からは色々に理窟もつけられようが、思ふに筆者の頭はさうはつきりと片付いてゐたのでなく、その邊頗る非論理的に只ずる〳〵と書いて行つた趣の文だと見るのが自然だらう。

【語義】　○血氣　所謂血の氣が多いといふこと。若い者は活力が盛で、自然はやり氣ですぐといきり立つ、それ

をいふ。○心物に動きて　物に觸れて心が動く、何かに接するとその度毎に心の中が動搖する。○碎け易き　失敗して身を亡ぼし易いといふのを、下に玉の譬喩を引いた關係上「碎け易き」といつたのである。○玉を走らしむる　に似たり　玉碎といふやうな熟語もあつて、玉は碎け易いとなつてゐる、玉は貴重な物だからころがり落したりなどせぬやうに大切にして置くべきもの、それを何かの上に走りころがすといふので、その内には自然無謀の振舞をして貴重な一身を亡ぼすといふ心持も利いてゐる、そこにこの譬喩の用意があるとも見られよう。○美麗　美衣美屋凡て美しくきらびやかなもの。○これを捨てて　寶を費して求めた美麗なものをすてて。氣が變り易くて、一心に美麗を好みその爲めに莫大な金錢を費すかと思ふと、又それを捨てて了つてといふ意。○若の袂　僧衣をいふ歌語。○やつれ　身をやつし。ふと世を捨てて墨染の姿に身をやつしたりする。○勇める心　勇む心、勇み氣。はやり立つてむきになつて事をするのをいふ。○物と爭ひ　やたらに他人と爭ひ。○恥ぢ羨み　自分が人に劣つてゐる事をしみ〴〵恥しく思ひ、人が自分にすぐれてゐる事を羨み。○情にめで　情にほだされ。人のなさけをうれしいものに思つて感激する。○行を潔くして　小氣味のよい行をして。一身を犧牲にして人の難に赴くといふやうなのをいふ。○百年の身　百年も生きられるからだ。大事に使へば百年も保つ大切な壽命といふやうな心持の語。○ためし　例、前例。古人などのさうした例をいふ。○願はしくて　自らやつて見たくて。○身の全く　身が全くて、身を全うして。身を誤り傷つくる事なくといふ思想。○久しからむこと　長生きをしてゐたいといふこと。○すけるかた　好色とか風流とかいふ方面。○心ひきて　心が引いて、その方に氣が引かれて。○なき世がたり　長い世間話。自分が死んで後まで長く世間の噂の種になつてつまらぬ浮名を流す。○身をあやまつことは云々　身を誤るのは若い時のしわざだ。人は兎角若い時の斯うしたしわざに因つて大切の身を誤るものだといふ思想。

老いぬる人は、精神おとろへ、淡く、おろそかにして、感じ動くところなし。心おのづから靜かなれば、無益のわざをなさず。身をたすけて愁なく、人の煩なからむことを思ふ。老いて智の若き時にまされること、若くして貌の老いたるにまされるが如し。

【通解】年取つた人は、精神が衰へ、淡泊で、物事に深くこだはらず、心に衝動を感じる事がない。心が自然と平靜なので、やたらにつまらぬ事をしない。身を大切にして心に愁ひがないやうに、そして他人に迷惑を掛けぬやうにと心掛けてゐる。年取つてから智の若い時にまさつてゐることは、丁度若い内に容姿が年取つてからにまさつてゐるやうなものだ。

【文旨】前節を受けて、年取つた美點――精神の衰へた結果心が平靜になつて凡てが消極的になる、從つて若い者のやうな血氣の無謀はしない。年取れば容貌は衰へて若い者に及ばぬ、丁度それに反比例して、それだけ思慮は若い者よりまさつてゐる、といふ美點を高調したのである。筆者は第七段などに於て長生の悲哀を縷述して年寄りの醜態――ぶざまな姿で人中に出しやばり、圖々しく死慾をかく、さうした醜態を詳悉して殆ど完膚なき迄年寄を攻撃してゐる。而もこの段に於ては、若い者の血氣を戒めて、ひどく年寄を持上げてゐる。一見矛盾してゐるやうだが、決して矛盾ではない。兼好は常に物の兩面を見る事を忘れぬ。凡て自分の趣味觀の上に立つてその美點と缺點とを鮮かに見分けてゐる。そしてその基底は、いつも、さらりとして物に執著せず、自然と人情美が現はれて、而もつゝましく身を守るといふ所に在るのである。

【語義】○淡く　淡泊で、あくどくなく。○おろそかにして　疎略で、物事に深くこだはる事がなくて。○無益のわざ　無益のこと、役にも立たぬつまらぬしわざ、血氣に驅られた無謀な振舞。○身をたすけて　自分の身を大事にして。○愁なく　自分の心に心配がなく。「愁なからむ事を思ふ」といふやうに下に掛つてゐる文脈。○人の煩なからむこと　他人の迷惑のないやうにといふこと、他人に迷惑を掛けぬやうにしようといふこと。

第百七十三段

小野小町がこと、極めてさだかならず。衰へたるさまは、玉造といふ文に見えたり。この文清行が書けりといふ説あれど、高野大師の御作の目錄に入れり。大師は承和のはじめにかくれ給へり。小町が盛なること、その後のことにや、なほおぼつかなし。

【通解】小野小町のことは、甚だはつきりしてゐない。其の小町の衰へた有様は、玉造といふ文に見えてゐる。この文は、清行が書いたといふ説もあるが、高野大師の御著作の目錄にはいつてゐる。大師は承和の初年におかくれになつた。小町が盛んであつたのは、その後のことであつたらうか、やはりどうもよく分らない。

【文旨】小野小町に興味を以て其の傳記を知りたく思つたが結局はつきりしないといふのである。

【語義】○小野小町　六歌仙の一人、非常な美人といふ點で古來有名である。○さだかならず　はつきりしない、しつかり分らない。○玉造といふ文　「玉造小町子壯衰書一首幷序」として、群書類從卷百三十六にあるのの事だらう。五言古詩に序文を添へたものである。○清行　三善清行を指したものだらう。清行は貞觀中文章得業生となり、累進して大納言に至つた、延喜中、時弊に關する意見十二條を上つた。○高野の大師　弘法大師である。弘仁七年高野山に金剛峯寺を建て、承和二年三月高野山で入寂した、年六十二。○なほおぼつかなし　やはりはつきりせぬ。こんな風に色々考へて見たがやはりどうも分らないといふのである。

第百七十四段

小鷹によき犬、大鷹につかひぬれば、小鷹にわろくなるといふ。大に就き小を捨つる理、まことにしかなり。人事おほかる中に、道を樂むより氣味深きはなし。これまことの大事なり。一たび道を聞きて、これに志さむ人、いづれの業かすたれざらむ、何事をか營まむ。愚かなる人といふとも、賢き犬の心におとらむや。

【通解】小鷹狩にいゝ犬を、大鷹狩に使つてゐると、小鷹狩にはよく使へなくなるといふ。大きいものに就いて小さいものを捨てる道理で、それは如何にも尤もな事だ。人間のする事は色々多くあるが、その中で、道を樂むといふ事ほど味ひの深い事はない。これが本當の重大事である。一度道を聞いて、これを行はうと志した人なら、どんな業がおろそかにならずにゐよう、何事をあくせくとやらう、道以外の事は凡ておろそかになり、せつせとやる氣がなくなる筈である。いくら馬鹿な人でも、利口な犬の心より劣つてゐよう筈はない。

【文旨】小鷹狩にいゝ犬でも、大鷹狩に使つてゐると、自然大物のみを目がける樣になつて、小鳥を目かけたくなり、小鷹狩にばいけなくなる。それは何事によらず大に就き小を捨てる道理で、如何にも尤もの事だといふて、本論に入る。人事中最も氣味深きは道を樂む事で、これが人生の眞の大事である。だから苟も道を聞いて之に志した人なら、小を捨てて大につく理から、道以外の何事も皆捨てられて、やる氣がなくなる筈。人間いくら愚かでも、まさか犬の利口なのに劣りはすまい。犬ですら大鷹に使へば小鷹には向かなくなる、即ち大に就いて小を捨てる。まして人間、よしや愚かな人でも、苟も道を聞き道に志せば必ず專心道を樂むやうになるに違ひない。憾むべきは世人の道を聞かぬ事、道に志さぬ事だ、といふのがこの一文の主旨である。筆者の所謂「道」は勿論佛道で、諸緣を放下して佛道を樂めといふ事であるが、さう限定して書いてゐないだけに、廣く一般に所謂「道」と解してもよ